
チートな高校生が異世界でがんばるようです

アラネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートな高校生が異世界でがんばるようです

【Nコード】

N5991R

【作者名】

アヲネギ

【あらすじ】

学校を抜け出しコンビニで買った昼ごはんを公園で食べてた主人公、黛四季は黒いジャージを着た名無しの神様の都合で異世界に飛ばされてしまう。「・・・誰?」「神だけど?」四季は黒いジャージを着た名無しの神様から貰ったチートな能力を使っているいろと頑張るようです。

プロローグ 魔物がいたり魔法もあったりするけど大丈夫（前書き）

初めまして、アヲネギです。

勢いで書きはじめました。

自己満足で書いてるようなものですが、「面白い！」とか言ってくれたら嬉しいです。

プロローグ 魔物がいたり魔法もあったりするけど大丈夫

俺は普通の高校生、名前は^{マユズシキ}黛四季。

身長は170前半の若干痩せ気味で容姿は普通の高校二年生。

かなりオタクの入ったどこにでもいる普通の高校生だ。

中学までは関西にいたけど、高校に進学するときに東京に引っ越してきた。

現在昼休み。

俺は弁当を買い忘れたため食堂ではなく学校の外のコンビニまで昼ごはんを買って近くの公園のベンチに座りながら昼ごはんを食べてる最中だ。

……余裕で校則違反だけどそんなの気にしない、だって昼休みの食堂は人が多いし。

俺の通ってる高校では外出届がないと下校時間以外は校門を出れない。

てかこのパスタ美味しいな、明日も買おう。

今俺はウォークマンで曲を聴きながらパスタを食べつつケータイで某巨大掲示板をみている。

「特に面白いスレもないなあ……」

コンビニまでごはんを買いにくる時、友達がなかなかついてきてくれないのは困るね。

話し相手がいないのはなかなか寂しい。

みんな「先生にバレたらやばいからやめとく」って言うんだよね。

授業中の居眠りと変わらんような気がするけども。

「あー美味しかった」

食べ終わったパスタの入れ物を公園のゴミ箱に捨て、またベンチに座る。

学校に行くにはまだ時間があるな。

よし、ちよつと寝よう！

人もいないしこのベンチで寝ても大丈夫やんね？



「・・・・・・・・・・はっ！」

やばい！寝すぎたか！？
ん？あれ？

「はい、どこ？」

何もない壁も床も真っ白な部屋の中心あたりで倒れていた。
え、ちよつと意味わからん、何これ？

「気がついた？」

誰かいるのか・・・・・・と思い起き上がって声のした方を見る。
上下黒のジャージを着た黒のショートヘアにメガネをかけた女の子

がいた。

「……誰？」

見たまんまの感想。

てか真っ白な部屋に上下黒のジャージっておい。

ちなみに俺は学校の制服が全身装備。

「神だけど？」

ちよっと何言ってるかわかんない。

てか仮に神だとして上下黒のジャージってどうなの？

別に黒じゃなかったらいいわけでもないけどさ。

「いや名前を聞いたんだけどね？」

「無い、好きに呼んだらいいよ、君は……黛四季だね」

なんで知ってんのさ。

「……なるほど。とりあえずここはどこ？」

さつきからずっと気になってたんだよね、何にもなくてなんか気味悪い。

「……どうでもいいけど個人的には微妙に散らかってる部屋の方が落ち着く。」

「ここは……天界と君のいた世界の間みたいなの？」

おーいちよっと待て。

「俺は死んだの？死んじゃったの？」

「とりあえず、君はこっち側の都合で異世界に飛んでってもらうことになったから」

なにこっち側の都合って。

てかスルーすんなよ。

誰かわかりやすいように説明頼む。

「ああ、異世界って言っても心配しないで。魔物がいたり魔法もあったりするけど大丈夫」

「いや大丈夫じゃないよね！？てか魔物って何！？」

「ゲームとか漫画に出てくるアレだよ、でも大丈夫、異世界でも生きていけるように君に能力あげるから」

「いやだから大丈夫じゃないよn・・・能力？」

てか神も漫画とか読むんかい。

じゃあ能力もゲームとか漫画に出てくる感じのやつなんか？

・・・・・・てかそうであってほしい、魔物とかいるなら尚更ね。

「そう、能力。」

「・・・・・・どんな能力？」

手のひらから味噌をひねり出す能力とかはやめて欲しい。
せめて味噌じゃなくて水で頼む。

「…………手のひらから水を出す能力がいいの?」

「心読むなよ! 味噌よりはマシだなんてだけだから!」

「ちなみにどんなのがいいか希望はある?」

希望か)

特にないけど何かいい感じのやつがいいな。

「お前が一番いいって思うやつで頼むわ」

とりあえず異世界とやらで生きていける能力がいいね。

「なら、『レプリカ偽神』で」

「…………え?」

「空想を操る能力だよ」

やばい説明されても全然わかんねえ。

「簡単に説明すると知ってる漫画、アニメ、ゲームに出てくる能力とか魔法を何でも自由に使える能力だよ」

…………チートすぎるでしょ。

かめはめ波を出そうと思ったら出せるわけでしょ?

「できるよ、他にも君が考えたような能力も使えるよ。もちろん漫画とかの能力は君が知ってる範囲でだけどね」

「逆に出来ないことは？」

「んー……。そういうの言っちゃったら面白くないでしょ？」

面白いかどうかの問題っすか。

それでも十分チートだから生きていくには困らないだろうからまあいいか。

「それじゃ、いまから異世界に飛ばすから、がんばってね」

そんな簡単に人飛ばしたり出来るのかこの神は。

「ok。じゃ、また機会があれば」

名無しの神様に別れの挨拶をする。

まあまた会う機会とかないと思うけどね。

「あっ！」

「ん？どした？」

「いや……。いつてらっしやい。」

名無しの神様がそういうと周りが急に暗くなり、俺の意識も遠のいた。

プロローグ 魔物がいたり魔法もあったりするけど大丈夫（後書き）

気が向いたら更新していきます。

なるべく一週間に一回は更新するようにします。

1話 全部現実だからね

目が覚めると草原が広がっていた。

ちよくちよく岩とか木もあるね、大自然って感じ。

……異世界がどうのこうのの話は夢であって欲しかったね。
目が覚めたら「なんだ夢か」みたいなのを期待したのになあ。

『全部現実だからね』

どっからか声が聞こえる。

声の主はアイツだな、名無しの神様。

……どこにいるのかわからんけどね。

『テレバシー念話』だよ、暇だから話しかけてみた』

とりあえずこっちも暇なんだけど……

『早速能力つかえば？』

え？能力？

『どんな能力か自分でもよくわかってないんでしょ？』

……言われてみればそうだなあ。

想像したらいいんだっけか？

『道具とか武器も想像したら出てくるよ』

まじかい、どんだけチートなんですか。

まあ空想を操る能力だから出来て当然なのか？

てかもはや神の力だよこれは。

あ、それで『偽神^{レプリカ}』なんか？

『まあ、そうだね。とりあえず試しにやってみなよ』

試しと言われても何を出せばいいのか……

『とりあえず双眼鏡とかで周りを見てみたら？』

そうっすね。

運が良かったら街くらいは見つけたりできるかもしれないしね。

「お、できた」

右手の上に光が集まり、双眼鏡ができた。

……これってめっちゃ便利じゃない？

『ね、できるでしょ？』

できたな、びっくりだわ。

とりあえず周りを見てみよう。

……おお、みえるみえる。

ずいぶん遠くに街っぽいのがあるね、しかもかなり大きいなあ、王都かな？

いや王様とかいるのかわからんけど異世界ならいるよね。

「とりあえずあの街に向かおうかな」

しかし歩くとなるとかなりつかれるなあ。
だいたいどのくらいで着くんかな……

『二週間ほど歩いたら双眼鏡無しでも見えるはずだよ』

長い！そして二週間かけてようやく肉眼で見えるだけかい！
てかさっきの双眼鏡もかなりの距離が見えるんだね、びっくりした
わ。

『君が想像した通りに作られるからね』

そうなんだ。

それより街にどうやって行こうか……

『能力つかえばいいじゃん』

そうだけどさあ……

なんかちよつと心配っていうかね。

『はやく使うなら使いなよ、見ててつまんない』

うっせ！

じゃあいまから能力つかったるわ！

あと俺は見世物じゃない！

——☆——

「はぁ……はぁ……つ、疲れた………どんぐらい進んだ
？」

あれから二時間くらい縮地を使って進んだ。

移動中に気づいたけど縮地って体力つかうんだっただね……。そして体力つかうとかお構い無しに進んだ結果、持久走の後みたいな疲れに襲われております。

無理だ……。もう動けん……

あと移動中にいろいろ能力を試してみたけど、できないこともいろいろあった。

まず一つ目は、二つ同時に違う能力を使えない。

ここでいう能力はゲームとか漫画のね。

ちなみに道具は二つ同時に作れた。

てか道具はいくらでも作れるっぽい。

……。慣れたら能力も二つ同時とかできるようになるんかねえ。

そんで二つ目。

俺が見たことない物は作ることができない。

たとえばこの世界の金とかね。

あと名前だけ知ってるってパターンのやつも作れないね。

……。けっこう欠点あるなこの能力。

『まあ『空想を操る能力』だから自分でちゃんとしたイメージもってないと無理なんだよね』

なるほどね、とりあえずどのくらい進んだかわかる？

『この世界の人が一週間かけて進む距離はすすんだね』

まだ二週間分すすんでないんかい、今日中に行けたらいいなと思
ってたのに！

とりあえずもう日も完全に沈んだし、今日はここら辺で野宿しよう
かな。

せめて風が防げるものが欲しいな、小屋的なものが………

……よし！

『なにをするの？』

錬金術だよ、両手をパンってやるアレ。

風を防ぐ壁と屋根つくればとりあえず寝れるじゃん？

『なるほどね』

「そうと決まれば！」

しゃがんで、両手を胸の前で合わせた後、地面に両手をつく。

……おお、みるみる俺の周りに壁が造られていき、最後に屋根
が作られて、完成する。

「とりあえず、これで寝れるな」

………これ、野宿なの？

1話 全部現実だからね（後書き）

こんにちは、アヲネギです。

つい最近P S 3が壊れたんですけど新しいのを買おうか迷ってます。

とりあえず今回四季くんが使った能力の説明を・・・

錬金術・・鋼の錬金術師。

誤字脱字があれば教えてください。

2話 はい、こんにちは

「あー・・・・・・・・よく寝たわ」

てかこの世界に人っているんかな？

いまだに誰とも会ってないから不安になってきたわ。

・・・まあいいや。

よし、とりあえず移動しよう。

縮地は・・・つかれるからいいや、なにか他のやつ使おう。

なににしようか、なるべく面白いやつがいいな・・・・・・・・
テレポートとか楽しそうだ、よし、テレポートにしよう！

てか今思うと初めからコレ使えばよかったんだな・・・・・・・・

『君起きるの遅いね』

おはよう名無しの神様。

これでもいつもよりかなり早起きなんだけどね。

休日とか起きる頃には外真っ暗だし。

『なんていうか・・・すごいね』

褒めてもなにも出ないよ。

『褒めてないけどさ』

まあいいじゃない。

てか名無しの神様、俺はこの世界の言葉とかわかんの？

『翻訳機能あるから大丈夫。でも字は書けないし読めないからね』

なるほど、人と話はできるわけだ。

まあその前に街に行く事やね。

とりあえず街の場所を双眼鏡で確認しようか。

……まだまだ遠いなあ。

『あ、私ちょつと席外す』

あいよ。

とりあえずテレポートだ、テレポート。

想像した場所に移動できるスグレモノ！

モノではないか、まあいいや。

だいたい1キロくらいの間隔でテレポートしていけばいいよね。

いきなり街にテレポートして不審者扱いされるのも嫌だし、街に近くなったら歩いていこうかな。

……どうでもいいけど、これがあれば遅刻とかしなかった
だろうなあ。

——☆——

「あゝ、ちょい休憩」

三時間ほどテレポートで進んだところで現在休憩中。

街の結構近くまで来たからね。

あと一息のところまで休みたくなるときってあるよね。

『結構すすんだね』

まあ、ちよつと頑張ったからね。

『能力あげた私が言うのもなんだけど規格外にもほどがあるね』

自分でもそう思うよ。

これがあれば国一つ敵にまわしても勝てそうだわ。

『国どころか世界中敵にまわしても大丈夫でしょ。あ、誰かこっちにくるよ』

え、マジ？

てかこんな何も無いところに人とかいるわけが……

『能力使えばわかるでしょ？』

……そうですね。

あれか、『視界ジャック』か。

SIRENの無印は難しいね、自分でもよくクリアできたと思うわ。

まあ、それはさておき早速やってみるかな。

……おお、視えるね。

しかも何人かに追われてるね。

盗賊とかその辺かな、追ってるのは。

『ね？ いたでしょ？』

いたね。

走ってこっちに向かってきてるね。

『どうするの？ 助けるの？』

正直スルーしたいけどこの近く通ったらどうせ俺も盗賊に絡まれる
んだろうし助けるよ。

『ほら、もうすぐそこだよ』

ですね、まあ適当にがんばりますわ。

お、見えてきた見えてきた。

フード被つとるね、顔がよく見えない。

「おーい、ちょっと止まっ・・・」

華麗にスルーして走ってったよ、まあ仕方ないね。

「さっきのフードのヤツ、戻ってこい」

「え？ あ、あれ!？」

『なるほど、『黄金練成（アルスⅡマグナ）』だね』

知ってるのね、名無しの神様。

「はい、こんにちは」

「あ、はい・・・こんにちは・・・」

やっぱすごいね『黄金練成（アルスⅡマグナ）』は。
世界に干渉し、自分の思い通りに現実を思った通りに歪める魔術。
いや、「歪めてしまう」魔術やね。

自分が「可能だ」と思えばどんな事でも可能になるけど、逆に「不可能だ」と思ってしまうえば決して実現しなくなる。

ちなみに声に出さなくてもよかったんだけどそこもやっぱり気分。

「お？何だコイツの仲間か？」

そして盗賊も追いついた。

数はだいたい十人くらいやね？

「お前、追われてたよな？」

「ええ、馬車で移動してたんですけどコイツらに襲われて・・・」

なるほどね、やっぱ盗賊とかその辺か。

「おい！無視してんじゃねえ！」

うるさいって、ちゃんと聞こえてるから。

「なるほど、ところで街はこっちの方であってる？」

「あってますよ、私も王都に向かう途中でした」

よかったー、しかも王都だってよ。
城とかあるのかな？
気になるわー

「おい！無視とか傷つくからやめろ！」

傷つくんかい。

「聞こえてるから落ち着けよ。で、なんだっけ？」

聞いてはいないけど聞こえてはいたんだよ、何か喋ってるなーって程度だけど。

「金目の物を置いていけ！」

「やだね、欲しいなら力づくで奪えよ、盗賊なんやろ？」

ま、俺はこの世界で使える金なんて持ってないわけだけど。
それにこの世界で価値のあるものも手に入れた覚えは無いね。

「ちょ！何言ってるんですか！この人数ですよ！？勝てないです！」

まあ、そうなるよね。

「言ってくれるじゃねえか！」

そう言っつて、盗賊の一人が剣を持って突っ込んでくる。
よし、それじゃ能力つかってみようか、戦闘は初めてだからテンションあがるわ。

2話 はい、こんにちは（後書き）

こんにちは、夜中にコンビニに行くとか何かテンションがあがるアヲネギです。

特に行ってる途中とか特にヤバイですね。

何がヤバいかって言うの特になにもヤバくないんですけどね。

強いて言うならテンションがあがるくらいです。

それはさておき今回四季くんが使った能力の説明を・・・

視界ジャック…SIRENの登場人物が使う能力で、他人の視界を見ることが出来る。

黄金練成…とある魔術の禁書目録に出てくるアウレオールの魔術。

次は戦闘の予定です。

うまく書けるかどうか不安です。

誤字脱字があれば教えてください。

3話 あら不思議

「おおおおおお！」

盗賊の一人が俺に向かって走ってくる。

剣が俺に触れるよりも先に、突っ込んできたヤツの後ろにテレポトする。

「なっ!？」

おお、驚いてるねえ。

「そうだなあ、殺すつもりはないけど・・・」

そして『ツイスター』の能力を使い、相手の左腕を掴む。

RAVEに出てくるダークブリングの一つで、触れたものを捻る能力。

その能力を使い腕を掴めば・・・

「ぎゃああああ！」

当然、腕の骨は折れる。

「抵抗できなくなる程度には攻撃するよ？」

「す、凄い・・・」

「い、行け！数ではこっちが勝ってるんだ！」

お、アイツがお頭かな？

・・・まあお頭倒したら逃げるとも思えないけどねえ、こういう連中は。

「死ねっ！」

知らないうちに近くにまで来ていた盗賊が剣で突きを繰り出す。避け・・・ないでいいかな。試したい事もあるし。

「こいつ・・・剣を素手で受け止めるなんて・・・！」

「おー危ない危ない」

とりあえず左腕で剣を掴みながら、右腕で相手の顔面をドツク。スカツとするね！

使った能力は『ホームクルス 人造人間 グリード 強欲』

体内の炭素の強度を自在に変えられる能力・・・だったような気がする。

横にいるフードを被った人が驚く。

そして俺も少しびっくりだわ、剣を掴んでもなんともない。

「自分の体を変化させる魔法？」

「あゝおいしい。ま、それはさておき・・・」

それだと『黄金練成（アルスⅡマグナ）』の説明がつかんでしょ。

「ほら！はやくこいよ！」

「ぜ、全員だ！全員でかかれ！」

「「おおおおおお！」」

おー、がんばるねえ。

ちなみにさっき腕の骨を折ったヤツらは近くに転がってる。

しかし全員といいつつお頭は高みの見物ですかい、お前も仕掛けてこいよな。

・・・まあいいや、それよりもまずは包囲して突っ込んできて盗賊達をどうやって倒すかだねえ。

「よし、ちよつとこっちきて」

「え？なんです——」

フードの人の肩に手を乗せて敵の包囲の外側にテレポートさせる。

「そこでちよつと待ってて！」

よし、これで周りを気にせずになれるね。

盗賊の一人が剣を振り上げ、そのまま俺の頭を狙って振り下ろす。

「八卦掌回天！」

そう、ナルトのあれです。

周りにいた盗賊が回天で吹っ飛んでいく。

あっけないなあ・・・

「よし、あとはお前だけだぞ？」

どや？って感じでお頭に言ってやる。

「ひっ！ま、待ってくれ！」

「いや待ってるやん、俺まだ一步も動いてないやん。はよかかってこいよ」

「降参だ！降参する！」

怯えきってるお頭。

俺はテレポートでお頭の横に行き、肩を組む。

「ひいっ！」

「まあまあ、お前の仲間はお前の命令に従ってこの有様やん、お前だけ降参ってのはダメでしょ」

「ゆ、許してくれ！」

やばいこの人ビビりまくってる。

そうだなあ・・・

「おーい！ちょっとこっちきて！」

とりあえずフードのヤツを呼んだ。

ぱたぱたとこっちに走ってくる、なんか和むわ。

「どうしたんですか？」

「いやな、コイツさっきの盗賊のお頭っばいけど、どうする？」

「どうするって・・・きゃっ！」

話してる間にお頭にフードのヤツを人質にとられた。

「あらら・・・」

ちゃんと拘束するべきだっかな・・・
フードのヤツは首元にナイフ突きつけられてるし。

「へへ・・・小僧！」

「ん？なんすか？」

金目の物を全部出せとかいいそうだなあ・・・

「金目の物を全部出せ、そうすればコイツは助けてやる！」

予想通りすぎるだろ！

そもそも金目の物の前に金すら持ってないわ！

持ってるのはウォークマンとケータイと財布くらいだし。

・・・がつつり金目の物持ってたわ。

「人質とかやめとけ、さっきの戦い見てたんだろ？意味ないぞ」

「うるせえ！馬鹿にしゃがって！」

怒った？怒っちゃったか？

「俺はここから一步も動かずに人質を回収できるんだぞ？」

「デタラメ言ってるじゃねえよ！」

「じゃ、実際にやってやる。人質、こっちにこい」

「え？あ、また・・・」

「なっ!？」

おお、びっくりしとる。

使った能力はさっきと同じ『黄金練成（アルスⅡマグナ）』
そうだ、ついでお頭の正面にテレポートしてナイフを掴む。

「はい、こんにちは」

「お、お前っ！ナイフを素手で!？」

「俺の手よりもナイフを見ろよ」

「お、俺のナイフが!？」

「あら不思議、お前のナイフが腐ってます！」

使ったのは『荒廃した腐花』
ラフラフレシア

めだかボックスに出てくる触れたものを腐らせる過負荷。
マイナス

「あ、ああ・・・」

あ、腰抜かした。

よし、ちょっと寝てもらおうかな。

しきは さいみんじゅつ を つかった！

おかしらは ねむりはじめた！

「よし、初めての戦闘にしては結構いいんじゃない？」

「え・・・初めてだったんですか？」

あ、声に出た？

「戦ったのは初めてやね、移動とかには使ってたけど」

なんかめっちゃ驚いてる・・・

いや俺自身も結構驚いてるけどね。

「あなたは・・・何者なんですか？」

「何者に見える？」

「どこかの貴族ですか？ あっ！それともすごい魔法使いとか！」

・・・ああ、もしかして制服が貴族っぽく見えんのかな？
魔法使いではないけどね。

「いやいや、ただの高校生だよ」

「こーこーせー？ってなんですか？」

えー・・・・・・・・

この世界に学校とかないん？

「学生だよ、学生」

「絶対嘘です！そんなわけありません！」

何で！？

高校生は学生でしょ！？

「いやホントだって！こんな服装で俺くらいの歳の人間は高校生しかないから！」

「・・・・・・・・え？」

なんかめっちゃ驚いてる・・・・・・・・（二回目）
別に何もおかしな事言っていないよね？

「あの、人間って・・・・・・・・あの人間ですか？」

どの人間やねん。

『君の考えてる人間であってるよ』

急にだ名無しの神様。

『他に呼び方ないの？神様だけでもいいと思うんだけど』

名無しの神様の方がなんかしっくりくるんだよ。
てか何であるフードは人間ってだけであんなに驚いてるん？

『言うの忘れてたけど、この世界に人間はいないんだよ』

いや俺の目の前にいるやん。

そしてさっきの盗賊も人間だったし。

『髪の色も目の色も黒じゃなかったでしょ？』

いやそうだけどさ、外国人もちがうやん。

『そうだけど・・・とにかく、彼らは人間とは違う種族なんだよ』

じゃあ何なのさ？

『いっぱいいるよ、吸血種^{ヴァンパイア}とか龍人種^{ドラゴニユート}とか獣人種^{セリアンスロープ}とか。特に獣人種^{セリアンスロープ}はいろんな種類の人がいるね』

なんかゲームみたいだ・・・

『とにかく、この世界で人間は言い伝えに出てくるだけの存在みたいなものなの。あ、ちよつと席外す』

・・・あいよ。

てか言い伝えに出てくるだけの存在ね。

御伽話の登場人物みたいなものかな？

「・・・・・・・・どうしたんですか？」

「ちよつとぼーつとしてた、すまん」

「いえ・・・それでその、人間って・・・・・・・・」

これは答えないほうがいいんかね？
いやでもさっき普通に人間って言っちゃったしさあ・・・・・・・・
まあいいや。

「ああ、俺は人間だよ」

「・・・本当ですか？」

何故疑うの・・・・・・・・
そいやあの名無しの神様、この世界で黒髪黒目は珍しいって言うってな。

「その証拠に髪も目も黒いぞ」

「そ、そうですけど・・・・・・・・」

その反応だと言い伝えの人間も黒髪黒目なんだね。
まあいいや、とりあえず話題を逸らそう。

「そうだ、名前は？」

「あっ！おくれてごめんなさい！私、レイラ＝ランドロスって言います」

「レイラ、でいいな？」

「はい！よろしくお願いします」

ぺこり、とレイラは頭を下げる。

・・・なんかかわいい。

てか顔みせてくれんのかな？

「あの、あなたはの名前は？」

「ああ、すまん。黛四季^{マユズミ}って言うんだ」

「変わった名前ですね・・・」

「あ、こっちだとシキ^{マユズミ}だな。シキって呼んでくれ」

「どっちにしても変わってますよー」

この世界では珍しい名前だろうね。

俺のいた世界では似たような名前のヤツが山ほどいるけどさ。

「てかさ、フードとらんの？」

「と、とったほうがいいですか？」

・・・なんか嫌がってる？

別に指名手配犯でもないなら顔みせてくれてもいいよね？

「そりゃね、顔気になるし」

レイラはすこし迷った後

「うう・・・それじゃあ、とります」

そう言い、フードをとった。

・・・銀髪に赤目で肌はかなり白い、女の子だった。
歳は14か15くらいか、俺より年下な感じがする。
・・・性別はなんとなくわかってたけどね。

「こ、これでいいですか？」

「肌めっちゃ白いやん」

うん、答えになってないね。

自分で言っついてなんだけど、謎な答えだ。

『これはペンですか』って聞かれたのに『はい、その角を左に曲
がれば警察署です』って答えるのと同じくらい謎だ。

「吸血種^{ヴァンパイア}はみんな色白なんですよ、はい！もうおしまいです！」

あ、フード被っちゃった。

てか他の吸血種^{ヴァンパイア}を見たことないからなんとも言えないけどさ。

「なるほどね、てか馬車は大丈夫なん？」

「あ・・・忘れてました」

おーい。

忘れちゃいかんですよ。

「そうだ、ついてきてくれませんか？まださっきの人たちみたいな
のがいるかもですし・・・」

「ああ、いいよ。てかレイラは戦えないん？」

さっき魔法がどうのこうのって言ってたからなんか気になった。
とか吸血種^{ヴァンパイア}って吸血鬼みたいな感じなんか？
なんか魔法とか強そうなイメージあるわ。

「魔法ならいっぱい使えます！」

えっへん、とそれなりにある胸を張るレイラ。

・・・多分援護とかしてもらわなくても大丈夫だけどさ。

「頼もしいな、てかさっきの連中みたいなのが馬車の方にもいるならやっぱまた戦うことになるよね」

とりあえず、ブレザーを腰に巻き、へその前あたりで袖を結ぶ。

うん、やっぱこっちの方が動きやすいね、カッターシャツ万歳！
ちなみに俺は制服でもシャツをズボンの中に入れない人です、たとえブレザーを着ててもね。

友達に「ダラしないな」と言われようと教師に注意されようと直す気はない、面倒だしね。

「かっこいい・・・」

「え？」

「なんかそれすごく似合ってます！いいなあ・・・私も真似してもいいですか！？」

「ああ、いいんじゃない？」

制服が似合ってるって言われても正直嬉しくないけど悪い気はしな

いね。

そしてレイラ、全身を覆うマントみたいなそれだとかかなり動きづらいと思うぞ。

「う、動きづらいです・・・」

ですよー

もう普通に着てたほうがいいよ絶対。

「で、話戻すけどもし戦闘になったら援護とかしてくれるの？」

「します！あ、でも王都の兵士がもうなんとかしてるかもしれないかもしれませんよ？」

「まあ行くだけいこうか。そもそも俺とレイラの目的は王都までは同じわけだしさ」

行って何するかは考えて無いけどねー。

そんな感じで俺はレイラに馬車がある場所に案内してもらう。

「王都になににいくんですか？」

「特に考えてないなあ、レイラは？」

「私も特には・・・そうだ！シキさんは何処の出身なんですか？」

「この世界には無い日本って島国やね」

「ニホンですか・・・ってええ！？」

一瞬知ってるのかと思って俺もびっくりしたわ。
ちなみにレイラは俺が人間って知った時と同じくらいびっくりし
る。

「ニホンって・・・あのニホンですか!？」

どの日本やねん。

「どの日本か知らないけど多分あってる」

「そうだったんですか・・・あ、もしかしてニホンには人間がた
くさんいたりするんですか？」

たくさんどころか世界中にいるわ。

「たぶんレイラが思ってるよりは多いよ」

「そうなんですかー」

世界中の人口って何人くらいだっけ？

何人かわすれたけど68億前後だったよね、そんな数字言ったらレ
イラが気絶しそうで怖い。

てか俺は元の世界に帰れんのかねえ……………

「いや、無理っぽいなあ」

「シキさん?どうかしたんですか?」

あら、また声にでてた？

「ちょっと考え事してた」

「そうだったんですか・・・それよりほら！王都の兵士が馬車の周りにいっぱいいますよ！はやく助けてもらいましょう！」

おお、鎧を着た人がいっぱいいる。

・・・いや待てよ？

人間はこの世界には俺しかないわけでしょ？

王都の兵士なんかに見つかったらなにされるか・・・最悪解剖とかされかねん。

・・・もっと早くに気づくべきだったね。

「いや、ここはあえてスルーしようか」

「なんでですか？」

「俺が人間だからだよ。バレたらいろいろ面倒じゃん」

これ以上の理由はない！

というか説明するのがめんどくさい。

「ダメですよ、ちゃんと私たちが襲われたことも話さないとダメですし・・・って逃げないでください！」

そう言って、レイラは俺の襟を掴む。

「うぐっ！や、やめろ！解剖だけはっ！」

「いきますよ！まったく・・・逃げようとしなくてください！」

「ヤメロー！シニタクナーイ！」

レイラは俺を引きずって兵士の方角に歩いていった。
・・・俺、ホントに大丈夫なのか？

3話 あら不思議（後書き）

こんにちは、無事に進級できてちょっと調子に乗りつつあるアヲネギです。

無理かと思ったけど案外助かるもんですね。

来年こそ気持ちだけは真面目にがんばっていきます。

それではまたまた今回出てきた能力の説明を・・・

ツイスター…RAVEに出てくるジラフのもつ「ねじれ」のダークブリングの能力。

人造人間 強欲…鋼の錬金術師にでてくる能力。

八卦掌回天…NARUTOに出てくる日向家の技。

さいみんじゅつ…ポケモンの技。

荒廃した腐花…めだかボックスに出てくる江迎怒江の過負荷。

黄金練成は前に説明したんで省かせてもらいます。

ていうか荒廃した腐花って主人公が使うような能力じゃないですね

W W

4話 いえ違います、人違いです

『で、君は何で王都の兵士に囲まれて武器を突きつけられてるの?』

俺が聞きたいわ………

ちなみにレイラは俺の横で苦笑いしてる。

「あ、あの……私たち本当に怪しいものじゃなくて、えっと……とりあえず武器を下ろしてください」

『……ホントになにがあったの?』

だから知らんよ本当に………

俺の目と髪の色が怪しいとかそんな理由じゃない?

「黒髪のお前、さっきの盗賊の仲間か?」

兵士の一人が俺に近寄ってきて俺に話しかける。

キリッとした目つきが少し怖いけどイケメンだ。

……頭に角があるね、あの人は龍人種かな。

いやそれより何故盗賊の仲間だと思うんだ、普通盗賊なら兵士見て逃げるでしょ。

そして武器下ろせよこの野郎! 話しづらいんだよ!

『もしかして盗賊の中に黒髪黒目のヤツがいたんじゃない?』

少なくとも俺が倒したヤツらの中にはいなかったよ。

「いや、違うね。むしろさっきの盗賊に襲われて返り討ちにしたらいわ」

「あ！私を助けてくれたのもこの人です！」

「・・・君たちはこの馬車に乗っていたところを襲われたのか？」

「そうです、『私たち二人とも』です！」

ありがとうレイラ！

そしてこっちを向いてドヤ顔するなよ。

「君、ちょっとこっちにきてくれ」

「あ、はい！」

・・・そんなにホイホイ信用して大丈夫なんかねえ。

てか兵士さん、俺の方じろじろ見んなよ！珍しいのはわかるけど気持ち悪い！

『君はこの世界では今の所たった一人の人間だからね、そもそもこの世界で黒髪黒目の人を珍しがってる方が無理だよ』

今の所っておい。

これからもっと連れてくるんか？

『わからない。それに君の世界に今ね、『亀裂』があるんだよ』

なんだよ『亀裂』って。

『そのまんまの意味だよ。『向こうの世界』の『亀裂』に入ると『こっちの世界』に飛ばされちゃうんだよね』

・・・なるほどね。

その『亀裂』とやらに誰も入らないことを祈ってるよ。

いや、もしかして向こうの世界に『亀裂』があるならこっちの世界にも『亀裂』があったりする？

『あるね、でも君がもし元の世界に帰ろうとするなら私は全力で邪魔するよ』

なぜ!?

帰らせてくれよ!

『こっちの都合』

・・・ああ、なんか言ってたね。

「シキサーン!」

「ん? 終わった?」

「はい! あの、私達を王都まで護衛してくれるそうです!」

「マジで? てかなんて言ったの?」

あれか、「私たちまた襲われるかもしれないから不安なんで護衛してください」とかその辺か。

それでついでに俺も送ってもらえる感じなんだろうね、助かるわー

「あの、「彼は人間なんです」って言ったら意外とすんなりいけました！」

「全然ちげえ!？」

「ふえ!？ど、どうしたんですか!？」

「レイラちゃん、俺が人間だってあんまりバラさないでって言わなかったっけ？」

「い、いえ、今初めて聞きました・・・そんな顔しないでくださいよお・・・笑ってるのに怖いです・・・」

いやそんなことよりどうしよ、俺解剖とかされんよね？

「黒髪！お前人間なのか!？」

ほらきたよ・・・

そして周りの兵士達がなんかいろいろ言ってるけど気にしない。

「いえ違います、人違いです」

「そ、そうなんです！実は私が誤解してて、シキさんは人間じゃなくて実は異世界からきたこーこーせーで人間なんです！」

「ちょっと待てえい！どんどん悪い方向に!？」

「す、すいません!」

「ほお、異世界から来た人間だったのか？」

もうこれは誤魔化すほうが不自然か……………

はぁ……………

解剖とかマジ勘弁だわ。

「はい…………俺が人間っす…………てか誰にも言わないよう頼んます」

「言わないように？なぜだ？」

「面倒な事に巻き込まれたくないんすよ、わかってください」

「世紀の発見だぞ？言わなくてどうする」

「じゃあこうしましょう。今から俺とアンタが戦って、俺が勝ったら秘密に、アンタが勝てば俺が人間だってことを言いふらしてくれて構わない」

これでコイツが乗ったら戦いに勝って俺は解剖されずに…………

「断る、人間に勝てる気がしないしな」

ちくしょおおおお！

何故だ！言い伝えの人間はそんなに強いのか！？

『まあ、あきらめなよ。この世界の人たちも『貴重な人間』をいきなり解剖したりしないでしょ、二人いたらわからないけど』

そうだといいいけどね。

まあ、どっちにしろ王都まで護衛してくれるのはありがたいね。

「さっそく陛下に報告だ！二人ともはやく馬車に乗れ、あと黒髪のお前は城までついてきてもらうぞ」

コイツまさか俺を出世の道具につかうつもりか？

「ほら！はやく乗りましょうシキさん！」

まあいいや、なるようになるか。

とりあえず目的の王都まではもう安全と考えていいんやね。

4話 いえ違います、人違いです（後書き）

こんにちは、アヲネギです。

1週間に2回くらいの更新って言った気がするんですがほぼ毎日更新してますねw

やっぱり1週間に2回とかじゃなくて気が向いた時に更新していくことにします。

誤字脱字があれば教えてください。

5話 黒髪黒目が証拠っす

あれから20分くらいで王都についた。

そして現在……

「お主がロルスの言っていた別の世界から来たという人間か？名は何という？」

いわゆる謁見の間で国王と思われるけっこうガタイのいいおっちゃんと話しております。

国王の横には王妃もいるね、どうでもいいけど座ってる玉座が豪華すぎる。

そしてさっきのイケメンはロルスっていうんだな、顔も名前も覚えてぞ。

機会があればフルボッコにしてやるわ！

「シキⅡマユズミっす」

ちなみにレイラは謁見の間の外で待ってて、ロルスは俺の後ろで待機してる。

まあレイラがついてきてくれたのは嬉しいね、一人だと寂しいし。

「シキさん、貴方は本当に人間なのですか？」

王妃が俺に聞く。

ロルスにはもうバレてるんだからここで誤魔化しても意味ないよね。

「そうっすよ、黒髪黒目が証拠っす」

個人的には隠しておきたいんだけどね。

てかこの部屋にいる人たちからの視線が痛い。

王様の周りにいる兵士とか大臣とかからの視線もハンパない。

ああ、はやくこの部屋から出たい・・・

「お父様！人間がいるって本当ですか！？」

突然、扉が勢いよく開いて俺と同じくらいの歳の女の子が入ってきた。

髪と目は赤色で、身長は俺と同じくらいで目は少し釣り目だ。

てかちょっと待て、いまお父様って言ったな、てことはこの国の姫さんか？

「エリス、ノックくらいしなさい」

エリスと呼ばれた子は王様と王妃様には目もくれず俺の前に仁王立ちする。

「人間はお前か、私はエリスⅡラクルトルカだ、お前は？」

なんだこの子・・・

「あ、ああ・・・シキⅡマユズミだ。」

「シキだな、ついて来い」

そう言い、エリスは俺の襟を掴む。

「え？ちよ、ちょっと!？」

そのまま謁見の間を出て、そのまま廊下を走っていく。
とりあえず襟を引っ張られているせいで首がいい感じに絞まっている
ことに気づいて欲しい。

「シ、シキさん!？待ってくださいーい！」

お、レイラだ。

「誰だ？シキの知り合いか？」

喋りたいけど襟を引っ張られてるから喋れない・・・
そうだ、こういうときこそ『念話』《テレパシー》だ。

『俺の友達だよ、レイラっていうんだ。それと襟を放して・・・』
』

「す、すまん・・・大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

大丈夫かと聞かれたらこう言うしかない。

「や、やっと追いつきました・・・」

肩で息をしながらレイラが歩いてきた。
途中まで走ってたけど疲れたから歩いたんだな。

「てかエリス、どこに向かってたん？」

いまさらだけどエリスを呼び捨てで呼んでも大丈夫なんかな？
まあ本人も何も言っていないからいいか。

「ここだ、私の部屋だ」

扉でええ………

「入ってくれ、お互い聞きたい事もいろいろあろう」

いや俺は何もないけどさ、レイラはどうかしらんけど。

「あの、私は……」

「もちろん入ってくれ、一人だけ仲間はずれなんて嫌だろう？」

「あ、ありがとうございます！」

———☆———

しかし、姫の部屋って広いんだな。
いや金持ちならこんなもんなのか？

「少し聞きたい事があるのだが、いいか？」

ずずい、とエリスは俺に顔を近づける。

「ちょ、ちょっと！顔が近い！少し離れようか！」

なんでこんなに迫って来るんだよこの子！
エリスも気づいたのか、俺から離れる。

「す、すまん。つい・・・・・・・・」

あ、ちょっと恥ずかしがってる。

そして横にいたレイラは両手で口を押さえて顔を赤くしてる。

「で、聞きたい事って何？」

答えるかどうかは別として聞くだけなら全然かまわない。

「言い伝えだと人間は音の速さで敵を貫く武器を扱うらしいのだがそれは本当か？」

音の速さで敵を貫く武器・・・・ああ、もしかして銃の事か。

銃声が鳴ると同時に敵を貫くわけではないけど銃の事を知らない人がみたらそうなるかもしれんし。

「多分だけど、銃やね」

「ジュー？シキは持ってるのか？持っていたら一度でいいからみせてほしいのだが・・・」

「ないね、むしろ持ってるヤツなんて極少数だ」

自衛隊と警察くらいしか日本じゃ持ってる人なんていないっしょ。
ただの高校生が持ってたなら日本が大変な事になってるよ。

「そ、そうか・・・」

なんかがっかりしてる。

俺の能力でつくろうにも俺は実物を見た事がないから作れない。

「姫様、ほかにシキさんに聞きたい事はないんですか？」

「エリスでよいぞ、確か・・・レイラと言ったな？」

「はい、よろしくおねがいします！」

「うむ、よろしくな」

何で知ってるのかとかは聞かないんやね。

それともあれか、テレバシー念話が聞こえてたとか？

「そうだな、他には・・・人間の戦い方を見てみたいな」

「シキさんの戦い方はなんというか・・・すごいです」

「戦い方ねえ、相手がいないとどうにもならんねそれは」

まあ人間じゃあんなこと出来ないけどね。

人間っていうか俺の戦い方は自分でもチートだと思うわ。

「相手がいれば見せてくれるのか？」

「相手がいればね」

あ、ロルス辺りを指名してもよかったな。

まあ、もう人間だって王様たちにはバレちゃってるわけだしそのうち国中にバレるかもだし・・・

あー、まあいいや、考えるのがめんどくさい。

「シキさんの相手をしてくれる人なんているんでしょうか・・・」

「そうと決まればさっそくいくぞ！」

こいつ！また俺の襟をつ・・・！

「れ、レイラ・・・助けて・・・」

「二人とも待ってくださいーい！」

5話 黒髪黒目が証拠っす（後書き）

こんにちは、コンビニではファミマが一番好きなアヲネギです。
ファミマいいですねー
ほぼ毎日行ってる気がします。

今日はめずらしく早起きしたので2回更新とかやってみましたw

あと昨日の夜、初めて感想をもらいました。
めっちゃ嬉しかったですね。

正直もらうことがないと思ってたので今日の朝氣づいた時はテンション上がりましたw

とりあえず四季くんの能力を軽く説明します。

実際はありとあらゆる漫画の能力が使える能力ではなく「空想を操る」能力です。

言ってしまうえば想像したことをなんでも出来る感じですね。

あと物を生成するのも能力の一つですが、これは実際に見た事のあのもののしか作れません。

しかしゲームにしか存在しない武器、道具は実際に見る事ができないので作れます。

まあ言ってしまうえば都合主義です。

あとキャラの名前は結構思いつきとかで付けてるんでなにかと被ってたらごめんなさい。

誤字脱字があれば教えてください。

6話 なにビビってんの？

エリスの部屋を出て二時間くらい経った頃・・・

「で、俺の相手ってアイツ？」

俺は気がついたらめっちゃくちや広い地下闘技場のような場所にいた。気がついたらっていうのはエリスが俺の襟を引っ張りながら階段を下りたり上ったりするもんだから途中で気絶したため。

おまけに制服もボロボロに・・・
後で能力使ってジャージとか作ろう。

てか城の地下になんでこんな場所があるのか気になる・・・
でもちょうど闘技場の中心辺りで寝てる明らかに20メートルは越えてるであろうデカイ青色のトカゲみたいな生き物の方がもっと気になる。

「そうだな、コイツだ。昔拾ったんだが野生化したうえに成長しすぎて手がつけられなくなってるな」

人が相手だと思ってたんだけどなあ・・・
いやそれよりエリスはアレだな、ペットを飼っても自分で世話とか全くしないタイプだな。

「・・・まあいいや、とりあえずアイツと戦えばいいんやね？」

レイラもエリスももう俺の友達だし危険な相手を俺に押し付けるような事はしないだろう。

野生化したといってもこの城の兵士数人で倒せるようなレベルだろうし。

「そういうことだ」

「シキさん！がんばってください！」

「そんじゃ、ちょっとやってくるわ・・・ってちょい待て、何でお前ら二人いきなりそんな後ろに下がるん？」

ものっそい速さで闘技場の入り口付近まで下がってった。

おまけに結界みたいなのまで張っちゃってまあ・・・

「大丈夫だ！人間のお前ならアイツをなんとかできるさ！この城の兵士だといくら束になってかかっても無理だったから困ってたんだ！」

・・・完全に厄介事を押し付けやがったなエリスめ。

「いやその様子だとあのトカゲけっこうヤバイ奴やん？」

「そんなことはありません！ただ肉食で縄張り意識が強くてちょっと異常なくらい凶暴なだけです！」

えー・・・

なんで友達の相手にそんなヤバイ奴を選んだの・・・

「シキ？どうしたんだ？」

「ちくしよおおお！やってやるよ任せとけえええええ！」

思わず叫んじやったけどこれでトカゲが起きたらちよつと困るな。

「さすがシキだな！それでこそ人間だ！」

「はい！シキさんは強いですからたとえ鱗に魔法無効の効果があるあの魔物くらいどうってことないはずです！」

天然チート！？

なにその防弾チョッキみたいな鱗！

しかもそれなら結果みたいなソレも意味なくない？

どんなに凄い結界でも魔法無効化の効果があのトカゲには全身にあるわけなんだしさ、学園都市の不幸な高校生の右手が全身についてるようなもんじゃない？

それとも魔法だけなんかね？

いやちよつと待って、俺の能力まで消されたらちよつとピンチだよ、いやちよつとどころじゃなくてももうヤバイよ、捕食されちゃうよ。あんなビビるくらいデカイトカゲに食われて死ぬなんて嫌すぎる。別に普通のトカゲならいいってワケでもないけどさ、だからといってトカゲじゃなくてワニとかアナコンダに食われて死ぬならいいってワケでもないよ。

いやそうじゃなくてマジで俺の能力まで無効化されたらホントに倒せないよ。

やってみないとわからんけどそんな危険な賭けとかしたくないしなあ。

どうやって倒そうか。

いや倒すまで行かなくてもせめてこっから逃がしてやりたいな、こんなのが城の地下にいたとか国民がしたらパニックになるだろうし。

もうパニックどころの騒ぎじゃなくなるかもしれない。

いやー、マジでどうやって倒そうか。

『なにビビってんの？』

……これはまた随分と久しぶりじゃないか名無しの神様。いやね、アイツに魔法は効果ないらしいんだよ。

『君、私を与えた能力は魔法無効化なんかじゃ無効化されないよ』

マジっすか！さすが神！

『それにもし魔法が無効化されるなら身体能力とかを限界まで上げて殴ればいいじゃない』

……それもそうだね。

よっしゃ！がんばりますか！

6話 なにビビってんの？（後書き）

こんにちは、本日三度目のアヲネギです。

まあ、20メートルを越えてるトカゲだと普通にビビりますよね W
ていうか今回はちょっと短めですね。

次からは気をつけます。

誤字脱字などあれば教えてください。

7話 ゲームみたいだな（前書き）

今回は四季くんの同級生の話です。

7話 ゲームみたいだな

——四季が異世界に飛ばされる前日——

「四季。授業終わったぞ、さっさと帰ろうぜ」

「あー・・・よく寝たわー。ちょい待ってくれ」

コイツは黛四季、高校に入学してから知り合ったヤツだ。

ちよくちよく関西弁で喋る時があるけどそれは中学まで関西にいたかららしい。

ちなみに俺の名前は折鶴紅葉

オリヅル モミジ

・・・名前だけだと女みたいだが、男だ。

「アンタ授業中起きてるときあんの？いつも寝てない？」

そしてコイツは黒無雪乃

クロナシ ユキノ

スタイルがよく、勉強もできて運動もできる完璧超人だ。
そしてツンデレ。

・・・コイツがデレたとこなんて見た事ないけどな。

「いや今日はこの午後の授業しか寝てないぞ。ほら、午後は眠くなるやん？」

「そんなんだからアンタはいつもテストの点が低いのよ」

「テストとかしらんよ、そもそも俺は勉強が嫌いなんだ」

「なんでもいいからはやく帰ろうぜ」

———☆———

「じゃ、俺はこっちだから。あと四季、前借りたCD明日持つていくわ」

「あいよ、また明日な」

「それでさ！あの漫画の事なんだけd」

雪乃も「また明日くらい」言えよな。

・・・って、ん？

雪乃の会話が不自然に途切れた、曲を一時停止した時みたいに急に。

「なにがなんだか・・・」

気になって振り返ってみると、そこにはさっきまで歩いていた道ではなく森が広がっていた。

周りを見渡せば、俺の知っている景色はまったく無くなっていた。すこし歩けば草原に出れそうだな。

それになんだ、さっきから体に違和感がある。ちょうど雪乃の会話が途切れたあたりから。

「動くな」

「っ！」

誰かが後ろにいる。

いつからかは気づけなかったが、あまりいいヤツではなさそうだ。

「それと騒ぐなよ、妙な気を起こしたら命はないぞ」

なんせ、俺は今後ろにいる奴に殺されそうなんだからな。

後ろから動けないように拘束されて首にナイフを突きつけられてるような状況か。

「抵抗する気はない、それに今は金も持っていない。とりあえず放してくれ」

「そうかよ、なら用はない！」

首を、切られた。

そして今になって体の違和感の理由に気づいた。

なるほど、いわゆる能力ってヤツか、それもチート級の。

「なるほど、これは便利だ」

切られたはずの首は傷は癒えていて、いや、「最初から傷なんてなかった」ような感じだ。

そして代わりにさっきの奴が首から血を流してそこに倒れている。

まあ、今ので俺の能力は理解できた。

「おい、誰かいたのか？」

なんだ、他にもまだいたのか。

「ああ、お前さっきのヤツの仲間か何か？今は「俺の代わりに」
そこで死んでるよ」

こんなに凄い能力があれば何でもできるし、誰にも負けないな。

「な、なんだお前は！？」

「なあ、ここは何処なんだ？それとお前らは何者なんだ？」

「な、何なんだお前！」

コイツは話を通じないのか？

すこし痛い目にあわせてやりたいが、俺の能力じゃ条件が整わない
とそれはできないからな。

「質問に答えろよ、なあ」

「お、俺たちはただの盗賊だ！」

「盗賊？ゲームみたいだな、お前ふざけてるのか？」

「ふ、ふざけてなんかいいえ！なんならお頭にあわせてやる！」

まあ、ここが何処なのかはコイツの言うお頭ってヤツに聞けばいい
か。

7話 ゲームみたいだな（後書き）

こんにちは、片付けが苦手なアヲネギです。

気がついたら部屋中が凄い事になるんですよね・・・

なんででしょうか？

不思議で夜と昼しか眠れません。

紅葉くんも異世界に飛びましたね。

彼は『亀裂』を通ってきた感じです。

紅葉くんも能力を持っており、個人的にはなかなか気に入ってます。

誤字脱字があれば教えてください。

8話 おつかれさん

「はぁ・・・はぁ・・・」

あれから30分くらい戦ってるけど・・・

「グオオオオオオオオ！」

「まいったな・・・魔法はやっぱ効果ないし、殴るにしても鱗はすげえ硬いし」

おまけに鱗はやたら鋭いわけで。

殴ると逆に俺が傷を負うなんてね・・・

てか名無しの神様、この能力は無効化なんてされないとか言つときながらがつつり無効化されてますやん。

いやでも身体能力系のチートは消されてないから無効化されたことにはなんなのか？

・・・どっちでもいいか。

「エリスさん、シキさんは大丈夫なんでしょうか。けっこう苦戦してるみたいですけど・・・」

「大丈夫だろう、あれは多分演技だ。あ、また私の勝ちだな」

「ま、また負けた・・・」

いや演技じゃなくてちょっと真剣にヤバいんだけどね。

しかもアイツらなんかカードゲームで遊んでるよ・・・

「ガアアアアア！」

「っあー・・・うつせえ！」

トカゲが叫びながらこっちに突進してくる。

このトカゲ、図体だけじゃなくて声も結構デカいんだよな。

ホント、なんでこんなに危ない生き物が城の地下にいるんだよ・・・

「とりあえずあの魔法無効化だけでもなんとかしたいなあ」

「グアアアアアア！」

トカゲと後5メートルほどでぶつかるところで指パッチン。

周りの景色が灰色になり、自分以外の全ての動きがスローになる。

『なんだったつけそれ、名前がでてこない』

あれだよ、『タイムラグ』だ。

デビルメイクライ3に出てくるダンテのクイックシルバースタイルのスタイルアクション。

『でもそれ使ってもトカゲは倒せないよね？』

そうなんだよね。

そしてこれの能力使ってる間俺は武器しか使えないわけで・・・

能力二つ同時に使えないって結構不便だな。

でもあんなデカイトカゲを倒せる武器なんてあったっけ？
おまけに鱗は硬くて鋭い……

よし、シビレ罠だ。

『使ってどうするの？』

シビレ罠をここに設置して一旦能力を解いて別の能力で倒す。

『どうせスローなんだしあのトカゲの足元に仕掛けたらいいじゃん』

いやスローでもアレの足元は怖い、自殺行為じゃないっすか。

とりあえず罠設置！

そして能力解除！

「よし！トカゲこっちだ！こっちこい！」

罠にかかったら能力を使って倒せば計画通り……！

『罠にかかっても鱗の硬さは変わらないよ？』

分かってるよ。

ホントに……G級のグラビを相手にしてる気分だわ。

「ガアアアアアア！」

お、突進してきた。

よし、よし、よし……かかったあ！

やっぱアレやね、敵が罠にかかるってテンションあがるね。

『爆弾でトドメ刺すの？』

いや、『直死の魔眼』でやるつもりだよ。

『それなら罠にかかる前に能力使っとけばよかったじゃん』

いやいや、『直死の魔眼』を使つてると地面なんて無いに等しく、空なんて落ちて着そうなくらい死線がみえるらしいやん。

そんなのできれば見たくないね、それにうっかり床の死点なんて踏んでしまったらどうなるかわからんし。

「まあ、そんなわけで……」

トカゲに縮地で近づき、指で死点を突き、すぐに縮地でトカゲから離れる。

あえてシビレ罠で動きを止めたのは、トカゲが走り回ってたら死点どころか死線すら触れないから。

あの主人公みたいに動いてるものの死線を切ったりできる自信なんてないしね。

……そういや月姫の主人公もシキだったね。

『この名前^{シキ}』でこの能力とかもう……ねえ？

いやまあ字は違うよ、向こうは『志貴』で俺は『四季』なんだ。

「でもまあ、とりあえず終わったな」

あのあとトカゲはしばらく暴れた後、動かなくなった。

『おつかれさん』

ホントにね、トカゲがこんなに怖いとは思わなかったよ。

「おーい！終わったぞ！」

「そんなことはどうでもいい！こっちは今忙しいんだ！」

えー……

いやお前が見たいっていったやん、それはいろいろキツいですよ。

「ほら、ちゃんと勝ちですよ！これで私の方が合計では勝ってるんじゃないですか？」

「いや、お互い同点だ！」

なんかもう……なにこれ……

名無しの神様、お前だけだよ俺の頑張りをみててくれたの……

8話 おつかれさん（後書き）

こんにちは、リプトンのレモンティーが好きなアヲネギです。
レモンティーはヤバいですね。

小学5年生の頃気まぐれで買って以来、ほぼ毎日飲んでますね。

それでは今回でできた能力の説明を・・・
タイムラグ・・・デビルメイクライ3のダンテが使うスタイルアクション。

直死の魔眼・・・月姫に出てくる遠野志貴の能力。

誤字脱字があれば教えてください。

9話 話逸らそうとしないで

「で、お前達はこれからどうするんだ？」

トカゲを倒したあとエリスの部屋に戻り、雑談をしているとエリスにそう聞かれた。

「そうですね・・・私はどこかで宿を借りる予定です、それにしばらくは王都にいるつもりですし」

「俺は・・・」

やばいどうしよう俺この世界のお金もってないよ。

「俺はそうだな、とりあえず誰かからカツアゲして金を集めてどうか適当な宿を借りる予定」

ってなに言ってるの俺！

姫の目の前で犯罪予告してなにがしたいの俺は！？

「ん？かつあげとは何だ？」

アレ？

もしかしてエリスは知らんのか？

この世界でカツアゲはあっても別の呼び方とか？

・・・なんでもいいか。

「人からお金を貰うこと」

武力行使でだけど。

「そんなことをしなくてもシキは金ならあるだろう」

「いやそれが一文無しなんだよね」

この世界の通貨がどんなのかすら知らないし。

一回どんなのか見たら能力でいくらでも作り出せるけどさすがにエリスの目の前でソレはやっちゃいけない気がするね。

「さっき倒したアイツの鱗とかを売れば結構な額になるとおもおうぞ？」

なにそのモンハン・・・
てかどこに売れんのよ。

「心配するな、私とレイラがシキの代わりに売ってきてやる。その間、城でも見て回るといい」

「え？私ですか？」

「もちろんだ、私一人だと寂しいじゃないか」

・・・なるほどね。

あれか、一人でコンビニ行くと気の寂しさみたいなもんか。

「あー、行く前に一つ聞きたい事が」

「なんだ？」

「この城に書庫とかあるんなら教えて欲しい」

ちょっと調べたい事もあるしね。

——☆——

「本の量やべえ・・・」

あの後、レイラとエリスに書庫まで案内してもらった。

ちなみに調べたい事っていうのは、大昔にこの世界に來た人間の事と、ソイツが使っていた武器の事。

銃を使っていたっていうんだから軍人とかそこら辺の人なんだろうけど・・・

『ねえ』

ん？どした？

『君、この世界の文字読めないよね？』

・・・・・・はい、そうなんです。

ここまで来ておいて字が読めないとか・・・・・・なにしにきたんだよ俺は。

てか途中で気づけよな。

『で、どうするの？』

どうするもなにも・・・字が読めないんだったらどうすることもできへんやん。

どうしようか・・・

『他にすることないの?』

ないよ。

特にしたいこともないし、エリスとレイラが帰ってくるまでここでまってるしかなさそうだな。

あ、そうだ。

名無しの神様、ちょっと喋ろうや。

『え、私?』

そう、名無しの神様と言えばお前。

『いまさらなんだけどさ・・・』

なんすか?

『他の呼び方ないの?』

えー・・・

名無しの神様でいいんじゃない?

『嫌だよ、もうちょっと名前っぽいのがいい』

そうは言われてもなあ・・・

『なにか考えてよ』

いや自分の名前でしょ？

自分で考えたらしいやんけ。

『……君は自分の名前を自分で付けたの？』

……ああ、そういうことね、ok。

てかさ、それなら俺じゃなくて他の人に頼んだらいいんじゃない？

『やだ』

……なぜ？

『今の所見て一番面白いのが君だから』

何その理由。

見てて面白いって……おい。

てかどんな名前がいいんすか？日本人みたいなのでいいん？

『全部君に任せるよ』

それが一番困るんだけどね。

名前、ねえ……

どうでもいい事だけど、小学校の頃算数の授業でコンパス使うのに
持ってこない奴いっぱいいたなあ……

あとポテチを食べるとき、つつい味の濃そうな一枚を探してしま
うのは俺だけなんかな。

それとさけるチーズの最初、どこをさこうか迷ったりするんだけどそれももしかして俺だけなのか？

『急にどうしたの？』

いや、なんか気になった。

こういうのって気になりだしたらおわらんよね。

『よくわかんないけど……って私の名前、はやく決めてよ。話逸らそうとしないで』

いや別に逸らそうとしたわけじゃないんだ。

何故か急に気になって「あ、そういえば……」みたいな感じでどんだん気になることが増えたんだ。

って名前やね、何がいいかな……

よし、今決めた。

『ん、何？』

「シキさん！遅くなってごめんなさい！」

「おーレイラにエリス、おかえり」

『え、なにこの漫画みたいなタイミングの悪さ』

そういうときもあるって、気にすんな。

「鱗を売ったら思ったより儲かったぞ、これでシキも宿を借りれるな」

「さすがにここまで儲かるとちよつとびっくりですね」

とりあえず今日は野宿しないで済むのか、よかった。

中学の時何回か野宿したことがあるけどアレはいろいろしんどい、冬とか特にね。

『ちよ、ちよつと待ってよ！私の名前は？すごい気になるんだけど！』

大丈夫、宿が見つかったらちゃんと教えるやん。
それまで待ってほしいね。

『……わかった。それじゃあ、また後で』

……怒らせちゃったか？

「それじゃ、宿探してくるわ」

あとで名無しの神様に謝つていたほうがいいかな。

9話 話逸らそうとしないで（後書き）

こんにちは、いつも通りのアヲネギです。

実はこの話を書いてる最中にシキくんがこの世界の文字を読めない
っていう設定だっと思って出しましたww

誤字脱字があれば教えてください。

10話 名無しの

「シキさん！ここにしましょう！城にも近いですし！」

「ん？ああ、いいんじゃない？」

「なんでそんなに興味なさげなんですか・・・」

今俺はレイラと一緒に今日泊まる宿を探している。
正直なところ俺は別にどこでもいいんだよね。

逆に何でレイラはそんなに元気なのか気になるわ。

「とりあえず今日は疲れたからはやく寝たいんだ。逆にレイラはなんでそんなに元気なん？」

といわけで聞いてみた。

「お金です！」

・・・え？

「は？」

「ですから、シキさんが倒したあの魔物の鱗を売った時です！」

やばい説明されてもわからん。

「もうちょい詳しく頼む」

「お金がたくさんですよ！ザックザクです！何でも買えますよ！そうそう、シキさんはお金の使い方をしらなそうなのでお金は私が管理します！今決めました！」

今サラッと馬鹿にできなかった！？

「お前って意外とアレなんだな・・・」

「アレってなんですか？お金が好きただけですよ」

うわぁ・・・

「まあいいや、とりあえず入ろうや。すんませーん」

「そうですね、すいませーん」

まあ、金はレイラがもってるし部屋もレイラがとってくれるよな。

・・・とってくれるよな？

いやでもこういう時って大抵とってもらえなくて俺が困るってオチなんだよなぁ・・・

「シキさん、どうしたんですか？部屋とりましたよ？」

「いや、こういう時って大抵俺だけ困るパターンなんだよ・・・
ってマジ！？普通にありがとう！」

「い、いえ・・・どういたしまして」

・・・いまコイツ絶対俺の事「変なヤツ」とか思ったよな？

———☆———

「ベッドやべえ・・・」

なんか久しぶりに横になった気がするわー
やけに長い一日だったなあ・・・

朝は遅刻気味に家を出て、登校中に7回くらい事故になりかけたし。
学校について、授業が暇だったから寝ようとしたら後ろの席の雪乃
に毎回ペンを背中に刺されておこされて、それがやたら痛くて泣き
そうになって。

それから昼休みになって一人でコンビニに行って・・・
紅葉のヤツ今日について来なかったな、アイツ弁当持ってきてたの
かよチクショウ。

・・・ここまではいつもどおりだったんだよな。

昼ごはんを食べ終わって公園のベンチで横になって、起きたらあの
白い部屋で黒いジャージを着た名無しの神様にあってこの世界にき
たんだよな。

・・・あ、名無しの神様。

そういや、図書館で怒ってたな。

いやでもアレは誰が悪いわけでもないよなあ・・・

はあ、なんて謝ろうか・・・

『宿、見つかったんだ』

お、おおう!?

毎回の事だけど急にだな。

『テレバシー』の性質上そうなるの。そうだ、ちょっと目を閉じて』

ん?

目を閉じればいいんやね、任せとけ。

「はい、開いていいよ」

「・・・え?」

目を開くと、そこには俺の通っていた高校の屋上。

しかもそこから見えるのは見慣れた街の風景ではなく、見渡す限りの海・・・どうなってんの。

そして柵に腰掛けて名無しの神様がこっちを見ていた。

もちろん黒ジャージで。

てかメガネ似合うなこの神様。

「君の精神世界・・・を再現してみたの」

「すごいな、そんなことも出来るんか」

「神だから・・・名無しの」

あ、コイツ根に持ってんな。

「・・・あん時は悪かったな」

「え?」

「いやだから・・・悪かったな、ごめんなさいって事っすよ」

謝るの苦手なんだから聞き直さないでくれよ。

「いいよ、許す」

おお、よかった。

許してもらえなかったらどうしようかと思ってたよ。

「名前」

「うん?」

「名前、考えてくれたんでしょ?」

「先に言っとくけど俺にネーミングセンスとか期待しないよう頼む」

正直、自信無い。

名前なんてネトゲのキャラとか昔飼ってた金魚くらいにしか付けた事ないし。

「うん、わかった」

「名無しの神様、お前の名前は『咲良^{サッラ}』だ。咲くっていう字に善良の良っす」

「・・・・・・・・由来は？」

それが特にないだよねえ・・・・

「響きが好き、なんか綺麗な感じしない？」

「・・・・・・・・ありがとう」

「どーいたしまして。そして眠いんでそろそろ戻してくれよ」

「それじゃ、また目を閉じて」

「あいよ」

言われた通り目を閉じる。

やばい今横になったらすぐに寝れそうだ。

『はい、もういいよ』

・・・・・・・・おお、戻った。

てか高校の屋上が俺の精神世界ってなんか微妙な気分だ。
おまけに周りは海ですよ、見渡す限りの。

・・・・・・・・まあいいや、寝よう。

10話 名無しの（後書き）

こんにちは、今日の晩御飯はファミマで買う予定のアヲネギです。

ていうかついに10話ですね、二桁ですよ二桁。
いいですね二桁。

誤字脱字があれば教えてください。

11話　なんかやる気できたわ

今俺はレイラ、エリスと一緒に城の書庫にいる。

「シキさん、そこはそうじゃないです」

「ここも違うぞシキ。まったく・・・人間なのに文字も読み書きできないのか」

「いや人間とか関係なく他の世界の言葉なんて誰もわからんって」

実は朝早くにレイラに起こされて宿で朝ご飯を食べてる時、俺はこの世界の文字の読み書きができないって言ったらレイラが「それなら勉強しよう！」って城の書庫までつれてきたんだ。

・・・俺説明下手だな。

まとめると、俺はこの世界の文字がわからないから城の書庫でレイラとエリスに文字を教えてもらってるって事やね。

「それにシキさん、なんですかその服装・・・」

「ごめんちょっと質問の意味がわからない、めっちゃ普通の服装ですよ」

「いや私も変わってるとおもうぞ。かなり目立つな」

・・・マジかい。

俺の今の服装はジーパンに黒のTシャツ、それに灰色のパーカーを

羽織ってるっていう結構普通の服装なんだけど。

「ぜんぜん普通じゃないですよ、来る途中いろんな人が見てましたよ」

「いやそれはレイラがフード被ってるからじゃない？」

「そんなことないですよ！私はこれが私の普通なんです！」

えー……

そんな事言い出したら俺もこれが普通ってことになるんやけど。

「まあいいじゃない、それより文字だよ文字。読み方を教えてくれよ」

———☆———

「いやだから俺のいた世界には魔物とかいなくて、魔法とかもないんだよ」

「じゃあ馬車は！馬車はどうなんだ！？」

「馬車はあるけどバイクとか車の方が圧倒的に多いな」

・・・あれから約三時間。

この世界の文字をだいたい読めるようになってきて、エリスに「逆にシキの世界の文字を教えてください」と言われたのは始まりで、何故

か俺はレイラとエリスの質問攻めにあっている。

ちなみに教えたのはひらがなだけ。

「ばいく？ ばいくってどんな乗り物なんですか？」

「一人用の馬車みたいな感じ」

「ならくるま？ くるまはどんな乗り物なんだ？」

「車は・・・馬の要らない馬車みたいな感じやね」

てかこの人たち、知ったところでどうしようもないでしょ。

そしてこの世界に科学的なものはないんだね、こっちの世界では科学がないかわりに魔法があるって事か。

「それじゃあシキ！ シキの戦い方は人間なら誰でもできるのか？」

「あ、それはできない。たぶん俺だけだよ」

「シキだけ？」

「俺はちよつと変わってるんすよ」

ちよつとどころじゃないけども。

「そういえばシキさん、私と初めて会った時に私をワープさせたのってどんな魔法使ったんですか？」

「ああ、『アルス・シマグナ黄金練成』ね。簡単に言えば思った通りに現実を変えら

れるんだよ」

「規格外にもほどがあります・・・」

俺もそう思うよ。

いやまあ使い勝手はいいんだけど相手にビビっちゃえばそれでもう負けたようなもんだからねえ。

精神安定剤とかあればまた別なんだろうけど。

「その、あるすまぐなってやつは私達にはつかえないのか？」

「それはわからんよ、似たような魔法とかあれば無理なこともないんじゃない？」

「そんな都合のいい魔法なんてあるわけですよ」

だろうね。

まあ、そもそもどんな魔法があるのかすら俺は知らないわけだけど。

「なあ、シキ」

「なんすか？」

「前にシキが戦った時、ほとんど見てなかったからもう一回戦ってくれないか？」

「あ、頼んだ本人がそれ言っちゃいます？しかも真顔で。ふざけてんのかお前は」

そう言いながらエリスにデコピンをする。

「ふざけてなどいないぞ！私は真面目だ！ちゃんと対戦相手も用意したぞ！」

またコイツの可哀想なペットとかやめてくれよな。

てか俺はまだ戦うとか言っていないのになんか戦う方向で話がすすんでる。

「・・・今度は誰？できれば話が通じるまともな相手を頼む」

「あ、嫌がってても結局戦うんですねシキさん」

レイラ、余計な事言わんでいい。

「大丈夫だ！今度は魔物じゃなくドラゴニユート龍人種だ！」

ドラゴニユート
龍人種？

確かこの世界の人種の一つだったね。
とりあえず話は通じるね。

「で、誰なん？俺の知ってるヤツ？」

「知っているはずだぞ、ロルスだ。お前達をここに連れてきたのがロルスだ」

「よし今すぐ戦いに行こう、なんかやる気できたわ」

アイツか、俺の事を人間だって言いふらしちゃったヤツか。
過ぎた事だけどとりあえず一発殴りたい。

「シキさん・・・顔が怖いです・・・」

「気のせいだ」

「そうと決まれば早速移動するぞ！ついてこい！」

そう言うところ、エリスは立ち上がり、もの凄い勢いで書庫から出て行った。

いやエリスさん、ついてこいって言うっておきながらついてこさせる気ゼロじゃないっすか。

11話 なんかなる気できたわ（後書き）

こんにちは、本日最後のアヲネギです。

気がついたらユニークが1000人を越えました。

こういうのって嬉しいですね。

みんな見てくれてるってなんかいい感じがします。

今回は戦闘です、上手く書けるか不安です。

戦闘シーンって難しいですね、どうすれば上手くかけるんでしょうか？

誤字脱字があれば教えてください。

12話 最後の一つなんだ

「んぐ・・・じゃあ二人とも、適当に戦ってくれ」

「二人ともがんばってくださいーい！」

「んじゃ、やろうぜロルスくん」

「姫、状況が理解できません」

俺は今、トカゲと戦った時の地下の闘技場に来ている。

途中でエリスを見失ってどうしようか困った結果、多分ここだろう
などと思って地下の闘技場にきたら思った通りだった感じだ。

ちなみにレイラは観客席で応援してくれて、エリスはリンゴを食べながら立会人みたいなことをしていてくれる。

美味しそうだな、俺にも一つくれよ。

リンゴ好きなんだよ、勝ったら一つくれたりしないかな。

てか観客が二人しかない闘技場っていうのもなんか悲しいな。

「もぐもぐ・・・ロルス、とりあえずシキと戦ってくれ」

「それは構いませんが・・・何故です？」

「それじゃ・・・始めっ！」

スルーしやがった。

「いくぞ人間！」

そしてお前も何か言えよ。

ロルスは剣を構えて突っ込んでくる。

「どっからでもどうぞ」

俺は両手を広げて余裕な感じのポーズをとってみる。

・・・既に能力は使ってるしね。

「大した自信だな！」

ロルスが近づき袈裟斬りをする。

「ダメだなあ、当たらんよ」

俺はそれを後ろに避けた。

もちろん能力でだけだね、能力無しだとさすがに無理だ。

「・・・速いな」

「ただの反射神経っすよ」

使った能力は『オートパイロット
アブノーマル反射神経』、めだかボックスに出てくる高千穂仕種の異常。

体が勝手に危険を察知して避けてくれる能力らしい。

・・・能力名があってるかどうかはちょっと覚えてないが。

「まだまだ！」

こんどは突進しながらの突き。

「速いなあ、でも残念！」

「魔法も使えるのか、そんな魔法は初めてみたが」

「『スモークバー煙酒場』っていうダークブリングの力っすよ。魔法っぽいけど違うんだよね」

RAVEに出てくるダークブリング『スモークバー煙酒場』、自分の体を煙にできるダークブリングでたしかジョーコってヤツが持ってたはず。

まあ、ダークブリングの力の源は魔力らしいけどね。

「ならこれならどうだ！」

「おお、これが魔法ってヤツですかい」

俺の周りに小さな無数の火の玉が一瞬で現れた。だいたい100個くらい？わからん。

これは・・・『オートパイロット自動操縦』で避けれるのかな？

いや、避けれるんだらうけどあえて別の能力を使おう。

「終わりだ人間！」

そして、一斉に火の玉が俺に向かって飛んでくる。ほぼ全弾直撃したであろう俺は火だるまになってしまった。

「いやー炎ってこんな味がするんだな」

まあ、火だるまになってもこの能力ならむしろ好都合って感じなんだけどね。

「馬鹿な！魔法を食べるだど！？」

使った能力は『炎の滅龍魔法』ドラゴンスレイヤー、フェアリーテイルの主人公、ナツの魔法。

てかマジで炎食べたら力沸いてきた！

「それじゃ、今度は俺の番やね」

「今度は何だ……？」

半歩後ろに下がりロルスが構える。

いいねいいね、いつかの盗賊とは大違いだ。

「火竜の……咆哮ッ！」

吐き出した炎ががロルスに襲い掛かる。

……おおう、思ったよりだいぶ派手だな。

「な、なんて滅茶苦茶な……」

そして直撃。

……やりすぎたか？

こんどはロルスが火だるまになってるし。

「お、おーい！大丈夫か？」

「敵の心配とは随分と余裕なんだな」

ロルスは何も無かったように一步も動いていなかった。

・・・あれ、きいてない？

「いやまあ、自分で思った以上に派手でヤバそうだったから心配になったわけですよ」

いやそれよりも・・・

「確かにさっきのは危なかった。龍化していなければ死んでいただろう」

ロルスに龍のような翼がはえていた。

まあ黒コゲだけどね。

「龍化って何？」

「見ての通り、龍人種ドラゴニユートの能力だ」

いやその龍化が何か知りたいたいんだけどね。

そして見ての通りと言われてもな・・・

あれか？自分を龍に近づけてパワーアップする感じか？

・・・よくわからん。

でも「龍化しなければ死んでいた」って言ってたあたりパワーアップ系の何かなんだろう

「しかし翼がコゲてしまったな、これでは飛べない」

つまり今のロルスは、さっきより強いはずだ。

「いいねいいねえ！テンションあがってきたわ！」

「残念だが降参だ、龍化してこの様だ。お前には勝てない」

はやいだろ！もうちょい頑張れよ！

テンション上がってきた途端に終わるとかなんなんだよ！

「んぐ・・・まあいいだろう。シキの勝ちだ」

いいのかよ！

てかまだリンゴ食べてたんかい。

何個持ってきたんだよ、一個くれよ。

「エリス、そのリンゴ一個俺にもくれよ」

「ダメだ！これが最後の一つなんだ！」

・・・戦う前に言っとくべきだったかな。

12話 最後の一つなんだ（後書き）

こんにちは、高校1年生から身長が全く伸びないアヲネギです。
低いんですよね身長。

せめて170欲しかった！

それでは今回出てきた能力の説明を・・・

反射神経…めだかボックスに出てくる高千穂仕種の異常。

煙酒場…RAVEに出てくるジョーコを持つダークブリング。

滅龍魔法…フェアリーテイルに出てくる魔法。

誤字脱字、わかりにくい点があれば教えてください。

13話 俺だ

「こっちだ！」

「遅いって！もっと速く走れや！」

今俺は城の兵士に連れられて王都の門まで走っているところだ。

なんでこうなったのかと言うと、ロルスと戦った後、ロルスの炎の魔法で俺の服が燃えてないか確認しながらエリスに「今度はリングくれよな」とか言いながら、今度はこの世界の魔法について教えてもらおうと思い、書庫に向かっているときだった。

城の中を兵士がどたばたしているから何かあったのかと聞いたらこの前捕まえた盗賊が脱走したらしい。

なんでも他の捕まっていない盗賊がお頭たちを助けにきたらしく、その助っ人の盗賊の中にやたら強いやつがいて困ってたらしい。

そこで偶然通りかかった俺を見て「手を貸して欲しい」と言われて面白そうだからついてきたわけだ。

・・・俺の事ってそこまで城の中で噂になってんのかな。

「す、すまない・・・ちょっと休ませてくれ・・・」

「お前体力なさ過ぎるだろ、急いでるんじゃないんかい」

あれか、鎧着てるからか。

てか強いやつがいるってことは兵士側は結構ヤバイ状況なのに休むとかいうなよコイツ。

「俺先に行くぞ？」

もう鎧を脱いでその片手にもってる槍だけ持っていけばいいんじゃないかと思えてくる。

「ま、待ってくれ！もう大丈夫だ、行こうか」

休憩短いな、大丈夫かよ。

——☆——

約一時間後、俺と兵士はようやく王都の門を少し出た所までまでたどりついた。

なんでこんなに掛かってんだよ・・・コイツちよくちよく休憩挟みすぎだろ。昼間に出たはずがもう夕方じゃねえか。

そしてこの兵士、王都の門までとか言っておきながら微妙に違うじやねえかよ。

「で、着いたけどどうすりゃいいん？」

「あ、アイツだ！アイツをなんとかしてくれ！」

俺たち二人が着いたところには兵士も盗賊もみんなそこらじゅうに倒れていた。

俺たち二人と、もう一人を除いて。

「……二日ぶりか？」

「あ？何て言った？遠すぎてよく聞こえん」

遠くの方にいる、おそらくさっき言ってたやたら強い助っ人の盗賊だろう。

ただ遠いから、なに言ってるかよくわからんし、姿も暗くてよく見えない。

「よく聞こえなかったか？」

一瞬、盗賊の助っ人の姿がブレたと思ったら突然、横から声がした。ちやうど兵士がいた辺りから。

でも聞こえた声は兵士の声ではなく

「……紅葉？」

俺の、同級生の声だった。

そして遠くのほうの姿がよく確認できない助っ人は、背丈が変わり、槍をもっていた。

あれ、さっきまで俺の横にいた兵士か。

「なんだ、驚かないのか？」

「いや驚いてるよ、いろいろと」

なんでこっちの世界にいるのかとかいつのまに俺の横にいたんだとかさっきまでそこにいた兵士はどこに行ったんだとかそしてその兵

士がそろそろ空気になりつつあるとか兵士の活躍の場の少なさとかにいろいろ驚いてるとも。

でもそんな事よりも聞きたい事があるね。

「・・・これをやったのは紅葉、お前なん？」

盗賊も兵士も全滅で、立っているのが紅葉だけ。

終わった後でここに来たのかもしれない。

「もちろん、俺だ」

紅葉は、いつもと同じつまらなさそうな顔をしていた。

「兵士ってのは相手になんねえな、束になってこの程度だぜ？」

普通なら怒る所なんだろうけど、俺はこの時何故か嬉しかった。

多分紅葉も何か能力を持ってるからこれだけの人数を相手に無傷で戦えたんだろう。

「じゃ、俺と戦ってみようや。この兵士たちの敵討ちって事で」

能力を持っているかどうかはまだわからんけど、紅葉は束になった兵士を一人で倒せるくらいには強いって事だ。それは紅葉本人が言っていたんだから間違いないんだろう。

「・・・いや、今はやめとく。気が変わった」

紅葉はいつもどおりのつまらなさそうな感じで答えた。
なんだよ面白くない。てか気が変わったってことはさっきまでは戦

う気だったんかい。

いやまあ紅葉の能力がわからないから戦わなくて正解かもしれないけどね。

「とりあえず、捕まった盗賊の頭を助けに来たんだが、飽きたから帰るわ」

飽きたっておい。

紅葉がそう言うと、紅葉の姿が一瞬ブレて兵士に戻っていた。

その後、紅葉は王都から離れていった。

とりあえず戻ってきた兵士に一言、言わなければならない事がある。

「お前、影薄いな」

13話 俺だ（後書き）

こんにちは、血液型はA B型のアヲネギです。

四季さんと紅葉くんが会いましたね。

いつかこの二人を戦わせたりしてみたいけど書くのめんどくさそう
ですw

誤字脱字、わかりにくいところがあれば教えてください。

14話 問題だよ

——紅葉サイド——

あの盗賊と行動を共にして二日。

盗賊の頭とその他数人が捕まったと聞いて捕まっていない盗賊大勢と助け出しに行った。

俺を含めた20人ほどが街の入り口で兵士を集めて、その隙に4人ほどが街の中に入り、捕まった盗賊を助け出すという作戦らしい。俺は言われたとおりに街の入り口で兵士の相手をしていた。相手は軽く50人ほどいたが、大した事はなかった。俺と一緒にいた盗賊は全滅したが知ったことか。あって二日の奴らが死んだところで俺は別になんとも思わない。問題はその後だ。

俺は、この世界で初めて俺以外の人間に出会った。

それは俺の同級生の黛四季だった。

俺以外にも人間がいたんだな。盗賊の頭は「お前以外に人間なんていない」とか言ってやがったのに。

アイツも何か能力を持っているんだろうか。

「おい！待ってくれ！」

後ろからさっき助け出した盗賊の頭たちが追いかけてきた。

「生き残ったのはお前だけなのか？」

「ああ、そうだな。兵士もお前の仲間も全滅した」

「なんでお前だけ残ったんだ？お前はそんなに強いのか？」

「あんな量の兵士に負けるほど弱くはないな」

俺はもっと強くなる、誰もが戦うのすら馬鹿馬鹿しくなるくらいに。
あの程度の兵士に負けるようじゃダメなんだよ。

「……お前、何をしたんだ？」

盗賊の頭と一緒にいた別の盗賊が俺に聞く。

「言われた通り、戦っただけだ」

「そういうことを聞いているんじゃない。お前一人だけがどうやって生き残ったのかを聞いているんだ」

「……なんかコイツ、腹立つな。」

「そこまで気になるんなら見せてやるよ、俺を刺してみろ」

俺はそう言い、制服のズボンのポケットに両手を突っ込む。

「……本当にいいんだな？」

「ああ、さっさとしろよ」

盗賊はナイフを片手に走って近づき、俺の心臓あたりを刺した。

「……え？」

しかし逆に俺がナイフを持ち、盗賊の心臓辺りにナイフを刺していた。

「こういうこともできるんだよ、俺の能力は」

——四季サイド——

紅葉とあった後そのまま城の書庫に戻らず（ていうかもう夜だしレイラも帰ってるなと思った）王都をぶらぶらしていた。てか何処に行っても変な目で見られるんだけどちくしょう。夜だから髪も目立たないと思ったのに・・・

結局、宿の部屋に戻ってきて適当にくつろいでるわけだ。

てか紅葉もこっちの世界に来てたんだな、てか名無しの・・・いや、咲良はこの世界に人間は俺しかないって言ってたのに他の人間もいたやん。

『最近調べて無かったからわからなかったの』

久しぶりだな咲良。

しかし何で紅葉なんだ・・・アイツが能力とか手に入れたらなに
するかわからんぞ。

普段からなに考えてるかよくわからんようなやつだし。

『いや連れてきたの私じゃないし、彼は『亀裂』を通ってきたんだ
と思う』

ああ、前言ってたヤツか。てか『亀裂』を通っても能力とか身につくもんなの？

『人間の9割はこっちの世界に来るとなにかしらの能力が身につくよ』

マジかい。

ん？それじゃあもしかして俺も『偽神』^{レフリカ}とは別に能力があったりするん？

『あると思う。それが何かまではわからないけど。君は1割の人間みたいだね』

まあ『偽神』^{レフリカ}があるから全然いいんやけどね。もう一つ別の能力があっても面白いけどさ。

『人間は全員が例外なく何かしらの能力を持ってるの、あっちの世界じゃその能力の存在にすら気づく人なんていないけどね。でもこっちの世界の空気に触れるとほとんどの人がその能力の事に気づいて、自分で能力を使えるようになるの』

よくわからんけど、なんかわかった。

つまりこっちの世界に来た時点ではほとんどの人間は何かしらの能力を手に入れるわけだ。

『君の場合は私があげた能力が君の本来の能力を邪魔してる感じなんだろうね』

まあこの能力結構気に入ってるから全然いいんだけどね。

俺の本来の能力が手のひらから味噌汁を出す能力とかだったら嫌だし。

『味噌汁すきなの？』

好きでも嫌いでもないなあ。

どっちかっていうと洋食派やね、魚とかあんまり好きじゃないし。

てかそれならやっぱり紅葉も何かしら能力を持ってるって事やんね？

『そうなるね、どんな能力なのかは見てないからわからないけど』

あの人数の兵士をほとんど一人で倒したとなるとかなり強いのは確かなんだろうね。

あんま紅葉には動き回らんでほしいね、なにするか分かったもんじゃない。一年生の時に紅葉は喧嘩で相手を殺しかけてるしな。

『・・・なにがあつたの？』

別になんにもないんだよねそれが。

喧嘩売ったのは紅葉じゃなくて相手のほうだし。でも紅葉があそこまで喧嘩強いとは思わなかったなあ。

『その、君の友達は危ない人？なんで殺しかけるまでしたの？』

紅葉は結構普通なんだよ。まあ、あそこまでやった理由はかなりびっくりしたけどさあ。

『・・・どんな理由？』

それが「態度が気に入らない」ってだけなんだよ。

『……大丈夫なのその友達。普通に危ない人じゃん』

いやまあ普通にしたら全然いいヤツなんだけどね。

『まあ、君がそういうならそうなんだろうけど……』

雪乃と紅葉がいれば向こうの世界で退屈はしなかったなあ。そういえば雪乃は今なにしてんだろう。相変わらず勉強ばっかしてんだろうな。てかよく自主的に勉強とかできるよなあ、俺は学校ですらないというのに。

『それはそれで問題だよ』

うっさいわ。勉強きらいなんだから仕方ないっしょ。嫌いな事と面倒な事は極力したくないんだよ俺は。

『めんどくさがり?』

自負してるよそれくらい。

『君、RPGゲームとかでサブイベントをやらないタイプの人でしょ?』

残念、RPGゲームは全部サブイベントをクリアするタイプの人間だよ。たとえ二週目以降のイベントとかであっても絶対にやるんだよ。

『……君もなかなか謎なところがあるね』

ゲームは好きなんだよ。サブイベントとかもクリアしないとなんかもつたないやん。

『ふーん……。あ、もうこんな時間じゃん。そろそろ寝るね、おやすみ』

あいよ、おやすみ。

てか今何時よ。ケータイ何処やったかな、てかまだ充電残ってんのかも微妙だ。

……。まあいいや、寝よう。

14話 問題だよ（後書き）

こんにちは、ビビりだけどホラーゲームが好きなアヲネギです。
夜中に一人でプレイしてて怖くて寝れなくなることもかたまにありますね。

今回は視点変更とかしてみました。

難しいですね、はやく慣れたいです。

一応、能力が使えるのは人間だけで、異世界の人達は能力が使いえない代わりに魔法が使える感じです。

というか気づけばPVが10000を越えてました！

意外と見てくれる人がいて嬉しいです。

誤字脱字、わかりにくいところがあれば教えてください。

15話 リンゴ一つでどうだ？

気がついたら、高校の屋上にいた。周りにはるはずの街はなく、代わりに海が広がっていた。

・・・ああ、ここは俺の精神世界か。

いつここに来たんだ？俺は確か寝たはずなんだけどなあ。

「・・・リアルな夢やな、珍しい」

とりあえず、夢って事にした。てか夢でも精神世界にきたりできるのね。

【そう、これは夢。『俺』^{おまえ}は確かに寝たし、あれから一度も目覚めていないよ】

急に、後ろから俺にそっくりの声が出た。何故かわからんけど聞くだけで不快感を抱くような声だった。俺もこんなに嫌な感じの声をしてんのかな。

「・・・これはまた珍しいな、俺のそっくりさんとは」

声の主の姿は、俺と瓜二つだった。

違うところと言えば対峙しているだけで不快感を抱くくらい。

だたその不快感が異常で、コイツに会うくらいなら死んだほうがマシだとすら思えるレベル。できることならこの場から逃げ出したいが、逃げるところがない。何故か俺の精神世界であるこの高校の屋上は、下に続く階段が一つも無い。

あとは服装が違うくらいか。俺はジャージなのに対して、アイツは学校の制服だ。

それも普段の俺と違ってきっちりと着ている。

・・・似合わないな

【これはびっくりしたね。俺の姿を見た瞬間目が覚めると思ったんだけどなあ】

「できればはやく目覚めたいね、それよりお前は誰なん？似すぎて気持ち悪いんだよ」

俺は少し後ろに下がる。

ホントに何なんだコイツは。嫌な夢だ。

【はははっ！俺が誰かって？そんなの見たまんまじゃないか。】

何がおかしいんだよ、それに見たまんま？意味がわからない。

【俺は『俺』^{おまえ}で『俺』^{おまえ}は俺なんだ。『似ている』のではなく『同じ』なんだよ】

「俺はお前みたいに不快感を撒き散らすような人間じゃねえよ。似てるのは外見だけだろ」

【そう！『同じ』なのは外見とかだけなんだよね、むしろ『心』^{ないめん}は正反対だよ】

ダメだ、コイツと話しているのは気分が悪くなる。喋ってるだけでこんなに嫌な気分になったのは初めてだね。

コイツの何処が嫌とかじゃなくて、コイツの全てが嫌だ。声も姿も全部嫌だ。

【辛そうだね、大丈夫かい？】

「大丈夫に見えるか？早く目覚めたいよホント」

【随分と俺の事が嫌いなんだね。自己嫌悪かい？まあいいや、今回はただ『俺』^{おまえ}に挨拶にきたただけだしね。もう用は済んだし……目を覚ませ】

俺にそっくりなコイツが不快感溢れる声でそういうと、俺の意識が遠のいた。

——☆——

「……はっ！」

意識が戻ると、昨日寝るときに見た天井が見えた。

マジで夢だったんだな。いや、夢で助かったというかなんとか。

「なんだったんだアイツ……気持ち悪い」

てか俺もあんなに不快感溢れるような声をしてるのかな、声だけじゃなく姿も。

「シキさん！おきてくだ……おきてますね、すいません」

ちよいどいいタイミングでレイラが部屋に入ってきた。てかノックくらいしろよな。

「あー・・・ちよいレイラに聞きたい事が」

「はい、なんですか？」

ちよつと聞いてみるかな、本当にアイツが俺と同じなら俺も不快感撒き散らすようなヤツなんだろうし。

「俺の事を不快に思った事とかあったりする？」

「ないですよ」

即答っすか。でもよかったわ俺がアイツとそこまで同じじゃなくて。ならアイツと俺の違いは内面ってことか？内面は正反対とか言ってたし。

「どうかしたんですか？」

「いやね、俺とそっくりのやつと会ったんだよ。ソイツは不快感を撒き散らすようなヤツだったからもしかしたら俺もそうなんかなーって思っただけ」

とりあえず、アイツの全てが不快だと思ふ理由は、姿じゃなく内面ってことか？

・・・もしかして寝るたびにアイツと会うとかないよな？

「そんなことよりシキさん！お城に行きましょう！」

「おk、行こうか」

ま、考えててもしゃーないわな。

——☆——

城について、昨日と同じく書庫でエリス、レイラと喋ってた時に急にロルスが書庫に入ってきた。

そして急に俺に土下座をして

「人間！俺を鍛えてくれ！」

こう言った。いや待って、ちょっと待って意味分からん。何で？何があったのロルスに？

「とりあえず意味わからん」

「お前が使っていた魔法を教えて欲しい」

魔法？ああ、『スモーク煙酒場』とかか。

「確かに興味あるな、私にも教えてくれないか？」

「私もあるすまぐなを教えて欲しいです！」

えー。なんでそんな知りたがんのさ。

「やだね、説明すんのは苦手なんだ」

なによりめんどくさいし。

そしてレイラ、なんで『アルスIIマダナ黄金練成』なんだよいきなりレベル高すぎるやろ。

「そうだな・・・私達三人に技を一つ教えるにつきあのリンゴ一つでどうだ？」

「よしいくらでも教えたるわ、とりあえず場所を変えようか」

まああの美味しそうなリンゴもらえるなら説明くらい頑張るか。

15話 リンゴ一つでどうだ？（後書き）

こんにちは、ごく普通のアヲネギです。

四季くんとまったく同じ外見のキャラを出しました。

同じ姿の二人ってなんかいいですね。

そう思うのは自分だけでしょうか？

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

16話 無職だよ

場所はまたまた地下の闘技場。そこにロルス、レイラ、エリス、そして俺の4人がいた。
最近よくここにくるような気がする。

俺の使う技を教えて欲しいって言われてここに来ただけど……

「で、できない」

「できんぞ！」

「できません！」

みんなできんかった。ちなみに教えたのはテレポート。

『ん、なにしてんの？』

おお咲良か。いやね、みんなが俺の使ってる技を教えて欲しいって言うから教えたんだけどできんかったのよ。

『そりゃ無理だよ』

……え、何でなん？

『簡単に言えば君の使う技は人間だからできる技なんだよ』

頭の悪い俺でも理解できるようにもっと分かりやすく教えて欲しい。

『んー、あの能力を持つてる君だからこそできるってこと』

つまり『^{レプリカ}偽神』がある俺だからこそできるって事か。魔法とかを応用して似たようなことができればと思ったんだけどそれだと無理っぽいな。

『君がその世界の魔法に詳しいならできたかもしれないね。』

魔法ってなんかややこしそうで苦手なんだよ。書庫にある本を適当に読んでみたけど全く分からなかったよ。
てかロルス達にあやまらんとダメだな。

「あーすまん。やっぱ教えられんわ」

「な、なんですか!？」

「テレポートは難しいんだよね、今のままだとちょっと厳しいなあ」

俺も魔法の事少しは勉強した方がいいんだろうけど勉強なんて自分から進んでするものじゃないよね。向こうの世界でもそうだったようにこっちの世界でもそうさせてもらおうかな。

『君・・・そんなのでよく進級できたね』

自分でも不思議だよホント。

てか咲良、俺って二人いんの？

『君は一人だよ。どうかしたの?』

いや、この前の精神世界あったじゃん。昨日寝てからそこに行った

んだけど、そこに俺のそっくりさんがいたんだよね。

『……夢でしょ？』

だといいんだけどね。

いやでも夢にしてはリアルすぎる気がするんだよね……

「人間！他の技を教えてください」

「あー……その事なんだけど」

とりあえず、ロルス達にちゃんと説明しないとダメだな。

——☆——

「ふむ……つまり、人間にしかああいう技は使えないという事か？」

あれから5分くらいかけて俺の使う技はみんなには使えないことを一通り説明した。

そしてエリス、人間なら誰でもできるといふわけじゃないぞ？むしろ俺が変わってるんだ。

「まあ、そういうことやね」

「ていうかシキさん」

「ん？」

「そろそろシキさんのお金尽きます」

え、なんで今それを言うの？今まったく関係なくない？

てか元がどのくらいあったのかしらないけどまだあれから二日くらいしか経ってないよね？

「そういえばシキ、どこで働いているんだ？」

「こっちの世界では無職だよ、なんかいいバイトあったら教えてや」

向こうの世界では学生ニートだったけどね。

「そうだな、ばいとが何かわからんがギルドとかで依頼とかを適当にしておけば生活する分には困らないだけの額は稼げると思うぞ」

「ギルドって何？」

あれか、ネットゲとかでよくあるやつか？

「いろんな依頼が届く場所ですよ」

ああモンハンの集会所みたいなものか。

てかアレもハンターズギルドだったっけ？

「面白そうやね、ちょっと今からみてくるわ」

「いまからですか？」

「今からっすよ。大丈夫、こんがり肉を焼くのは大得意なんだ」

こんがり肉だけでアイテムボックスの1ページ丸々埋めたことあるし。

よし、そうと決まれば行くしかないな！

「ちょっと何言ってるかわかりませんが……ってちょっと待ってください！」

「待たない！肉を焼いて金を稼ぐぞ！」

ロルスとエリスが後ろから「アイツは何を言っているんだ？」的な視線を送っていたのは多分気のせいだろう。

16話 無職だよ（後書き）

こんにちは、最近意味もなく夜中遅くまで起きてるアラネギです。

なんか久しぶりに更新した気がします。

全然そんなことないんですけどね。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

17話 ただ、運が悪かったってだけなんだ

「魔物退治、盗賊退治、商人の護衛……いろいろあるなあ」

すっかり夜になった頃、俺とレイラはようやくギルドに到着した。
てかこんがり肉納品クエストはないっばいな、残念だ。

「あ、これなんかどうですか？」

レイラが依頼が書かれた紙が大量に貼り付けられている掲示板みたいなの上の方を指差しそういった。
その指の先には「『吸魂鬼』^{ソウルイーター}の退治」と書かれた紙が貼られていた。
やっぱりなんかモンハンっばいな。

「『吸魂鬼』^{ソウルイーター}って何？」

「吸血種^{ヴァンパイア}の亜種みたいなものです。違うところと言えば血じゃなくて魔力を吸うところと、吸われた人も吸魂鬼になってしまುತ್ತところですね。」

よくわからんけどゾンビみたいなのかな？

「^{ヴァンパイア}てか吸血種には血を吸われても吸血種にはならないんやね。」

「いいね、面白そうだ」

「それじゃさっそくこの依頼受けてきますね！その辺で待っていてください！」

そう言ってレイラは受付のような場所に行った。

ん？

レイラは確か「『吸魂鬼』ソウルイーターは吸血種ヴァンパイアの亜種」って言ったよな？

それで魔力を吸われた相手も吸魂鬼ソウルイーターになるって言ったはず。それは吸われた相手が誰であれそうなるんかな？

つまりそれって龍人種ドラゴニユートとか吸血種ヴァンパイアを強制的に吸魂鬼ソウルイーターに変えるって事やんね？

種族を変えるなんてことできんのかな。

いや、変えるっていうか不治の病みたいなものって考えたほうが自然やね。俺も気をつけといた方がいいかな。

……ってこんな事考えてもしかたないか。

「おまたせしました！出発は明日の昼にしましたよ！」

「ん、それじゃ宿に戻ろうか」

まあ、別に聞くほどの事じゃないよね。

てか、明日の昼って事は寝なきゃいけないわけか。いや寝なくてもいいけど寝なきゃ依頼中に寝てしまうかもしれないし。

またあの俺のそっくりさんに会わなきゃいけないんだな。



「……やっぱ、寝たらこうなんのか」

宿に戻って、起きてようか寝ようか迷ってるうちに寝てしまった俺は、また俺の精神世界にきていた。

ホント、毎回こうなんのかな。夢にしてはリアルすぎて気持ち悪い。

【なんだか気に入らない様子だね。この世界が不満かい？】

・・・やっぱ、コイツもいるんだな。

相変わらず気持ち悪い声してる、同じなのになんだこの違いは。

「俺はお前が気に入らない」

マジでなんなんだコイツは。視界に入れるのも嫌になるわ。

【ひどいなあ、自己嫌悪？】

「自己嫌悪じゃねーよ。俺はお前が気に入らないだけで、俺自身は嫌いでもなんでもないわ」

【・・・まあいいよ。それに前も言ったようにまるつきり俺達は同じってわけじゃない】

確か心は正反対とか言ってたかコイツ。

【それに正直なところ、俺も『俺』おまえが気に入らない】

コイツから発せられる不快感が一気に増した。心が折られそうになるような不快感。

もしかしてコイツも能力とか持っていたりするのか？
まさか俺と同じだったりしないよな？

「お前、能力とか持ってたのか？」

【そうだね、俺は『俺^{お前}』が失った能力を持ってるよ】

俺が失った能力？ちよつとよくわからん。俺自身に元からある能力と咲良から貰った『偽神^{レフリカ}』の二つだけじゃないって事か？

【外すつもりで友達に向かって投げた小石が友達の目に当たって失明とかしたら大変じゃない？】

「は？」

【責任も取れないし慰謝料なんて払いたくないし困るよね？】

いきなりどうしたんだコイツは。

【そういうのって事故じゃん？自分は外すつもりで投げたんだから当たって失明しても自分は悪くないわけだ】

何言ってるんだコイツ。

いきなりワケの分からん話を始めて何が言いたいんだよ。

【ただ、運が悪かったってだけなんだ】

「だから、なんなんだよ」

【なんでもないよ、たださっきも言ったようにそういうのって事故だから外すつもりで投げた自分は悪くないってだけ】

・・・何が言いたいんだ？

【・・・まあ、言っても理解できないかもね。とりあえず用もすんだし、目を覚ませ】

17話 ただ、運が悪かったってだけなんだ（後書き）

こんにちは、二回連続のアヲネギです。

前の話とこの話はもともと一つにしてあげる予定だったんですけど、分けたほうがいいかなと思って分けました。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

18話 それなら死体持ってくるよ

「あ！おはようございます！」

「おー・・・おはよう」

最近寝ても疲れがとれない気がする。肉体じゃなくて精神の。そのうち不眠症とかになりそうで怖い。

「元気ないですね。眠れなかったんですか？」

「まあ、そんなところ」

眠れはしたけどアイツの心が折れそうになる不快感のおかげで精神的にはまったくリラックスできなかったよ。
しかし昨日アイツが言ってた事も気になるな。

―――【外すつもりで友達に向かって投げた小石が友達の目に当たって失明とかしたら大変じゃない？】【責任も取れないし慰謝料なんて払いたくないし困るよね？】【そういうのって事故じゃん？】
【自分は外すつもりで投げたんだから当たって失明しても自分は悪くないわけだ。】【ただ、運が悪かったってだけなんだ。】

アイツは何が言いたかったんだ？

それに心は正反對っていうのも気になるな。表と裏みたいな感じ・・・じゃないよな。

「シキさん？どうかしたんですか？」

「いや、なんでもない。それより、吸魂鬼ソウルイーターの特徴とかをもっと教えて欲しい」

そうだよ、夢の事よりも現実の事を考えないと。

「特徴ですか・・・そうですね、私は直接見た事が無いんですけど
肌が吸血種ヴァンパイアよりももっと白く、光が苦手だって聞いた事があります」

あ、光が苦手なのは吸血種ヴァンパイアの特徴ではないんだ。

「光に当たるとどうなの？」

光は苦手ってだけで当たっても特になんともないとかだと困る。

「光に当たったら体がどんどん焼けていくらしいです」

そりゃ苦手だろうね。苦手を通り越して無理なんでしょそれは。

「まあ焼けても影とか光の当たらない場所、当たっていない場所に
戻ればすぐに再生するらしいですよ」

「・・・なるほどね。まあそんなくらいなら勝てそうだ」

にたような敵が出てくるホラーゲームを俺は全クリしてるしね。

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫。吸魂鬼ソウルイーターってのをフルボッコにすればいいんやろ？
どうにでもなるわ」

「なんか、危ない気がします・・・」



街からだいぶはなれた薄暗い森の奥にある洞窟。そこに俺らの目的の吸魂鬼ソウルイーターがいるらしい。

そして俺達は今、その森を進んでいた。

「今って確か昼間やんな？夜とほとんど変わらんじゃないか」

薄暗いというか日があたるところがほとんどない。昼間なのかどうかも怪しくなるわこれじゃ。

でもまあ、こういう場所は吸魂鬼ソウルイーターとか光に弱い奴には最高の場所なんだろうな。

「そうですか？」

「お前見えるの？」

「はい、吸血種ヴァンパイアだからでしょうか？みんなが暗いって言う所でもよくみえるんです」

暗視ゴーグルみたいなものか、便利じゃないか。俺も欲しいわ。

「てか洞窟ってどの辺にあるの？まだ先？」

「いえ、もうすぐのはずですよ。あ、ほら！もう目の前ですよ！」

レイラには見えてるんだろうけど俺には見えん。懐中電灯でも作るか。

手に光が集まり、それが懐中電灯になる。

「うん、これなら見えるな」

はじめからこうすりゃよかったな。

そしてレイラの言った通りすぐ目の前に洞窟があった。

「そんじゃ入るけど、レイラはここで待っとくか？」

「え？何ですか？」

「吸魂鬼に魔力吸われたら吸魂鬼になるんでしょ？ならここにいたほうが安全じゃない？」

この世界の人たちには多かれ少なかれ魔力があるのはレイラと初めて会った時に「魔法が使える」って言ってたのでなんとなく分かった。その時は吸血種ヴァンパイアだけなんかと思ったけどロルスと戦ったときに魔法を使ってきたので龍人種ドラゴニユートにも魔力がある事が分かった。二つの種族しか魔力をもっていないとしても吸血種ヴァンパイアであるレイラは魔力を持ってるって事だ。

つまり吸魂鬼に魔力を吸われてしまえばレイラも吸魂鬼ソウルイーターになってしまふ。

まあ吸魂鬼ソウルイーターがどんなヤツかしらないけど退治の依頼が来るくらいなんだからあんまいいヤツではないんだろう。

「そうですけど・・・私も吸魂鬼ソウルイーターを見てみたいんです」

「それなら死体持ってくるよ」

「何怖い事言ってるんですか！私も行きたいです！シキさんの戦う

「ところも見てみたいです！」

「・・・あいよ。なるべく守るけど、自分でも気をつけてな？」

「はいっ！」

「あらいい返事。」

「多分なんて言ってもついてくるんだろうな。」

18話 それなら死体持ってくるよ（後書き）

こんにちは、外を歩けばよく事故の一步手前の状況になりやすいアヲネギです。

ていうか明日はホルモンのCDの発売日ですね。

楽しみで夜しか眠れません。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

19話 クソ野郎

「見つからんね」

「そうですね」

洞窟は暗いし吸魂鬼ソウルイーターはみつからんし・・・洞窟入ってからどのくらい経ったんだ？日が見えないからよくわかんね。

「・・・帰ってよくない？」

「ダメです！」

ちなみにこのやり取りはもう28回目。

てかマジで何処にいるんだよ吸魂鬼ソウルイーターとやらは・・・

「さすがのシキさんでも探せませんか？」

「そうだなあ・・・視界ジャックとかしてみるわ」

視界がテレビの砂嵐の様になり、周りに意識を向ける。

・・・これがレイラの視界だな。なるほど、めっちゃ周りよく見えてるな。懐中電灯無しだと何も見えない俺とは比べ物にならんくらいよく見えてるな。てかフードを被ってるから視界の上の方がよくみえない。

他には・・・いた。コイツの視界の遠くの方に洞窟の入り口がある。ちやうどこの洞窟に向かってきてる感じか？

「どうですか？」

「誰かわからないけど誰かいた。洞窟の入り口にいるな」

「わからないんですか？」

「誰かの視界が見えるだけだからなあ。とりあえず入り口まで戻ろうか」

「そうですね。あ、私道覚えてるんで着いてきてください！」

「いや、テレポートで戻ろう」

そう言って、俺は歩こうとしたレイラの肩に手を置く。
洞窟の入り口を思い浮かべて――

「え、何でs――」

はい、移動完了。もう洞窟の入り口までもどってこれたよ。

「こっちの方が速いやん？」

「そ、そうですねど……むう」

なんかレイラが怒ってる。

「すこしは私にも活躍させてくださいよ！」

あ、それで怒ってんのか。

いやでもこっちの方が速いしさあ、楽じゃん？

「まあそれはいいとして！誰かいるって言ったのに誰もいないじゃないですか！」

「もうすぐくるんじゃない？あ、ほら来た」

と言っても姿は見えないけどね。足音しか聞こえないけど確実にここに向かってきてる。

「何だお前ら？人が留守の時に勝手に入ってんじゃないやねえよ」

周りが急に黒い霧で覆われた。やばいただでさえ視界が悪かったのにこれで完全に見えなくなった。これじゃもう懐中電灯の光も見えないわ。

「シキさん！周りが！」

「わかってるよ。俺はすでに視界がマジで真っ暗な状態だけどレイラは見えてたりすんの？」

「い、いえ・・・さすがに何も見えませ——きゃっ！」

「ん？どした？」

「し、シキさん・・・逃げて・・・」

・・・なにか起こってる感じか？
とりあえずこういうときは視界ジャックだな。

レイラの視界は・・・真っ暗だ。
ならさっきいたもう一人は・・・

「っ！お前！」

もう一人は、レイラの顔を片手で掴んでいた。
そしてレイラから青いオーラのようなものが吸い取られていた。

「お前の仲間か？コイツすげえ魔力持ってるな。」

レイラは、コイツに魔力を吸われたって事か？

「久しぶりに魔力吸えて満足だわ。あ、コイツ返すわ」

そう言ってコイツはレイラを俺の足元に投げた。

「・・・一応聞くけど」

「あ？」

「お前が吸魂鬼ソウルイーターで間違いないよな？」

「ああ、あってるぞ。俺が吸魂鬼ソウルイーターだ」

コイツの退治が依頼の目的だったよな？
つまり、殺しても問題ないってことだよな？

「そんなことより、次はお前だぞ？」

「・・・俺さあ」

「あ？」

「かなりめんどくさがりなんだよね。やらなきゃいけないことかは基本的にしないタイプなんだよ。夏休みの課題とかもやらなきゃなーって思って結局やらないような」

「・・・何言ってるんだお前？仲間が死んで頭がイカれたか？」

「でもさあ、友達との約束とかを破ったことはないんだよ。だって友達と遊ぶのって楽しいじゃん？だから俺は友達は結構大事にしてるつもりなんだよ」

「安心しろよ！お前もすぐにその友達と同じ吸魂鬼ソウルイーターにしてやるよ！」

こっちに向かって走ってくる足音が聞こえる。

そしてアイツは俺の頭を掴もうと腕を伸ばしてきた。

その腕を『ツイスター』の能力を使って掴む。

「ぐあっ!？」

「だから俺はお前を許さない！本気で相手してやるから覚悟しとけやこのクソ野郎！」

19話 クソ野郎（後書き）

こんにちは、ついさっきレモンティーを買ってきたアヲネギです。
なぜかファミマに売ってなかったので近くのスーパーまで行ってきました。

四季くんキレましたWもうブチギレですW W

そして次回はもちろん戦闘ですよW

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

20話 台無しにしてやるよ(前書き)

今回すこしグロい表現があります。

20話 台無しにしてやるよ

「ぐっ……お前、見えてるのか!？」

「どうでもいいじゃねえかそんな事! オラどうした! もっと抵抗しろよ! 俺を殺すんじゃないのかよ! ? やってみろよホラ! 」

相手の腹を力を入れて踏む。もちろん『ツイスター』はつかったまままで。

「ぐあっ! 」

「オイさっさと立てよクソ野郎。はやくしねえと逆に俺がお前を殺すぞ」

腹を押さえてうずくまってるコイツをさらに蹴り、『ラフラフラシア荒廃した腐花』を使い右手でコイツの首を掴み、持ち上げる。

「どうした? 早く振りほどかないと首が腐って頭と体が離れるぞ? 」

そして、左手で『螺旋丸』をつくり、コイツの顔にぶつける。

「あ……ああ……」

「綺麗に顔面の皮膚が全部はがれたなあ! ? 歯もほとんど無くなっちゃって可哀想に! 鼻の骨も砕けてるなあ! ? 不恰好な人体模型みたいじゃねえかよ! どうしたよ痛くて喋ることもできねえか! ? そんなわけねえよな? さっさと再生しろよ! 」

「ぐ……離せっ！」

さっき『ツイスター』で折ったほうの腕はもう再生したのか、再生した腕で俺の右手を掴み右手の骨を何かの魔法で折る。

「うおっ！折れちゃったよ、痛いなあ」

「はぁ……はぁ……何だ、お前……」

もうほとんど再生したであろう吸魂鬼ソウルイーターが俺に問いかける。

「ただの人間、ごくごく普通の高校生だよ」

視界ジャックを使いながらテレポートを使い、吸魂鬼ソウルイーターの後ろに瞬間移動する。

「そうだね、違うところと言えば……」

「なっ……いつの間につ！」

「【こういうことができるってところじゃないかなあ！】」

相手が震えて腰を抜かすが、そんなこと関係ない。『粉碎の一撃』オールクラッシュで顔を思い切り殴る。

RAVEに出てくるダークブリングの一つで、触れた物を粉々にするダークブリング。

当然、アイツの顔は粉々に砕け散る。

「【こんなで終わるとか思うなよ！ほら立てよ！】」

ダークブリング『アナスタシス』の能力を使い顔が粉々になった^{ソウルイーター}吸魂鬼を再生させる。

「な、なんなんだ……お前は……」

足が震えていて立ってるのもやとって状態の^{ソウルイーター}吸魂鬼がビビりながら俺に聞く。

「【さっきも言っただろ？ただの人間だって。それよりほら！俺ばっか攻撃してても悪いじゃん？お前もなんかしてこいよ】」

両手を広げて余裕な感じのポーズを取ってみる。

「【まあ、お前が何をしてもここから先はお前にとって少しも都合のいい事は起きねえけどな。起きる事はお前にとって最悪な事だけだ】」

「あ、ああ……」

「【情けないなあこの程度で腰なんか抜かしちゃって。お前もうダメだよ、終わらせるわ】」

^{ソウルイーター}吸魂鬼は腰を抜かし、尻餅について後ずさりをしている。

「【そうだなあ……まずはお前がせっかく頑張って俺に与えた一撃を台無しにしてやるよ】」

「お、折ったはずの腕が治って……」

「【俺の腕の骨折を「なかったこと」にした】」

使った能力は『大嘘憑き（オールフィクション）』。
めだかボックスに出てくる球磨川禊の過負荷で、現実を虚構にする能力。
マイナス
すべて
なかったこと

「【あとは・・・そうだなあ。お前の目をなかったことにする】」
ちなみに声に出さなくてもいいんだけどそこは気分。

「ああああああ！痛い！痛い！」

「【ああごめんな！間違えた！悪かったよ！お前の視力だけを無くすつもりで苦痛を与えるつもりはなかったんだ！次は間違えないから！】」

目があった場所から血を流しながらも後ずさりをしている吸魂鬼に話しかける。
ソウルイーター

「【と言っても、もう聞こえてないかな？】」

次は聴覚をなかったことにした。

これでコイツは目がないからなにも見えないし、音も聞こえない。

「【最後にお前心臓をなかった事にする】」

吸魂鬼はすこし苦しんだ後、動かなくなった。吸魂鬼が動かなくなると同時に、あの黒い霧が晴れてきた。
ソウルイーター

「【これで、コイツは終わりだな。あとは・・・】」

横たわっているレイラに目をやる。

これで、レイラの死も無かったことにすればもう全部終わりだ。

「【レイラの死を・・・なかったことにする】」

20話 台無しにしてやるよ（後書き）

こんにちは、トマトが苦手なアヲネギです。
ちよつと四季くんやりすぎですねWW

それじゃ今回出てきた能力の説明を・・・

螺旋丸…NARUTOの主人公、うずまきナルトが使う忍術。

粉碎の一撃…RAVEにでてくるクツキーの持つダークブリング。

アナスタシス…RAVEにでてくるハードナーが持つシンクレア。

大嘘憑き…めだかボックスに出てくる球磨川禊の過負荷。

大嘘憑きはチートすぎますかね？

でもまあ、自分は「やりすぎなきやチートじゃない！」と思ってる
のでW

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

21話 この状況ってわけだ

流石に疲れた・・・能力の使いすぎかな？

ああ、まだやることがあったね。

レイラの死をなかった事にしてもレイラが吸魂鬼ソウルイーターになったことまではなかった事にしてないわ。

「【レイラが吸魂鬼ソウルイーターになった事をなかった事にす・・・】」

あ、やばい倒れた。

倒れるほど疲れてたのか・・・気づかんかったわ。

それによく考えたらさつきフルボッコにした吸魂鬼ソウルイーターのアイツも、もしかしたら目が無くなるうが心臓がなくなるうが再生能力があったら元に戻るかもしれないのに・・・

あー・・・くそ。

詰めが甘いつてヤツかな？

足音が聞こえる。あと声も聞こえるな。なに言ってるかはわからないけど。

てか誰だよ。聞いた事ある声だな。

あれ？

もし吸魂鬼ソウルイーターが起き上がってレイラを殺したら何にも意味ないやんけ。
あ、やばい・・・意識が・・・

「あー……気を失ってもここにくるのか」

はやく起きなきゃいけないのになんでここに来るんだよ。寝たときだけじゃないのかよ。

【いやーすごい！俺が手を貸してやったとはいえよくあんなに一方的にボッコボコにできたね！それに能力まで進化するなんてね。さすがにちよつと予想外だ】

「……進化？」

相変わらず気持ち悪い声してるわホント。最近慣れつつある自分も嫌になる。

【あれ？理解できない？まあいいや、それよりこのままだと一緒にいたあの子が死ぬかもしれないねえ？】

そうだ、はやくここから出てレイラを助けないと。

いやその前にどうやって目を覚ますんだ？

【そうだなあ、ちよつと戦おうか。俺に勝てたら戻してあげるよ】

いきなりなに言い出すんだ。

【ま、『俺』^{おまえ}だけの能力が進化したと思わないことだね。ほら、どこからでもどうぞ】

そう言って、両手を広げて余裕な感じのポーズを取るアイツ。

しかし進化っていうのが何かわからないな。

でも、戻してくれるのは嬉しいね。コイツに勝てるかわからないけど俺の能力で負ける気もしない。

「そうだな・・・とりあえずひれ伏せ」
ヒレフセ

【王土くんの『言葉の重み』だね！でも俺には効果ないみたいだけど？】

・・・何でだ？

都城王土の『人心支配』は対象の駆動系に干渉して相手の行動を操アブノーマルる異常だったはず。

確かに抵抗したりはできたけどここまでなんともないなんて・・・

・

【別に『俺』おまえだけが進化したってワケじゃないんだよね。俺の能力も進化してるんだ】

だから進化って何なんだよ。

【ほらほら！はやくしないとあの子が死ぬかもよ？まあ俺は別にいいけどね】

「・・・相変わらず不快感の塊のようなヤツだなお前は」

【なんでそんなに嫌うかなあ、俺と『俺』おまえは言ってしまうえば表と裏みたいなものなんだよ？】

それなら嫌って当然だと思うけど・・・

【『俺』^{おまえ}が表なら俺は裏で、『俺』^{おまえ}がプラスなら俺はマイナス。そんな関係だよ俺達は】

「気持ち悪い……死んでくれよ」

そう言い、『闇魔刀』^{ヤマト}を能力で作り出す。

【日本刀！ かつこいいねえ！ で、それでどうするの？】

「こうするんだよ、これなら防いでも無傷じゃ済まんでしょう」

そして居合いの構えをとって『次元斬』を三回放つ。デビルメイクライ3に出てくるバージルの使う技だ。

「……なんでだよ」

【驚いた？ 君が考えうる最悪の事態がこの状況ってわけだ】

確かに三回全て当たった。

しかしコイツは服にすら傷がついていない。

【前までは自分の行動がその場で起こる可能性のある最悪の状況を引き起こすだけだったんだけど、進化した今じゃ相手の考えうるその場で起こる可能性のある最悪の状況まで引き起こせるようになったんだよ。『不幸な結末』^{バッドエンド}、それが俺の能力さ！】

つまり俺が「こうなったらヤバイ」って考えたらその通りになる感じか？ そしてコイツのとした行動は常に最悪の状況を作り出すと？ チートすぎるだろ。

でも……

「これなら不幸も何もないだろ！」

アイツの後ろにテレポートし、『直死の魔眼』を使い、持っていた閻魔刀で死点を突いた。

【痛いなー死ぬかもしれないなーいやでもどうかなあ？】

死点を突いたんだ。どんな生き物でも死ぬはずだ。

いやでもコイツもしかしたら「直死の魔眼」すら効果がないかもしれない。

【でも残念！ダメなんだよねえそんなんじゃ】

そう言って刺した閻魔刀を軽くつかむ。

「なっ……！」

【折れちゃった？こんな簡単に日本刀って折れるんだね！】

何でだ？ありえないだろ！軽くつかまただけで折れるなんて！

【どうしたの？ビビってもう動けない？】

「調子のんな！この程度で勝った気になってんじゃねえよ！」

折れた閻魔刀を後ろに放り投げて、今度は螺旋丸をコイツの腹に当てる。

今度は効果があったのか吹っ飛び、数メートル後ろにあった柵にぶつかった。

【痛いなあ・・・死ぬかと思ったよ】

あれ？きいてる？

【肋骨が何本か折れちゃったなあ。いてて・・・】

なんで螺旋丸がきいたのかはわからんけどフルボッコにするなら今のうちだな。『メラメラの実』の能力を使い火拳を放つ。

【うおっ！熱い！】

多分これだけじゃ死なない。
なら次は・・・

適当なコインを能力で作り出し、親指で弾く。

「吹っ飛べ！」

使った能力は『超電磁砲^{レールガン}』。とある魔術の禁書目録に出てくる御坂美琴の超能力。
弾かれたコインが電気を帯びてものすごい速さで飛んでいく。

【酷いなあ、立てない相手にこんな事するなんて】

まだ生きてんのかよ・・・でも無傷ってワケじゃないみたいだ。
かなり傷を負ってる。

【俺の能力だって常に発動してるわけじゃないのにさあ。銃だってリロードとかするじゃん？あんな感じだよ】

なるほど、常時あの能力を発動しつづけられるわけじゃないんだな。一定時間で能力が切れるのか回数なのかはわからんけど。

【そうだなあ、十分楽しめたしここからは出してあげるよ。ま、戻る場所がさっきまでいた場所とは限らないけどね】

「は？」

【今まで行った事のあるどこかの場所に戻れ】

21話 この状況ってわけだ（後書き）

こんにちは、辛いものが苦手なアヲネギです。

ちょっと自分で読み直して分かりにくかった所を説明します。

裏側の四季くんの能力、不幸な結末は「誰かが考えてしまった最悪の状況を作り出すことができ、自分のとった行動が最悪の事態を引き起こす」です。

つまり、誰かにとって不幸、最悪であれば発動することができます。自分のとった行動については「誰かが壊されたくない」と思っていたら壊せます。

裏側の四季くんの能力は、本当は回数制限も時間制限もないです。ただオンとオフを切り替えられるってだけです。

まとめると、オンオフの切り替えができて相手を不幸にすることができる能力ですね。

それでは今回シキくんが使った能力の説明を・・・

人心支配…めだかボックスに出てくる都城王土の異常。

超電磁砲…とある魔術の禁書目録にでてくる御坂美琴の超能力。

メラメラの実…ONE PIECEにでてくるエースの能力。

人心支配ってやっぱり主人公の使う技じゃないですよねww

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

22話 どうしたもんかなあ・・・

——【今まで行った事のあるどこかの場所に戻れ】

確かそんな事言ってたなアイツ。

待て待て待て、なんでそんなことがきんだよ。アイツができるのは俺をあの精神世界から出すことだけじゃなかったのか？

現実の俺の肉体の位置まで変えたりできるんかよ。

いや、ホントは精神世界から俺を出すことしか出来なのかもしれない。もしかしたらアイツが最後に言った【今まで行った事のあるどこかの場所に戻れ】っていうのはもしかしたら嘘で、俺がそんなこともできるのかと思っってしまったからそれがアイツの能力で実現したのかもしれない。

『不幸な結末』、^{バッドエンド}アイツが取った行動が常に最悪の事態を引き起こす能力。おまけに相手が考えてしまった最悪の事態まで引き起こすことができる。

俺はあの時何考えてた？

どんな場所でも行った事のある場所であるならレポートですぐに戻れるとか考えてたっけ？そう考えてたはず。

ならその考えが最悪の事態を引き起こすとしたら「レポートであろうがなんであろうがすぐに戻れないけど俺が一度は行った事のある場所」に飛ばされたって事か？

まあこの考えで正しいんだろうね。実際レポートとかを試してみただけど俺が吸魂鬼^{ソウルイーター}をフルボッコにした場所には戻れなかった。それどころか王都にすら戻れなかった。

この場所じゃテレポートは使えないのか？

他の視界ジャックとか能力は使えたんだ、能力がなくなったわけではないんだな。

やっぱ、別世界にレポートはできないってことか。

俺が異世界に飛ばされる直前までいたこの公園じゃあっちの世界まで飛べないって事なんだな。

「どうしたもんかなあ・・・」

今何時だ？ケータイも充電切れてるしこの公園に時計はないし・・・

かなり暗いから夜なんだろうけど。

いや時間よりかはやくあっちの世界に戻る方法を探さんと。たしか咲良は『亀裂』ってヤツに入れば向こうの世界に行けるって言うってたな。

他には何か方法ないのか。『亀裂』がどんなのかわからんから探すようがない。

マジでどうしよ、はやく行かなきゃならんのに・・・

「・・・・・・四季？」

後ろから、聞いた事のある声が聞こえた。

———紅葉サイド———

それは俺が盗賊の頭に「近くに住みついた^{ソウルイーター}吸魂鬼を殺してきて欲し

い」と頼まれた時の事だった。

アイツに扱き使われるのは正直腹立つが、戦えるというのが嬉しいから引き受けた。

「この辺だったよな……」

洞窟の場所はわからないが、アイツが言っていたのはこの辺りのはずだ。

なにか目印でもあれば探すのも楽なんだがな。

「何だ……この臭い……」

俺が進もうとしていた先の方から腐臭のような臭いが漂ってくる。

吸魂鬼ソウルイーターが殺した人の死体が腐っているとかな？

俺はそう思い腐臭のしてくる方に進んでいたが、それは違った。

「【レイラの死を……なかったことにする】」

そこには四季がいた。

四季が吸魂鬼ソウルイーターなのか？

ないな。そもそも人間には魔力がない。

吸魂鬼ソウルイーターは相手の魔力を吸収することで相手ソウルイーターを吸魂鬼にすることができるとあの盗賊の頭も言っていたしな。

だとするとあそこに倒れているヤツのどちらかが吸魂鬼ソウルイーターなんだろう。そしてさっき四季が言っていたレイラとか言うヤツの死をなかったことにしているって事はそのレイラってヤツじゃないんだろう。

いや待て、なかったことにした？

オールフイクション
まさか大嘘憑きか？それが四季の能力なのか？

オールフイクション
まあいいか。大嘘憑きにも俺の能力だと負ける気はしない。

「【レイラが吸魂鬼ソウルイーターになった事をなかった事にす・・・】」

四季が倒れた。

そしてその後入れ替わるように倒れていた二人が起き上がった。

22話 どうしたもんかなあ・・・（後書き）

こんにちは、この前片付けたところなのにまた部屋が散らかってきたアヲネギです。

これからしばらく視点変更が多くなりそうです。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

23話 俺も四季だよ

「くそ……やってくれたなあ、の黒髪のがき……」

起き上がったうちの一人がつぶやく。

たぶん四季にやられたんだろう。まあ大嘘憑きオールフイクションを使うヤツを相手にしてよくも五体満足でいられたもんだ。

相手が球磨川だったらコイツは無事じゃすまなかっただろうな。

「え……あ、あれ？私生きてる！？」

今度は別のヤツ（レイラだったのか？）が驚いている。

「ど、どうなってるんだろう……」

「お前は死んだんじゃないやねえ、お前は俺に魔力を吸収されて吸魂鬼ソウルイーターになったんだよ」

「……え？」

実際どうなんだろうな。吸魂鬼ソウルイーターに魔力を吸収されて一回死ぬとしたら四季の大嘘憑きオールフイクションで死んだ原因をなかったことにされてるはずだ。

その場合はレイラってヤツは死んだ原因、つまり「吸魂鬼ソウルイーターに魔力を吸収された事」をなかったことにされてるはず。

だが魔力を吸収されても死なずに気絶しただけだったとしたらあのレイラってヤツは吸魂鬼ソウルイーターになっただけだ。四季が倒れる直前オールフイクションに大嘘憑きを発動できていたならまた変わってくるが。

……確かめるか。

「お前、さっき吸魂鬼ソウルイーターとか言ってたな」

「ああ？誰だテメエ？」

「そこで倒れてるヤツ……四季っていうんだが、ソイツの知り合い」

「そうだ！シキさ……あれ？シキさんがいません！」

「さっきまでそこに倒れてたんだが……いないな」

妙だな突然消えるなんて。動ける状態でもなかったはずだ。まあいいか、別にどうでもいい。

「どこかに行ったんでしょうか？」

【いいや、どっか行っただんじやなくどっかに戻っただよ】

後ろから四季の声でした。でもそれは普段からよく喋っている四季とは違って聞こえた。

なんというか……聞くだけで不快に思うような声だった。

「四季……じゃないな。誰だ？」

振り返ると、制服をきつちりと着た四季がいた。普段の四季からは考えられないな。

【君は『俺あいつ』の知り合い？俺も四季だよ、黛四季だ。でも君の知っている黛四季じゃない。なぜなら俺も黛四季だからさ】

何だ・・・コイツ・・・

確かに外見も声も四季と全く同じだ。でもなにか違う。

「・・・・・・・・シキさん？」

【ん？君も『俺』^{あいつ}の知り合い？でも君の知ってる四季じゃないよ俺は。さっき説明したはずだけど理解できなかったの？】

あんな説明で理解できるやつなんていないだろう。

「お前・・・・・・・・どこ行ってやがった！」

ソウルイーター
吸魂鬼の男が四季とよく似たアイツに襲い掛かった。

——四季サイド——

「アンタ四季でしょ！？いままで何処行ってたのよ！？」

「久しぶりやね雪乃」

振り返ると、そこにはクラスメイトの雪乃がいた。

てかこんな時間に外出歩くなよ。今何時なのかはわからんけど。

「急に学校休んでなにしてたのよ？家にもいなかったでしょ？」

多分本当の事言ったら頭が終わってる人と思われるよね。
てか家まで来たのかよ雪乃。

さて、何て言おうか・・・
いやあえて話題を変えるのもありやね。

「てか今何時か分かる？」

「今は11時を過ぎたところね」

よし！話題を変えた！

「なんでこんな時間に外出歩いてんの？」

普通に危険やろ。しかも何で夜中に公園にくるねん。

「アタシもいろいろあるのよ。それよりさっきの話の続き！いままで何してたのよ？」

くそっ！上手くいったと思ったのに！

どんな嘘をつけば自然なのか・・・

「言っておくけど変に嘘ついてもアンタの場合はすぐにわかるんだからね！」

嘘どころか軽く考えてることまで読まれてる気がする・・・
もう正直に話すべきか？

いやでもそれだと俺が変人みたいに思われるよな？

ええい！もうどうにでもなれ！

「・・・・・・・・話をしよう」

「なによ急に？」

「あれはこれから・・・」

「ねえちょっと聞ってるの？」

23話 俺も四季だよ（後書き）

こんにちは、三ツ矢サイダーの飴が好きなアヲネギです。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

24話 『無』

「ま、だいたいこんな感じやね」

「重症ね」

「やかましい、事実なんだから仕方ないっしょ」

まさか神の気まぐれで異世界に飛ばされた件を「重症ね」の一言で片付けられるとは思わなかった。

スレタイにすると「学生ニートの俺が異世界に飛ばされた件について(7)」って感じか？

いやもうちょっと伸びてもいいな、32くらい、いや70は行ってもおかしくないか？

「で、その話が本当だとアンタは漫画の能力とか技を使えるのよね？　なんかやってみせてよ」

「そう言われてもなあ・・・なんか希望とかあれば言ってくれよ。あ、俺の知ってる範囲で頼む」

「そうね・・・それじゃあ彼岸島」

・・・俺は何をすればいいんだろう。

吸血鬼か？　もしかして一回死んで「ハア・・・ハア・・・」って言う俺を期待しちゃうてるのか雪乃は。

自分でも気持ち悪いと思うね。

「斧神とかまり子あたりが見てみたいわね」

もっとひでえ!?

多分できるんだろうけどやりたくねえ! っていうか死にたくねえ!

「できると思うけどできればもっと簡単なヤツで頼みたい」

「んー・・・SIRENの頭脳^{ブレイン}屍人とかはどうなのよ? あ、雛見沢症候群L5でもいいわよ」

「ねえなんでそんなにグロ系ばつかなの? しかも俺が死ぬようなやつばかりなの?」

雪乃は俺が死ぬところをみたいんだろうか。

しかも斧神とかまり子、頭脳^{ブレイン}屍人に関しては俺の顔がすごいことになるぞ。

「冗談よ、特にやって欲しいのとかないからアンタの一番得意なのを見せなさいよ」

ようやくまともなリクエストがきたよ。

しかし得意なやつか・・・特に無いんだよね。

そうだなあ、普段から使うことの多いテレポートでいいか。

テレポートを使い、雪乃の後ろに移動する。

「どうよ?」

「・・・何の能力よそれ」

「ジャッジメントですよ♪」

「黒子の超能力ね。あと気持ち悪いわよ」

いや正確には違うけどね、オリジナルです。

レブリカ
偽神って「知ってる能力を自在に使える能力」ではなく「空想を操る能力」だし。

完全に自分の中でイメージが出来上がってたら漫画とかの能力に頼らなくてもこういうことができるんだよね。

最初は黒子のテレポートを使おうと思ったけど難しそうだからやめた。

だって俺、座標の計算とかそんなのできないし。

それと気持ち悪いのは自分でも言った瞬間に気づいたから言わないで。

「他には何かないの？」

「俺が知ってる能力であればなんでもできるけど危険なヤツとかは危ないから無理やね」

だってかめはめ波とかだと危ないし。

ミスターアンノウン
危なくない能力だと「知られざる英雄」とかなんだけど、それだと雪乃は俺が認識できなくなる。

「でもそんなことが出来るからって異世界に行ったって事にはならないじゃない」

「向こうの世界の空気に触れると人間であればほぼ誰でも能力使え

るようになるらしいよ」

正確には向こうの世界に行った9割の人間が能力使えるようになるんだっただけかな？

「・・・で、アンタはこれからどうするのよ？」

「んー。普通の生活しながら戻る方法を探す予定やね」

早く戻りたいのに戻る方法がないんだよね。

「同じ方法でまた行けばいいじゃない。どうやって行ったのよ？」

「神に連れてかれた」

「・・・もうアンタ異世界よりも先に病院に行ったほうがいいわ」

「いやホントだって！そんな酷いこと言うなよ！」

なんで病院なんだよ！

あれか、雪乃は俺が窓の無い病院に隔離されることを望んでるのか！？

「別に疑ってないわよ。アタシはただアンタの頭が大丈夫なのか気になっただけよ」

「ソレもつと酷いからね！？」

——紅葉サイド——

【おっと！乱暴はいけないよ。いきなり殴りかかるなんて怖いなあ】

・・・どうなってるんだ？

ソウルイーター 吸魂鬼の男が四季によく似たコイツを見て襲い掛かり、殴った。

【それにさあ・・・】

ソウルイーター 確かに吸魂鬼に殴られたコイツは傷一つついていない。
それどころか・・・

【相手の力量も分らないくせによくそんなことが出来るよね、お前】
のうりよく

ソウルイーター 殴ったはずの吸魂鬼の腕が折れていた。

「お、お前・・・何をした!？」

ソウルイーター 腕を押さえてうずくまっている吸魂鬼の男が四季によく似たアイツに声を荒げて聞く。

【見ての通りなにもしてないじゃないか】

本当にどうなってる？

ソウルイーター 殴られたはずのコイツは無傷で、殴ったはずの吸魂鬼の男の腕が折れてるなんて。

普通じゃないな。

【さて、それじゃあ反撃するよ】

「む、無駄だ！俺はどんな傷でも再生できるんだ！」

【へえー再生なんて出来るんだ？】

なんだ、コイツ……

俺が話しかけられてるわけでも無いのに、ものすごい不快感だ。

【でもさ！よく考えてよ。本当にどんな傷でも再生するの？もしかしたら無理かもしれないよ？】

そう言い、四季によく似たアイツは吸魂鬼ソウルイーターの男に歩いて近寄る。

【ほら立ちなよ、殴るだけ殴って俺が殴れないなんて不公平じゃん】
四季によく似たアイツが、吸魂鬼ソウルイーターの男の胸ぐらを掴み、無理やり立たせる。

「うぐ……や、やめろ！」

【えーなんてー？きこえなーい】

ふざけたように四季によく似たアイツが言う。
そしてそう言った後、吸魂鬼ソウルイーターの男を地面に勢いよく叩きつけ、そのあと背中を思い切り踏み、頭を蹴り飛ばした。

【ほら、再生なんて少しもしないじゃん。ピクリとも動かないしさあ、嘘はいけないよ。君たちもそう思うよね？】

四季によく似たアイツが俺の方を見る。

見られているだけなのになんなんだこの不快感は。本当に心が折られそうになる。

「お前……なんなんだ？」

【もしかして名前を聞いてるのかな？ んー、四季だと『俺^{あいつ}』と被るし、そうだなあ……これからは『無^{ゼロ}』って名乗る事にするよ。よろしくね！】

24話 『無』 (後書き)

こんにちは、昨日の夜後輩と遊んでいたら未知との遭遇アヲネギです。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

25話 コーラね

【ほら、君たちの名前も教えてよ!】

ゼロと名乗った四季によく似たコイツが笑顔で俺たちに聞く。

自己紹介されただけでこんなに不快な思いをしたのは初めてだな。

どの辺が不快とかじゃなくコイツの全てが不快だ。近くにいただけで不快に思うし、声を聞くだけでも不快に思う。

「あ、あの・・・ちよつといいですか？」

「なんだ？」

横にいたレイラってヤツが小声で聞いてくる。

俺はそれに小声で返す。

「あのシキさんにそっくりのゼロって人は何者なんですか？」

「俺もわからねえ。ただ、外見が似てるだけの別人ってワケでもなさそうだ」

外見は本当に四季にそっくりだが、それ以外は全然違う。

とりあえず、次は俺達が殺されるかもしれない。

俺はまだ死ぬ気はないし、レイラってヤツは四季のことをいろいろ知っているかもしれない。

【え、何？名前教えたくないとかそんな感じ？そんなんじゃ友達なんてできないよ、友達いるの君たち?】

「……紅葉だ」

「れ、レイラっています……」

どうやってこの状況を切り抜けるか……

【紅葉くん、レイラちゃんだね！ちゃんと顔も名前も覚えたよ！】

どうすればいい？

この場でゼロを殺すか？

だがアイツも何か能力を持っているはずだ。

ソウルイーター吸魂鬼の男が殴りかかったのに逆に自分の腕が折れたところを見るかぎり、ダメージの反射とかか？

ソウルイーターそれだと吸魂鬼の男を地面に叩きつけて踏み、蹴っただけで倒せるのも納得できる。

自分の足にくる衝撃をダメージとみて反射したのなら、たったあれだけで殺すこともできるかもしれない。

地面に叩きつけたときはともかく、思い切り踏んで、本気で蹴ったとしたら足にくる衝撃はかなりのはずだ。

ソウルイーターいや、それでも吸魂鬼には再生能力があったはずだ。たったあれだけで殺せたとしても再生できるはずだ。

ダメージの反射なんかよりもっとヤバイ能力をゼロはもっているかもしれない。

【ん？紅葉くん、君は何か能力を持ってるよね？】

コイツ……見ただけでそんなことが分かるのか？

【そうだなあ、当ててあげよう。んー……君の能力は……交代……だ！そうでしょ？】

——四季サイド——

「てかさ、なんでこんな時間まで一人で外いんの？」

俺は「ある能力」を使って、雪乃に問いかける。

「それは……夜食よ！夜食を買いにきたのよ！」

……なるほど、雪乃にもいろいろ事情があるんやね。

「太るぞ」

「うっさいわね！」

「ポテチとか美味しいけど控えろよ、体重が増えるぞ雪乃ちゃん！」

「気にしてるんだからそういうこと言わないで！」

あれから雪乃とずっと公園で喋ってる。

てか雪乃は時間とか大丈夫なんだろうか、俺はどうせ家にだれもないから大丈夫だけど。

親父は単身赴任で帰ってこないし、妹は寮だしね。

……ギャルゲーの主人公ですか俺は。

「まあ雪乃の体重はいいとして」

「アンタいい加減にしないと殴るわよ!？」

「帰らんで大丈夫なん？」

「う……い、今帰りづらいのよ」

「ごめん知ってた」

「なんで知ってんのよ!？」

「行橋未造の『受信』……めだかボックス読んでる？」

「……読んでるわ。アタシあの漫画大好きなのよ」

行橋未造アフノーマルの異常、『受信』

人の脳波や機械の電気などを肌で感じ取って考えてる事が分かる能力。

アフノーマルこの異常だと機械とさえ会話ができるらしい。

ただ、機械が多い現代社会だとこの異常は使いづらいんだよね。アフノーマル

周りの機械や通りすがりの人の考えまで読んでしまうからうるさすぎて頭がいたくなる。

「どうせ家族みんなが寝てからこっそり帰るつもりだったんやろ？
それまでこの公園とかコンビニで時間潰すつもりだった、って感じ
？」

「あとゲーセンも候補に入ってるわ」

そこは別にどこでもいい気がするけどね。

「ま、話すくらいなら何時までも付き合うからちゃんと帰れよ」

「アンタ時間とか・・・大丈夫ね」

「家に誰もいないからね。大丈夫だ、問題ない」

確か雪乃と紅葉には親父と妹の事言った気がする。まあ、雪乃も紅葉も俺の親父と妹に会った事ないんだけどね。
妹は夏休みとかになると戻ってくるけど親父はほとんど戻ってこない。

・・・ギャルゲーの主人公ですか俺は（二回目）。

「そうだ！何か飲み物おごってよ！」

「話し相手にはなるけど財布はちよつと勘弁だね」

ん？

確かこっちの世界の金なら能力で作りだせるんだっけ？
ただそれだと人としてやったらダメな気がする・・・

「アンタいまいくら持ってるの？」

でたよ・・・

これ所持金の多いほうがおごるっていうパターンのやつだ。

「んー・・・三千円っすね」

「それじゃ買ってきて。あ、コーラね！」

「ちょっと待て、いくら持ってるの？」

「一文無しよ」

なるほど、財布を持ってた時点で俺は負けてたって事か。
てか雪乃は金持たずにゲーセン行く気だったんかい。

25話 コーラね（後書き）

こんにちは、近所のコンビニ、スーパーからレモンティーが消えつつあるアヲネギです。

4件ほど店をみてきましたが一つも売ってないとは＼（＾Ｏ＾）／

それでは今回出てきた能力の説明を・・・

受信…めだかボックスに出てくる行橋未造の異常

実際に受信という名前であってるのかどうかは微妙ですがw

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

26話 気持ち悪いでしょ？

——紅葉サイド——

【君の能力は・・・交代だ！そうでしょ？】

ゼロが、俺の能力の効果を言い当てる。

正確には違うが、ほぼ正解だ。

【なんでわかったのかって顔してるね？理由なんてどうでもいいじゃないか。どうせ生きるために必要な情報じゃないんだしさ】

ゼロは笑顔で話す。

コイツから発せられる不快感のせいか、笑顔がかえって不気味だ。

【ちなみに俺の能力は『不幸な結末』バッドエンドって言ってね、自分の起こす行動が常に最悪の結果を引き起こしたり、最悪の状況になるんだ。ちなみに相手の考えてる最悪の状況も引き起こすことができるんだ。つまり俺の攻撃は当たれば全部致命傷なんだよねー】

なるほど。

ソウルイーター
吸魂鬼の男ををたったあれだけで殺せたのはそれか。

ソウルイーター
それにゼロが吸魂鬼を殺す前の会話。
バッドエンド

アレも能力の効果を上手く使うためだったって事か。

あの会話で吸魂鬼の不安を煽って「もしかして再生能力が機能しないのではないか」という不安をあの手で吸魂鬼に持たせたってことだな。
ソウルイーター

それで吸魂鬼^{ソウルイーター}の再生能力を封じて殺したって事か。

【そうだなあ・・・外の世界でもちゃんと能力が発動するってわかったことだし】

そう言い、ゼロは吸魂鬼^{ソウルイーター}の死体を背負い、近くにあった洞窟に入っていく。

【俺は四季^{あいつ}がこっちに戻ってくるまでここにしようかな。あ、帰らなかったら勝手にどうぞ。別に君たちに興味なんて全くないしね】

「・・・待ってください！」

今まで黙っていたレイラがゼロを呼び止める。

【何かなレイラちゃん？】

「ゼロさんは・・・シキさんの事が嫌いなんですか？」

その問いにゼロは少し首を捻ってからすぐに答えた。

【嫌いだねえ。同じ外見の人が二人もいるなんて気持ち悪いでしょ？】

「何で嫌うんですか？」

【うーん、改めて考えると理由なんて特に無いなあ。嫌いなものは嫌い。そういうことだね。それじゃ、俺はこの洞窟の中で眠るとするよ】

ゼロは手を振り、洞窟の奥の方へと入っていった。

——☆——

「ほら、買ってきたぞ」

「ん、ありがと」

近くの自販機で買ってきたコーラを雪乃に渡す。

「あいよ、てかコーラとか太るぞ」

「美味しいんだからいいのよ。あと次アタシの体重に関する事を言ったらフルボッコにするから」

そういいながら雪乃はペットボトルのフタを開け、コーラを飲む。

しかしフルボッコは勘弁だな。

次から気を付けよう。

「やっぱコーラよね！飲み物の中で一番美味しいわ！」

俺は麦茶が一番好きだけどね。

家で麦茶を飲みつつコンビニのおにぎりを食べながらテレビ見てる時が一番幸せに感じるわ。

「てかさ、アンタ異世界に戻りたいんじゃないの？」

「そうやね」

簡単に戻れそうに無いんだけどね。
だから困ってるんだよ。

「『アルスIIマグナ黄金練成』とか使えばいいじゃない」

「ちょっとやってみるわ」

「試してなかったのね・・・」

テレポートしか試してないから他の能力はどうかわからんもんね。
想像した通りに現実を歪めてしまう『アルスIIマグナ黄金練成』ならもしかしたら
なんとかなるかもしれない。

「俺を向こうの世界に戻せ」

・・・あ、やっぱダメっばいな。

「なんにも起きないわね」

「これも無理っばいな」

ていうか多分なにしても向こうの世界に能力で行くことはできない
んだろうね。

となるとやっぱり咲良にどうにかして連絡するか、『亀裂』ってヤ
ツで向こうの世界に行くしかないって事か。

・・・ん？

「そうか！その手があったか！」

「な、なによ急に！？」

「咲良・・・神につれてってもらえばいいんだと今気づいた」

「それが出来ないから困ってるんじゃないの？」

「いや今さっき『テレパシー念話』で話せることを思い出した」

「テレパシー、ねえ・・・」

なんか雪乃が「そんなことできんのかよ」みたいな目で俺を見てるけど気のせいだ。

そんなことよりテレパシー念話だ！

あー、咲良。聞こえてる？

『ひさしぶり』

おお、よかった。

『ん、あれ！？』

どした？

『君、二人いるね』

俺が二人？

不快感の塊のようなアイツの事を言ってるのかな？

『で、今私に話しかけてる君は私の知ってる君なの？』

そうやね、咲良の知ってるおれ黛四季で間違いない。

『……何で、戻ってこれたの？』

多分だけど、裏側のアイツの能力でバッドエンドこっちの世界に戻された。
というわけでもう一回向こうの世界に戻るために手を借りたいんだ。

「急に黙ってどうしたの？」

「いまテレパシー念話で咲良……神と話してる」

「アタシには聞こえないけど、そういうもんなの？」

「そういうもんやね」

雪乃にも咲良との会話が聞こえたらいろいろ信じてもらえると思う
んだけど、そうする術がないんだよね。

『……誰かいるの？』

友達の雪乃が今いるね。

てか俺と咲良の会話を雪乃にも聞こえるようにできない？

『あ、それならあの部屋で話そうよ』

あの部屋……ああ、あの真っ白のあの部屋ね。

『それじゃ、呼ぶよ?』

おk、いつでもこい。

「え? な、なに! ?」

「うおっ! 気持ち悪っ!」

急に視界が歪みだした。

26話 気持ち悪いでしょ？（後書き）

こんにちは、散髪したアヲネギです。
ばっさり切りました。

おかげで短すぎて落ち着きません。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

27話　なのに全然違う

視界が歪みだんだん酔ってきてそろそろヤバくなってきたって辺りで、視界の歪みが治まった。

「・・・ここ、どこなの？」

そして歪みが治まると、そこは公園ではなくあの白い部屋だった。

「なんてったかな・・・確か、天界と俺たちのいた世界の中間だったかな？」

視界の歪みが無くなってもまだ気分の悪い俺ががんばって答える。ちよっと喋っただけでも結構なヤバさなんだけど・・・

仕方ない。

「気分が悪いのをなかった事に！」

おお、もともどった治った！

「な、なによ急に大声だして・・・」

「オールマイクシヨン大嘘憑きだね。ちなみに私はめだかボックスだと雲仙先輩が好き」

急に近くにあったドアが開き、咲良が出てきた。

てか前ここに来たときはドアなんて無かったような気がするんやけど・・・

改築したんかな？

「誰よこの子？」

雪乃が小声で俺に聞く。

「俺を異世界に飛ばした神様やね」

「・・・・・・」

おお、めっちゃ驚いてる。

まあ俺も初めて咲良を見た時は驚いたけどさ。

なんせ神様が上下黒のジャージを着てるなんて思わなかったし。

あと漫画を読むって知ったときも結構びっくりしたね。

「雪乃ちゃん、でいいのかな？ 私は咲良っていうんだよ。よろしくね」

「ゆ、雪乃でいいわ。よろしくね咲良ちゃん」

「私も咲良でいいよ」

まだ少し動揺してる雪乃と咲良が軽く自己紹介を交わす。

「雪乃は・・・・攻撃系の能力じゃないんだね」

「なんのこと？」

「雪乃の持ってる能力の事だよ。四季にも能力があるんだけど、知

ってる？」

「四季のはさっき見たわ。フィクション漫画の能力を自在に使える能力ってやつよね？」

まあ、それはもともと俺の能力じゃないんだけどね。

異世界に行っても俺は能力が開花しないと思った咲良がくれた能力だ。

実際、能力を貰って正解だったと思う。

「そう。雪乃の能力は……『プリズンスキル異能の檻』だね」

「アタシの能力なのにこんな事聞くのも変だけど……どんな能力かわかる？」

「『相手の能力の使い方を忘れさせる能力』だね。でも雪乃が能力を発動してる間に他の人に触れたら雪乃の能力が解除されちゃうみたい。あ、他の人って言うのは対象の人もそうでない人もだよ」

なるほど、確かにその能力じゃ攻撃はできないね。
ていうかそれってかなり強くない？

「任意で能力の解除とかは出来たりするの？」

雪乃が咲良に聞く。

「うん。できるはずだよ」

……ていうか今気づいたけど俺だけ会話に入れてないよね？
どうりで暇だと思ったわ！

——紅葉サイド——

【俺はこの洞窟の中で眠るとするよ】

そう言ってゼロは洞窟の中に入っていた。
俺達は追わずにただ呆然としていた。

「私達・・・助かったんでしょうか？」

「まず俺達は襲われてすらいないだろ」

精神的にはかなりキツかったが。

「いえ、そうですけど・・・なんて言えばいいのか分かりませんが・・・ゼロさんからはすごい嫌な感じがしました」

そんな事は分かってる。

ゼロの近くにいるだけであんなに不快感があったんだ。
あんなヤツと戦いたくないな。

「シキさんと同じ姿で、同じ声。なのに全然違う・・・何者なんでしょうか」

「知るかよ。ただ、いいヤツではなさそうだ」

アイツは放っておいたらマズい気がするが、俺たちが何とかできる
とも思えない。

「そういえば、モミジさんもシキさんみたいになにか凄い事ができるんですか？」

四季みたいに・・・

アイツの能力は多分、オールフイクション大嘘憑き。

俺の能力とは相性が悪すぎるな。

いや、オールフイクションあの能力だとどんなヤツが相手でも相性は最悪か。

「俺はあそこまで反則な能力じゃないが、チートそれなりに強い能力を持つてる」

「見てみたいです！」

「地味なんだよ俺の能力は」

「でも見たいです！」

「それに面白くもなるともねえよ」

「見たいです！」

「・・・」

コイツどれだけ見たいんだよ。

「まあいいか。見せてやるよ」

俺は能力を使い、俺とレイラのいる場所を入れ替えた。

「……………え？」

「これが俺の能力」

「なにしたんですか？」

「俺とお前のいる場所を入れ替えた」

ありとあらゆる状況を入れ替える能力。
能力名は『嘘鏡』ミライトリック。誰かに教えられたわけじゃなくて、この能力の存在に気づいたと同時に名前も知った。

「い、いいと思いますよ！悪くないです！」

「場所だけじゃねえよ、なんにでも応用できんだ。俺はお前が思ってる十倍は強えよ」

「なんにでも……………例えばなんですか？」

「そうだな……………傷とか」

「自分が傷を負った箇所を相手と入れ替えるってことですか？」

「まあ、そうだな」

どんなことにも使えるのがこの能力の利点だな。

「てかお前はこれからどうするんだよ」

「私は・・・もう少しシキさんを待ってみようと思います。消えた時みたいに急に帰ってくるかもしれませんし」

「そうか、それじゃここでお別れだな」

そう言い、俺はレイラに背を向けて歩き出す。
さっさと寝たい。今日は無駄に疲れた気がする。

「待ってください!」

「何だよ」

「モミジさんも街に来たらいいじゃないですか!ていうか来てくだ
さい!」

「何でだよ」

「きっと楽しいですよ!」

「それでも俺は十分楽しい生活してんだ」

「・・・本当にですか?」

レイラが今までと違って、急に真面目な声で言った。

「・・・本当に、だ」

「嘘です!だってモミジさん、つまらなそうです!」

俺はそれに答えずにそのまま歩く。

レイラはもう話しかけてこない。

「嘘じゃねえ。俺は十分楽しんでるんだよ……それでいいだろ」

誰に言うでもなく、俺はそう言った。

この世界だと俺を縛るものは何もない。

家も、親も、学校も。

何にも縛られず、自由に出来るってだけで俺は満足なんだよ。

27話　なのに全然違う（後書き）

こんにちは、やっぱりレモンティーが好きなアヲネギです。

紅葉くんの能力が明らかになりましたね。

個人的には紅葉くんの能力は結構気に入ってます。

誤字脱字、わかりにくい所があったら教えてください。

28話 面白そうだし（前書き）

ユニークが5000人を越えました！
これからも応援よろしくお願いします！

28話 面白そうだし

——四季サイド——

「なるほどね。だいたいどんな能力なのかはわかったわ」

あれからいろいろ咲良から説明されていた雪乃がなんか納得したように言う。

まあ雪乃は異世界にいかないから多分使う機会なんてないだろうけどさ。

「というわけで四季、ちょっと戦おうじゃない」

「なんでそうなの!？」

「アタシの能力がちゃんと機能するのか試したいのよ!」

「能力って異世界の空気に触れて初めて開花するんじゃないかったっけ？」

「ならアタシも行くわ! 面白そうだし」

えー……

「雪乃はこう言ってるけど、咲良はどうなん? 連れてっても大丈夫な感じ?」

「うん。別にいい」

咲良はどこからか持ってきた週刊少年ジャンプを読んでいた。
ホントに漫画とか読むんだな。

「それじゃ、飛ばすから二人とも手をつないで目を閉じて」

咲良はジャンプを読みながら俺と雪乃に言う。

「ほら、はやくしなさいよ」

雪乃が目を閉じながら俺の手を掴む。

「あいよ。それじゃ咲良、頼むわ」

「うん、いつてらっしゃい」

咲良がそう言うのと、周りの空間が捻じ曲がるような感覚に襲われた。

——☆——

「うん、ついたみたいやね」

「よ、酔ったみたい・・・気持ち悪いわ」

「雪乃の酔いをなかった事にする」

今回は何故か酔わなかった俺が雪乃の酔いを^{オールフイクション}大嘘憑きでなかった事にした。

あとやっぱりこっちでも夜なのか、やたら暗い。

「あ、ありがとう」

「気にすんな」

「で、ここは何処なの？」

雪乃は周囲を見て俺に聞く。

ここは多分……俺が吸魂鬼^{ソウルイーター}をフルボッコにした森の中じゃないかな？

まあ、この近くには洞窟とかなさそうだけど。

「多分、元の世界に戻る前にいた場所の近くだと思う」

「こんな所に何しにきたのよ」

「まあ、いろいろあったんだよ」

ていうかレイラは何処だ。

探さんとダメだな。

「どこにいるんだろうね、この近くだったと思うけど……」

「え？何？」

あ、声に出てた？

「知り合いを探してるんだよ」

そう言って俺は視界ジャックをする。

んー、真っ暗な視界が二つあるね、あとは元の世界に戻る前にいた洞窟の前にも一つある。

それと、あの洞窟から少しはなれた場所にもあるね。

「知り合い？てか何してんのよ」

「視界ジャック。知らん？」

「アンタが前に学校で話してたじゃない」

そうだったっけ？

覚えてないわ。

とりあえず、あの洞窟の前に誰かいたっぽいし、そこまで行こうかな。

というか、それしかちゃんと場所の分かる視界がなかったっていうね……

「よし、こっちやね」

「何処行くのよ？」

「あっちに誰かいたんだよ」

もしかしたら吸魂鬼ソウルイーターかもしれんね。

ていうかもしそうだったら真っ暗な視界の一つがレイラって事になるよね。

そうだったらどうしょ。

その場合はまたあの吸魂鬼ソウルイーターを前と同じようにフルボッコにして、い

や前よりももっとフルボッコにしないとダメだね。

———☆———

「ねえ、まだ着かないの？」

俺がちよくちよく視界ジャックで位置を確認しながら進んでいると、雪乃が退屈そうに聞いてきた。

「もうちょいのはずなんだけどね」

さつきから結構長い事歩いてるけど、ぜんぜん見つからん。

視界ジャックは近くに行くほど映像が鮮明になって、音も聞こえやすくなる。

それを利用して移動してるんだけど、なかなかねえ……結構近くまで来てるような気はするんだ。

だって視界ジャックとかどんどん鮮明になってきてるしさあ。

「んー、結構近くのはずなんだけどなあ」

「誰もいないわね」

なんで誰もいないんだ。

そろそろ誰かいてもいいんじゃないの？

「雨、降ってきたわね」

「お、ホントだ」

まあ、そうだね。

俺は能力でビニール傘を二つ作り出し、一つを雪乃に渡す。

「ほい」

「・・・そんなことも出来るのね」

「俺の能力は物を作り出すこともできるからね」

「なんでもありじゃないアンタの能力」

そんな事を話しながらほぼ二人同時に傘を広げ、また歩き出す。

しかしヤバいなあ。

雨が降っていると視界も悪くなる。

周りが見えにくくなるね。

視界ジャックしても、ジャックされた相手の周りでも雨が降っていると当然見えにくい。

対象の相手が近くにいると鮮明にみえるって言っても雨とか降っていると関係ないからねえ。

「ねえ、アンタの知り合いってあの人？」

「え？どこ？」

俺にはよく見えないんだけど。

もしかして雪乃って視力めっちゃよかったりするのかな。

「てかどんなヤツ？特徴とかあったら教えて」

「そうね・・・フードを被ってるわ」

「ああ、ソイツだ。間違いない」

よかった、多分レイラだ。

もうフードって時点でレイラだろうね。

「それじゃ、はやくいくわよ」

「そうやね、行こう」

28話 面白そうだし（後書き）

こんにちは、二日ぶりにして四月最初のアヲネギです。
実は風邪を引いてしましまして、二日間寝てたんですよ。
それで更新できなかったんです。

というのは嘘です。

単純に更新するのを忘れてただけです。

でも、風邪を引いたっていうのは本当に嘘です。

もっと言えば、二日間寝てたって言うのだけは誰が何と言おうと本当に嘘です。

そんな感じで、今月もがんばります。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

29話 そして死ぬ意味もないから

「お、レイラだ。間違いないね」

「あの人で間違いないのね？」

雪乃が見つけた人は、やっぱりレイラだった。
洞窟の入り口で雨宿りをしていた。

「おい！レイラー！」

「あ！シキさん！」

レイラがぱたぱたとこっちに走ってくる。
雨降ってるんだから転ぶぞ。
ていうかまず服とか濡れるだろ。

「久しぶりやね、レイラ」

「急に消えてびっくりしたんですよ！？」

「すまんかったな。倒れてからいろいろあったんだよ」

とりあえず、倒れてから何があったのかを全部説明した。

あ、裏側の俺の事はあえて言わなかった。

まあレイラなら何も疑わずに信じそうだけどさ。

多分、レイラは詐欺とかにあいやすいタイプだね。

「いいなあ、私もシキさんのいた世界に言ってみたかったです」

「なんにもないわよ。こっちの世界の方が楽しいと思うわ」

「でも人間がいっぱいいるんですよね？」

「むしろ人間しかないわ」

「ユキノさんも人間なんですか？」

「そうよ、アタシも人間よ。」

「もしかしてユキノさんもシキさんと同じでこーこーせーなんです
か？」

「ええ、そうよ」

その雪乃の答えに何故かテンションが上がるレイラ。

「それじゃあシキさんみたいに凄い事ができるんですよね!？」

「アタシの能力は・・・そうだ! 四季、ちょっとアタシの相手し
なさい!」

「やだよ。雪乃の勝ちが見えてんじゃん」

相手の能力の使い方を忘れさせる能力とかもう、ね・・・

俺の天敵やんけ。

「いいじゃないですかシキさん! アタシも見たいです!」

「そうと決まれば場所を変えましょう！どこか開けた場所でやりたいわ」

「いや決まってるからね！？俺は反対っていったよね！？」

「それならいい場所してますよ！お城の地下に使われてない広い闘技場があるんです！」

いらん事言うなよレイラ！

「じゃ、さっそく行くわよ四季！」

「案内しますよ！こっちです！ほらシキさんも来るんですよ？」

「……あいよ」

もう拒否権とかないんだろうね。

仕方なくエリスのいる城の地下闘技場に向かうことにした。

はぁ……

——ゼロサイド——

【おっと、寝すぎたかな？】

【まあいいか、別に予定もないしね】

【そうだ！せっかくだから四季が戻ってこれた時のために嫌がらせの準備をしようかな】
プレゼント

【んー、何がいいかなあ】

【紅葉さんとレイラちゃんの死体とかでもいいんだけど、もう帰っちゃっただろうしね】

【追いかけるのもめんどうだしさ】

【うん、誰か呼んでみようかな】

【どうやって呼ぶかって？】

【そんなの俺の能力以外に何があるんだい？】
バッドエンド

【人間なら誰でも「敵は少ないほうがいい」って思うよね？】

【当然、四季もそう思ってる】

【つまり、そういうことさ】

【さあ、そうと決まればさっそく呼んでみようかな】

【普通の人を呼んでも面白くないよね】

【かといって、運動が出来るとか喧嘩が強いとか頭がいいとか】

【そんなの面白くない】

【四季の家族でも呼んでみようかな】

【^{アイツ}四季の家族ならきつと俺みたいにすばらしい能力を持ってるはずだよね】

【とはいえ、家族全員呼ぶのも悪いよね】

【みんな事情とかあるだろうし、迷惑なんて一人くらいにしか掛けられない】

【でも一人だけなんて面白くないよね】

【うーん、どうしようかな】

【ま、いいか。それは後々考えるとして】

【これから何をするか、だよね】

【といっても何もする事がないんだよね】

【目標もないし、特にしたいこともないし】

【目標も無ければ意味もない】

【生きている意味もないし、生きている間に達成したい目標もない】

【そして死ぬ意味もないから生き続ける】

【それが俺なんだ】

【無^{ゼロ}だからね】

29話　そして死ぬ意味もないから（後書き）

こんにちは、明太子おにぎりが好きなアヲネギです。
ゼロくん視点は全てセリフにしようと思います。
読みにくいですね、自分でもそう思います。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

30話　まずはそのふざけた幻想を

——四季サイド——

「それでは今から、ユキノとシキの対決を行う！」

「「「おおおおおおお！」」」

「ちょっと四季、なんで観客がこんなにいるのよ」

「知らん。現在進行形で俺もかなりビビってるよ」

地下闘技場に着き、さっそく雪乃と戦おうと言う事になった。

うん、そこまではいいんだよ。

問題はなんでこんなに観客がいるのかって事だよね。

なんでも俺とレイラが王都を離れてる間に俺が城で噂になってたらしい。

その噂がどんどん広まって気がついたら街中に広まってたんだってよ。

それでみんなが人間を一目みようとかあつまってこうなったわけ。

びっくりだね！死にたくなるわ！

あんまり目立ちたくなかったんだけどなあ・・・

ちなみに雪乃が城に入る時はレイラが「この人も人間です！」って言ったら普通に入れた。

多分言いふらしたのはレイラとかロルスだろうね。

「では・・・始めっ！」

ちなみに審判はエリスだ。

さて、始まっちゃったけどどうしようか。

雪乃に能力使われる前に勝たないとダメだな。

使われたら俺もう戦えないし。

しかし本気でやったら雪乃が死ぬかもしれないし・・・

「そんじゃ、ヒザマズケ 跪け」

「っ!？」

これも都城王土の異常、アブノーマル 人心支配の言葉の重み。

そして雪乃は跪く。

・・・友達に使う技じゃないよねコレ。

「すごいわね・・・ホントに体が動かないわ」

跪きながら俺に話しかける雪乃。

「でも、もうアンタは何もできないわ」

「能力使った？それじゃもう一回言葉の重みを使うぞ。平伏せヒレフセ」

「ほら、なんにも起きないわ」

そうみたいやね、というか発動してるつもりが発動しない。
というか発動できない。

なんていうか、人が呼吸の仕方を忘れたような感じ。
忘れるはずがないのに忘れたような・・・

「・・・・・・・・ヤバいなあ」

と言っても、雪乃の能力を解除する方法だってあるんだし、なんとかなるわな。

雪乃が俺の能力の檻なら、俺自身は俺の能力を雪乃の能力から解放する鍵ってところか。

・・・・・・・・ふむ

「そんじゃ、肉弾戦っすね！」

雪乃に向かって一直線に走り出す。

「いいわよ！きなさい！」

「ナメんなよ！俺は柔道だけは得意なんだ！」

「それじゃあアンタの得意っていう柔道で勝負してやろうじゃない！」

そう言うと思ったよ。

そして雪乃に掴みかかり・・・

「ま、嘘だけどね」

「ちよっ！？嘘なの！？」

「もちろん嘘だよ。俺が学校の授業で得意な事があるわけないやん」
テレポートで雪乃から離れ、一度両手を合わせ、地面に両手をつく。
すると雪乃のいる場所を中心に檻ができる。

「なっ・・・錬金術!？」

「そう、錬金術。便利だよねコレ」

「こんなの、アタシの能力で!」

「無理じゃない? 雪乃の能力は『相手の能力を忘れさせる』だけで
『相手の能力で作り出された物を消す』事はできないんだし」

だからあえて檻をつくったわけだしね。

「なかったことにそういうことができるのは・・・」

そう言いながら大嘘憑きで檻をオールフイクションなかったことにする。

「俺の能力とかじゃないとできないわけで」

「お、檻が消えた?」

「球磨川の大嘘憑きだよ」
オールフイクション

そして今度は左手に巨大な螺子を能力で作り出す。

「大嘘憑きに巨大な螺子ってどこの球磨川よ! でもそんなことして
もアタシの能力の前じゃ意味ないわよ!」
オールフイクション

「いいぜ、雪乃が能力の使い方を忘れさせるっていうなら……」

そう言っイマジンプレイカーて、俺は幻想殺しの能力を使う。

とある魔術の禁書目録インデックスの主人公、上条当麻の能力で、ありとあらゆる異能の力を打ち消す能力。

「まずはそのふざけた幻想を螺子伏せる！」

「アンタいろいろパクってんじゃないわよ！」

『それじゃあいくよ雪乃ちゃん！』

そう言っインデックスて俺はまた雪乃に向かって一直線に走り出す。

「喋り方まで……アンタって器用だったのね」

『やだなあ、声真似は僕の特技じゃないか！去年の文化祭でもこの特技を全校生徒の前で披露したのに忘れないでよ』

「アタシは去年の文化祭風邪で休んだのよ！」

『なーんて！嘘だよ！驚いた？』

「……ホントにアンタ声といい喋り方といい真似するの上手ね。球磨川の声は聞いた事ないけどアタシのイメージとぴったりよ」

「まあ、冗談はさておき。そろそろ勝たせてもらおうかな！」

そう言いいながら左手に持っていた巨大な螺子を雪乃の足めがけて

刺す。

「危ないわね！当たったらどうすんのっ……よ！」

その雪乃が避けて、そのまま俺にかかと落としと決める。

「うっ！」

そして俺は、地面に倒れる。
な、情けねえ……

「ちょっと本気でやっちゃったけど……生きてる？」

「ギリ生きてるよ……めっちゃ頭痛いんだけど」

「とりあえず、降参してくれない？」

「おk、任せとけ」

ていうか幻想殺し意味ねえ……
イマジンプレイカー

雪乃の能力を無効化できるか試したかったのに！

まあ、発動された後じゃ多分幻想殺しも無意味なんだけどね。
イマジンプレイカー

30話　まずはそのふざけた幻想を（後書き）

こんにちは、アヲネギです。

四季くんは声真似が特技らしいですね。

この事は結構前から考えてたんですけど、いつ出すべきか迷ってしまったw

ていうか今回はめだかボックス知らない人はかなりワケがわからなかったと思います。

ごめんなさい反省はしてるつもりです。

とりあえず今回出てきた能力の説明を・・・

幻想殺し・・・とある魔術の禁書目録の主人公、上条当麻の力。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

31話 俺の能力は

「いやあ、負けたわ」

とりあえず仰向けになり、雪乃との戦いが終わった時の第一声がコレです。

まさかかかと落としがくるとは思わなかったね。

失神するくらい痛かった。

失神してないけどさ。

「ホントにアンタ大丈夫？はやく大嘘憑き使って治しなさいよ。意識あるのが怖いくらい血が出てるわよ」

「いやさすがに血が出てても大嘘憑きはね………」

オールフイクション すべて なかったこと マイナス
大嘘憑きは現実を虚構にする過負荷。

言ってしまうえば何もかも台無しにする能力だね。

雪乃が勝った事を台無しにするみたいで使いたくないわ。
なかったこと

あ、ちなみに観客はもう帰ったよ。

勝負がついてすぐにみんな地下闘技場から出てった。

ていうかやたら痛いと思ったら血が出てたんだね。

なんですかと落としくらった直後はなんともなかったんだろう。

……誰も気づかなかっただけ？

「んー、どんな能力を使おうかな」

「アタシが言うのもなんかアレだけど・・・見てるこっちが心配になるから、はやく回復してくれない？」

「そうやね・・・ベホマ」

よし、これで全快だ。

・・・うん、頭に血は付いてるけど傷は治ったみたいだ。

MPとかどのくらい減ったのかわからんけどね。

というか俺にMPとかあるのかもわからないけど。

「シキ！生きてるか！？」

おお、エリスやん。

久しぶりに会った気がするわ。

「もちろん生きてるよ」

エリスに軽く手を振りながらそう答える。

「お前もう何でもアリだな・・・いや前からそんな気はしていたが」

そんな呆れたように言うなよな。

「ていうかレイラは？さっきまでいなかったっけ？」

周りを見て、レイラがいないことに気づく。

さっきの状態だと人が多すぎてもわからんし。

「いますよー」

遠くの方の観客席からレイラの声がした。
姿までは見えないけど。

いたならいいんだけどね。

見かけないから帰ったのかと思ったんだ。

「それじゃ、やることも無くなったし宿に戻って寝ようかな」

ていうか今何時だ？

確か元の世界で雪乃と会ったのが確か11時過ぎだったけ？

それだともう日付は変わってるかな。

てか夜中なのによく城の地下の闘技場に人をあんなに呼べたな。

まあいいか。

「ん？ユキノは何処で寝るつもりなんだ？」

それは俺も気になってたよ。

ナイスだエリス。

「四季はどこで寝てるのよ？」

「近くの宿やね」

「じゃあアタシもその宿に泊まるわ」

「金はどうすんの？」

「もちろんアンタが出すのよ？」

「なんとなく予想はしてたけどさぁ・・・」

「いいわよね？」

「よくないね。そもそもそんなに金ないし」

「いえ、シキさんはお金いっぱいもってるんで大丈夫ですよ」

レイラいつこつちまで来たんだよ！

さっきまでやたら向こうの方におったやん！

「じゃ、決まりね」

「・・・あいよ」

——ゼロサイド——

【それじゃ、さっそく誰か呼んでみようかな】

【いや、普通に呼ぶんだとつまらないよね】

【そうだなぁ・・・】

【うん、死んだ人を生き返らせたりしてみよう!】

【そんなことが可能なのかって?】

【できるとも!】

【俺の能力は『不幸な結末』バッドエンド】

【疲れるからあんまり人を呼んだりはしたくないんだけどね】

【というかやったことすらないんだ】

【うん、今から初めてやってみるってことだよ】

【どんな人がいいかなあ・・・】

【死刑にされた連続殺人犯もいい】

【大昔に死んだ英雄とかもいいね】

【普通の社会人でもいいかもね】

【うん、社会人がいいね】

【どれだけ頑張っても昇進できず】

【上司からは馬鹿にされ続けて】

【同僚が昇進して、ついには後輩にも抜かれてしまう】

【そしてそれを妬むことができるような】

【そんな普通で立派な社会人を呼ぼう】

【その社会人は『こんな世界は嫌だ』って思ってるはずだよね】

【でもその社会人が『どこか遠くに行きたい』って思ってるなら俺の能力を使っても効果がないんだよね】

【それだと俺の能力を使っちゃえば彼はここには来られない】

【でもさ、その社会人本人の家族……親とかは】

【普通なら音信不通とかになると困るよね】

【だからその呼ぶ予定の見知らぬ社会人の親の不幸な考えを現実にしてあげようじゃないか】

【まあ、その場合はここに来る人がそんな社会人かどうか、ましてや社会人かどうか分からないんだよねー】

【どうしようかなあ】

【そうだ！】

【単純にさ、『何も出来なくて、誰も頼る人がいない。でもこんな世界が大好き』っていうような人間を呼べばいいんだよね！】

【うん、我ながら名案だ】

【よく考えたら社会人に固執する必要もないんだしね】

【そんな見知らぬ誰かをさっバッドエンドそく能力で呼んでみよう】

31話 俺の能力は（後書き）

更新おくれました！ごめんなさい！

こんにちは、いつの間にか新学期が始まっていたアヲネギです。

何でゼロくんが現実世界の事を知ってるのかは、バッドエンドで人を飛ばしたり呼んだりする場合は、飛ばした先、元いた場所が能力の副作用みたいなので知ってしまうからです。

つまり、一回四季くんを現実世界に飛ばしたゼロくんは異世界以外にももう一つの世界がある事を知っています。

それでは今回出て来た能力の説明を・・・

ベホマ…DQシリーズに出てくる魔法。

誤字脱字があれば教えてください。

32話 一番いいのを頼む

——四季サイド——

「はぁ・・・そろそろ嫌になるね。寝たらここにくるなんて不眠症になりそうだ」

宿に戻り、寝たらまたあの精神世界に来ていた。

「で、どこにいったよお前は？」

あの、自分と同じ外見で同じ声のアイツを探す。

・・・が。

「君の後ろにいるよ」

かえってきた声は、俺と同じ声じゃなく咲良だった。

「咲良か、どうしたん？」

「ちょっと気になることがあってさ、その確認だよ」

気になること？

何だろう、やけに咲良が真剣な顔してるけど。

「私が君を異世界に連れて行く前に『君が二人いる』って言ったの覚えてる？」

ああ、言ってたねそういえば。

「うん、覚えてるよ」

たぶん俺と同じ外見のアイツの事だろう。

「もう一人の君は、今どこにいるの？」

「わからんね。いつも寝るたびに会ってたんだけど、今日は会ってないなあ」

アイツどこ行っただろうな。

まあ会わなくてよかったんだけどさ。

「精神世界から出て、外の世界にいる可能性は？」

「・・・・・・え？」

「君が二人いるって行ったのは、元いた世界とは別に君がいたからだよ」

「それは俺の精神世界じゃなく？」

「うん、君がさっきまでいた世界にも君がいた」

・・・・・・マジかよ

てか何で外の世界に行けたんだ？

俺はてっきりアイツが外の世界には行けないと思ってただけ・・・・

・

「なるほど、俺がアイツは外の世界に出る事が出来ないと思ってしまったから……」

実際、アイツは外の世界に自力で出る事ができなかったんだろう。それが、俺は「アイツは外の世界に出る事ができない」と思ってしまった。

しかしそう考えてしまった俺の考えにアイツは能力バッドエンドを使って外の世界に出てしまった。

外の世界に出る事は出来ないと思ってしまったから、アイツは外の世界に出てしまった。

「……どうということ？」

俺は咲良にアイツの能力の説明をした。

自分のとった行動が常に最悪の状況を引き起こすと言う事。

他人の考えてしまった最悪の状況を作り出す事が出来るということ
を。

「でもおかしいよ、『不幸な結末』バッドエンドなんて能力は聞いた事がない」

「いや実際にそうだったんだ。アイツもそう説明したし」

神である咲良も知らない能力なんだなアレは。

「もしかしたら、能力じゃないのかも知れない」

「ん？ どういうこと？」

「能力とよく似た別の何かって事だよ。魔法でもない別の何か」
そんなのあるのか。

「何なんだろう・・・能力に限りなく近い別の何か・・・」

咲良があごに手を当てて考える。

神でもわからないことってあるんだな。

「私にもわからないことくらいあるよ」

・・・そういえば咲良は心を読んだりできるね。

「てかさ」

「なに？」

「咲良も何か能力もってんの？」

「私は・・・能力なのかわからないけどそれっぽいのなら」

「おお、どんなの」

ちよっと前から気になってたんだよね。

神も能力とか持っていたりするのかなーって。

「君のが『偽神』^{レプリカ}なら私のは『全能ノ神』^{オリジナル}って呼ぼうかな」

なるほど、俺の能力の元となった能力が咲良の能力って感じかな？

「どんな能力なん？」

「ありとあらゆる物を作り出す事ができる能力だよ。能力そのものを作り出したりもできる。もちろんその能力を人にあげたりもできるんだよ」

ああ、それで俺の『レフリカ偽神』を作ったって事か。

「私の能力の劣化版が君の能力って感じかな。能力の中では最強の部類だと思うよ？」

マジかよ。

「何でそんな能力を俺にくれたん？」

たしか初対面の時に能力もらったんだっけ？

異世界で俺が能力を使って人を殺しまくるとか考えなかったんかな？

「考えたよ、そういう事も」

「なら何でなん？」

「いや君が言ったじゃん」

「なんて言ったっけ？」

「一番いいのを頼むって」

……どっかで聞いたセリフやん。
そんな事言ったっけか？

「言ったよ。間違いなく言った」

マジかよ。

「だから私……神に一番近い能力を君にあげたんだよ」

そりゃ嬉しいね。

レブリカ
この能力は便利だし、使い勝手もいい。

「ありがとうな」

「どういたしまして」

「じゃ、そろそろ起きたいからこっから出して」

「うん、目を閉じて」

「あいよ」

そう言って俺は目を閉じる。

そういえば精神世界から戻る時は酔ったりしないんだよね。
何でだろう？別にどうでもいいんだけどね。

『はい、もういいよ』

お、ありがとな毎回。

『どういたしまして』

そんじゃ、朝ご飯でも食べに行こうかな。

32話 一番いいのを頼む（後書き）

こんにちは、最近は更新速度が遅くなったアヲネギです。
更新しようとは思ってるんですけど、なかなか上手くいきません。

ていうか今回は四季くんの精神世界での話だけでしたね。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

33話 やりすぎよ

「てかさ」

「なんですか？」

「吸魂鬼ソウルイーターの依頼の報酬はどうなったの？」

朝ご飯を食べ終えて城に行く途中、レイラに気になっていた事を聞いてみた。

「ちゃんと私が全額貰いましたよ」

全額って言うてるあたり俺の取り分がなさそうなんだけど……

「もちろんシキさんの分も私が貰いました！」

いやわかってたけどさ。

実際にそう言われると何かなあ……

自分のそういう予想が当たってるっていう事実を知りたくなかったっていうか……

「次ギルドの依頼をこなす時はユキノさんも一緒にしましょうね！」

「なんかモンハンみたいね……」

俺もそう思うよ。

こんがり肉の納品クエストはなかったけどね。

あと素材ツアーとかもなかったよ。

ていうかなんか周りの視線がすごい。
なんでこんなに見られてるんだ。

あ、昨日の雪乃との戦いか。

「ねえ・・・なんかすごく見られてる気がするんだけど」

「見られてる気がするんじゃないかって実際に見られてるな」

恥ずかしいわホント。

おいそこ「あ、蹴り一発で負けたヤツだ」とか言うな！
正確には「かかと落とし一発で負けたヤツ」だよ！間違えんな！

「私達、なんか目立つんでしょうか？」

「レイラじゃなく俺と雪乃だろうな」

「あ、昨日の戦いですね！」

そうなんだよね。

あの時勝ってたら変な事言われずに済んだのに！

まあ、その場合は雪乃が言われることになるんだけどね。
それはそれで嫌だな・・・

「おい、黒髪の兄ちゃん」

「あ？なんだよ？」

突然後ろから声を掛けられる。

まあ、外見はヤンキーのような人だった。

5人くらいかな？

そのうちの一人の青い髪のヤツが俺に話しかけてきたみたいだ。

「ちょっと俺と勝負してくれよ」

・・・コイツ、多分昨日の俺と雪乃の戦い見てたんだろうな。

あっさり負けた俺になら勝てると思ってんだらうね。

・・・いいね、こういう人。

「いいね、やろうか」

「ちょ、ちょっと四季！やめなさいよ！」

雪乃が止めようとしてるけど関係ないね。

「随分余裕だな兄ちゃん。昨日はあんなにあっさり負けてたのによ」

「わざと負けたとか考えないわけ？あ、雪乃とレイラ、ちょっと離れてて」

「あ、はい！」

「ちょ、ちょっと四季！殺人は犯罪なのよ！」

別に殺すなんて言ってないやん。

「四季って言ってたな。一人で俺ら5人を倒すつもり四季くん？」

「余裕だね。軽く遊んでやるからかかってこいよ」

俺はズボンのポケットに手をつ突っ込みながら言う。

「さすがに5対1じゃすぐに決着ついちまうからまずは俺だけでやるわ」

腹立つコイツが他の四人にいうと、他の四人は後ろに下がった。

ていうかギャラリーがやたら多いんだけど。

「1対1で堂々とやり合おうか四季くん」

そういうと、腰に下げていた剣を抜く。

「ほらほら！いまからお前に切りかかるぞ！」

「やかましい、平伏せ^{ヒレフセ}」

「っ!？」

「地面がへこむほど平伏すとかもうお前ダメだね」

あつさり言葉の重みに負けちゃってまあ・・・

「お、おい！大丈夫か!？」

他の4人が近寄ってくる。

.....が。

「ウゴクナ動くな」

まあ、言葉の重みって「平伏せ」とか「ヒザマズケ跪け」とかが出来れば「ウ動クナくな」もできておかしくないよね。

「か、体が!？」

「コイツが自分から1対1でやるって言ったじゃん? なにさっそく邪魔しようとしちゃってんの?」

いやあ.....

いいね! こういうの!

「さて、いつまで経っても切りかかってこないみたいだしこっちら仕掛けようかな」

そう言ってなんの能力も使わずに現在進行形で平伏してるヤツの腹を蹴る。

「ほら、もう自由に動けんだろ? さっさと切りかかってこいよ」

「調子に乗ってんじゃないやねえよ!」

青髪が立ち上がり、俺を切る。

でも俺は傷つかず、剣は折れて、切りかかってきた青髪が吹っ飛

ぶ。

「なアンなんですかアお前はア？」

声真似とかもしてみたりね。

つかった能力は一方通行。
アクセラレータ

とある魔術の禁書目録に出てくるありとあらゆるものの方向を操作
ベクトル
する学園都市一位の能力。

まあ、俺は頭が悪いから反射くらいにしか使えないけどさ。

「ど、どうなってんだ……」

「ナメてンじゃねエぞ！この三下がア！」

そして、片足を少し上げ、地面を踏みつける。

おお、マジで地面にヒビが。

「と、まあ冗談はこのくらいにしておいて」

俺は吹っ飛んだ青髪に近づく。

「さっさと降参して俺の視界から消えてくんないかな？」

笑顔で、そう言った。

「す、すいませんでしたあ！」

すると相手はすごい勢いでどっかに走っていった。
それに続いて他の4人も後を追うように行ってしまった。

「アンタ……一方通行はやりすぎよ」
アクセラレータ

雪乃が俺に言う。

「さっきの、あくせられーたって言うんですか？」

そういえばレイラの前で使った事なかったっけ？

「ありとあらゆる物の方向を操る能力だよ」
ベクトル

はつきり言ってチートだね。

まあ俺は頭が悪いから反射くらいにしか使えないけどさ。

雪乃がこの能力を使えたら多分俺は今頃生きてないだろうね。
アクセラレータ

「じゃ、早く城に行こうや」

「あ、まってください！」

「ちよっ！置いていかないでよ！」

ちなみに、ひび割れた地面はちゃんと大嘘憑きでなかった事にして
オールマイクシヨン
おいた。

33話 やりすぎよ（後書き）

こんにちは、久しぶりのアヲネギです。

実は2週間ほど前からついさっきまで友達が家に泊まりにきてたんです。

そんな感じで更新できませんでした、すんません。

誤字脱字、わかりにくい所があったら教えてください。

34話 殺せても

「とまあ、ここに来る途中そんなことがあったんだよ」

「シキも大変なんだな」

城の書庫について、エリスにさっきあった事を話す。

ちなみに雪乃はレイラにこっちの世界の文字を教えてもらってる。
俺は邪魔したら悪いなーと思って書庫の隅の方で寝ようとしてたら
エリスがやってきたって感じ。。

「まさかとは思うが」

「ん？」

「誰も殺したりしてないよな？」

・・・俺ってそんな危なそうに見えるのかな。

「してないしてない。そんな勇氣、俺にはないわ」

まあ、一歩間違えたら殺してしまうような能力は使ったけどさ。
ていうか死んでもなかったことにできるんだけどね。

・・・なんか命が軽く思えてきた。

「そういえば私も昨日の戦いを見てて思ったんだが・・・」

もうね・・・私「も」って言ってる時点で次にどんな言葉がくるのか予想できるわ。

「シキって、私が思ってるほど強くないんじゃないか？」

ほらね。

なんかそんな事言われると思ってたよ。

「どうだ？ どうせ暇なら今から私と戦わないか？」

「エリスって戦えんの？」

「もちろんだ！ 闇魔法ならまかせておけ！」

闇っすか。

なんか炎ってイメージがあっただけだね。

ほら、エリスって髪とか目とか赤いしさ。（5話参照）

「シキ、どうするんだ？」

「せっかくで悪いんだけどまた別の機会にしようや。ここに来る途中にも戦ってるから疲れてるんだよね」

「そういえばそうだったな」

まあ俺はほとんど動いてないから疲れてもないんだけどね。

ていうか腕の一本くらい折っててもよかったんじゃないかと今頃になって思えてきた。

別に恨みとかはないんだけどね。

「ていうか闇魔法ってどんなの？」

そもそも魔法自体どんなのかあんまりよくわからんんだけどね。

「そうだな・・・自分の影に質量を持たせて操るのが一番簡単な闇魔法だ」

いいね、そういう漫画みたいな魔法。

「上達すれば闇そのものを作り出したりもできるがあれは疲れるからなあ・・・」

闇かゝ

ん？

もしかして・・・

「エリス、ちょっと俺の左手になんか適当に闇魔法で攻撃して欲しい」

「なぜだ？」

「ちょっと気になることがあるんだよ。それじゃ頼んだ」

俺は左手を前に出し、アクセラレータ一方通行で反射ができるようにしておく。
いや別にエリスを殺そうっていうんじゃないよ？

「左手だな？やるぞ」

エリスの影から棘のようなものが俺の左手に向かって伸びてくる。

「あ、がつつり刺さったわ」

「お、おい大丈夫か？」

やばいめっちゃ血が出てる……

まあ怪我なんてどうにでもなるからいいんだけどね。

「大丈夫大丈夫、手伝ってくれてありがとな」

なるほど、闇は反射できないんやね。

この世に存在する物質じゃないって事かな？

もし光魔法とかも存在するならソレも多分反射できないんだろうね。

炎魔法とかそういうのは熱量とかだから反射できるんだろうけどさ。

「シキ！血が！血が凄いぞ！」

『何を言ってるのかなエリスちゃん、血なんて全く出ていないじゃないか』

大嘘憑き（オールフィクション）で傷をなかったことにしながらエリスに言う。

「回復魔法……じゃないな。周りの血液までなくなってるなんて」

『すべて
なかったこと現実を虚構にする、それが僕の大嘘憑き（オールフィクション）』

だ』

言えたあああああ！

いやあ一回言ってみたかったんだよねこのセリフ！

「なんだその・・・嘘か本当かわからないような喋り方は」

「まあいいじゃない」

「ていうか、おーるふいくしょん？そんなの反則だぞ。勝てるわけがない」

自分でもそう思うよホント。

でも勝つために過負荷マイナスを使うのはなんか違う気がするんだよね、使った事あるような気がするけどさ。

「で、私に攻撃させてシキは何がしたかったんだ？」

「一方通行アクセラレータの方向操作で闇魔法が反射できるのかどうか」

「つまり私の魔法を反射できるのかどうか試したかったんだな」

「そういうことやね」

「そういうのはどんな結果がでて今後役に立つからな」

「まあ反射できてたらエリスが死んでたかもしれないんだけどね」

「大丈夫だろう。もともと私の影を操っていたんだ、私に害はない」

つまり自分の影で自分を攻撃することはできないって事かな？

「だから、私はシキより強い！」

腰に手を当てて胸を張るエリス。

「完全到大嘘憑き（オールフィクション）が使える事忘れてない？」

「ふん！」「なかったこと」にするだけだろう？いくらでもやりようはある！」

「まあ、確かに大嘘憑き（オールフィクション）も無敵じゃないからね。エリスは俺を殺せても殺せないよ」

「どういうことだ？」

「大嘘憑き（オールフィクション）は俺が死んだら自動で発動するんだよね」

まあ、俺の場合は死ぬ前に大嘘憑き（オールフィクション）を使えるように準備しておく必要があるんだけどね。

「どこまで規格外なんだシキは・・・」

「俺自身も気になるよホント」

今の時点で俺が負ける可能性があるので雪乃と俺のそっくりさんだけなんじゃないか？

紅葉はどんな能力なのかわからんし。

「国一つくらい敵にまわしてもシキなら一人で勝てるんじゃないか？」

「やってみないとわからんね。めんどくさいからしたくないけどさ」

ていうか多分勝てる。

国どころか世界を敵にまわしても勝てそうだ。

指名手配とかになってもなかったことにしたらいいんだしね。

いやそんなことは絶対にしないよ？

国も世界も敵にまわさない。

そんなの絶対に疲れるし、めんどくさそうだ。

「シキ」

「ん？」

「おーるふいくしよんを使わないで私と戦ってくれないか？」

エリスはそんなに俺に勝ちたいのか。

「大嘘憑き（オールフィクション）アクセラレータだけを使わなかったらいいん？
一方通行はどうなん？」

「あくせられーたは別にいいぞ！反射など私の闇魔法には効果がないんだからな！」

まあ、そうだね。

俺がもっと頭がよかったらもっとかっこよく戦えたのになあ……

「よしエリス、戦おう」

「そうと決まればさっそくいつもの場所にいくぞ！」

疲れてたんじゃないのかって？

そんなの「なかったこと」にしたよ。

34話 殺せても（後書き）

こんにちは、アヲネギです。

最初は暇つぶしで書き始めた「チートな高校生が異世界でがんばるようです」ですが、もう30話を超えました。

それに思ったよりも見てくれてる人が多くて嬉しいです！

次回はまた戦闘です。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

35話 痛みを

あれからすぐに移動して、城の地下に何故かある闘技場でエリスと戦う事になった。

「さあシキ！いくぞ！」

エリスの影から無数の棘が俺に向かって伸びてくる。
オールファイクション
たしか大嘘憑きだけを使わなかったらいいんやね？

どうしようかな・・・
オールファイクション
最近大嘘憑きに頼ってばっかだったからなあ・・・

うん、とりあえず刺さつとくか。
刺さってから考えよう、そうしよう。

「うわー、いたーい。死にそうだー」

「なんでそんな棒読みなんだ？」

「いやだって、ほら」

イマジンプレイカー
幻想殺しを使い、刺さった棘すべてに右手で触れていく。

「反射できなくても対処はできるんだよね」

「・・・おーるふいくしゅんは使わない約束だったじゃないか」

「いやいや、これは別の能力や」

ていうか出血がやばい。

このままだとマジで危ないわ。

「ベホマ！」

うん、とりあえず回復やね。

「またおーるふいくしよんを使ったな？」

「つかってないよ、まったく別の魔法やね」

今度は俺が反撃しようかな。

錬金術で地面から無数の棘をつくり、エリスに向かって伸ばす。

「なんだ？私の真似か？」

「そんなところかな」

ていうか完全にエリスのしてきた攻撃を意識したんだけどね。

エリスは影で自分を覆って俺の攻撃を全て防いだ。

「闇魔法って棘以外にもいろんな形に変えられるのか」

「言ったはずだぞ？影に質量を持たせて操るのは一番簡単な闇魔法だよ」

ああ、言ってたね。

攻撃にしか使えないんだと勝手に思ってたよ。

「じゃあこんなのはどう防ぐ？」

闇魔刀ヤマトを作り出し、次元斬を一度放つ。

前方にいれば範囲は関係なく当たる居合い切りだ、完全に防ぐのはかなり難しいはず。

あ、デビルメイクライ3の方だよ。

4の方は使い勝手が悪いからね。

見た目はカッコいいけどさ。

「そんなもの・・・自分自身を影で完全に覆ってしまえば怖くない！」

そう言ってエリスは自分を中心に影を球状にして次元斬を防ぐ。

・・・AIDAみたいだ。

「なるほど、確かにそうすれば無傷で防げるね」

「どうだ？私はシキより強いぞ！」

うーん、エリスに勝てるかも知れない方法は思いついたけど・・・これやっちゃったらエリスがどうなるかわからないしなあ。

「まいった、俺の負けだよ」

「なんか・・・随分あっさりだな」

ていうかぶっちゃけなんかめんどくさくなってきたしさ。

もう俺の負けでいいかなーって思ってたんだ。

「まあいいじゃない、エリスが俺より強いってわかったんだし」

「いや、うん・・・まあ、そうだが・・・」

「どしたん？ なにか不満な事でもあんの？」

「・・・勝った気がしない」

「いやいや、エリスの圧勝だったやん」

「違う！ 私はもっとう・・・」

「盛り上がりには欠けると？」

「そうだ！ そう言いたかったんだ！」

そう言われてもねえ・・・

「エリスが勝ったんだからもういいんじゃない？ 実際に俺は一回致命傷を負ってるわけだしさ」

「む、それは・・・そうだが・・・」

かなり痛かったね、あの影でできた棘は。

「十分だとおもうね俺は」

「でも、助かったじゃないか」

「一回くらい死んでみるのもよかったんだけど、それだと約束破ることになるからね」

ていうかエリス、その言い方だと死んでほしかったように聞こえるぞ。

「お前・・・本当におーるふいくしよんを使っていなかったのか？」

「もちろん使っていないよ、さすがにそのくらいの約束は守る」

まあ使っても使ってなくても降参してたと思うけどさ。
過負荷は過負荷らしい使い方をすべきだと思うね。

・・・勝つために使った俺が言える事じゃないんだけどさ。

「そういうわけで、はやくレイラ達のところに戻ろうや」

「・・・まあいいか、そうだな。戻ろう」

——ゼロサイド——

【はぁ・・・はぁ・・・】

【うん、どうやら成功みたいだね。思ったより疲れちゃったよ・・・】

「ここはどこですか？」

【君がいた世界とは別の世界だよ】

「戻りたいのですが、どうすればいいか教えていただけませんか？」

【なにを言ってるんだい？】

【君が散々な目に遭ってきたあんな世界】

【どうでもいいじゃないか】

「そんなことはありません、私はあの世界が大好きでした」

【失敗だらけなのに？】

【そんな君に誰も手を差し伸べなかったのに？】

「・・・」

【みーんな見てみぬふりだよ】

【ホント、酷いよね】

【そんな世界に、君は戻りたいのかい？】

「・・・」

【残念ながら君は俺といっても幸せにはなれないけど】

【俺といれば君の不幸を】

【君の痛みを】

【世界中の人にわかってもらえるよ】

「・・・あなたは誰ですか？」

【俺はゼロっていうんだ、よろしくね】

「ペンネームですか？」

【本名だよ】

「何故、私が失敗ばかりだという事を知っているんですか？」

【君がたった今教えてくれたじゃないか】

「・・・こんな事を言うのは失礼ですが、あなたからものすごい不快感を感じます。これはなんですか？」

【さあ？なんなんだろうね】

【俺にもわからないよ】

【そうだ、君の名前は何でいうの？】

「・・・私の名前はアサモトリン麻基鈴と言います」

【リンちゃんか！】

【よろしくね！】

「はい、よろしく願いします」

【ところでリンちゃん、君の能力はなにかな？】

【よかったら教えて欲しいんだけど、わかるかな？】

「ええ、私には前まで持っていなかった不思議な力が今はあるようです」

【能力名だけでも教えて欲しいんだけど、どうかな？】

「いいですよ」

「私の持つ能力の名前は『デメリット・ルール悪性規則』と言うようです」

35話 痛みを（後書き）

こんにちは！

今回はちょっと早めのアフネギです！

新キャラ出してみました。

既に空気になりつつあるキャラも数人いるというのになにやってんだって話ですね。

しかも新キャラの能力とかもまだ名前しか決まっていってという感じなんですよ。

まあ、なんとかありますよね W

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

36話 はじまりの魔法

【どんな能力かわからないなあ】

「私は理解していますが、使った事がないのでなんとも言えません」

【じゃあさ、試しに行こうよ】

「何処へですか？」

【近くにね、物を盗んだり人を襲ったりするような人たちが暮らしてる場所があるんだ】

【そんな悪い人達は放っておけないよね】

「そうですね、そんな事をしてはいけません」

【だから】

【その人達を相手に君の能力を試せばいいんだよ】

「しかしそれでは私も悪い人達と同じ事をしていくことになるんです」

【大丈夫、リンちゃんは善良な一般人を傷つけるんじゃない】

【悪い事してる人を懲らしめるんだ】

【正義の味方みたいでカッコいいじゃないか】

「正義の味方ですか？」

【そう！だからリンちゃんは遠慮せずに悪い人達をやっつければいいんだよ】

「……そうですね、確かに悪い人は誰かが懲らしめなくてはいいけません」

【それじゃ、行こうか】

——四季サイド——

「え？シキさんに勝ったんですか？」

「うむ、シキが降参したからな」

書庫に戻ると、もう雪乃はこの世界の文字を覚えたらしく、本を片付けながらレイラと話していた。

ていうか覚えるのはやいなあ、俺なんてもっと掛かったのに。

まあ雪乃は頭いいからね、当然といえば当然か。

「シキさんでも負けることってあるんですね」

「そりゃまあ、俺も人間だからね。負けるときもあるよ」

「俺「も」って……私は人間じゃないぞ」

あ、そうだったか。

ならこういう場合は「俺も生き物だからね」ってなるのかな？
いやそれもおかしいよなあ……

まあいいや、考えるのめんどくさい。

「あとはレイラだけね」

「何がですか？」

「シキと戦ってないのはレイラだけよ」

あ、ホンマやね。

よく気がついたな雪乃。

俺はそんなの気にすらしてなかったよ。

ていうか敵対してる人じゃないと戦いづらいんだよなあ。

やりすぎて死んだら困るしね。

敵なら死んでもいいってワケじゃないけどさ。

なんていうか、気持ちの問題みたいなの？

「私もシキさんと戦ったほうがいいですか？」

「いや、別にいいよ。今日はもう疲れたしさ」

別に今日じゃなくとも戦いたくないよ、友達とか味方とは。

「正直なところ、シキさんには勝てる気がしないので戦いたくないです」

「シキはな、以外と弱いんだぞ」

「そうね、レイラが思ってるほど強くないわよ」

「おいやめろ」

弱くなんかない！

その気になれば名前を書くだけで人を心臓麻痺にさせるノートだつて作れるんだから俺は！

人の名前と寿命が見えるようになる目だって能力でつかえるし、その代償の寿命が半減するっていうのもなかったことにすれば俺めっちゃ強いやん！

ま、字を書くのは苦手だからしないだろうけどね。

それに人の名前が見えるっていうのも入^{オン}と切^{オフ}の切り替えができないみたいだし、ずっと文字見えてるなんて発狂してしまいそうやしね。

「シキさんは強いです！」

ありがとうレイラ。

そう言ってくれると嬉しいわー

「だって、もう一人のシキさんも強いんですから！」

……え？

なんでレイラがその事知ってんの？
もしかしてアイツに会ったのか？

確かに会う可能性とかはあったかもしれない、咲良もアイツがこちらの世界にいるって言ってたし。

「レイラ、もしかしてアイツに会ったん？」

「ゼロさんのことですよ？会いましたよ」

ゼロって名乗ってんのかアイツ。

「ちよっとその時の話詳しく聞かせてや」

「いいですよ、あれはシキさんが倒れてたはずなのに消えてからの事なんですけど……」

——☆——

「……なるほど」

レイラの話をもとめると

レイラは俺が倒れた後、吸魂鬼ソウルイーターの男とほぼ同時に意識を取り戻し紅葉と会った。

そしてその後に俺の裏側……ゼロって言ってたな、ゼロと会い、その時にゼロの能力バッドエンドの効果も教えてもらったらしい。

その後ゼロは吸魂鬼ソウルイーターをたった数回殴っただけで完全に殺し、吸魂鬼ソウルイーターの死体を持ってあの洞窟の中に入って行った。

……まとめ下手だな俺。

「でも不幸な結末なんて……そんなの反則じゃない。アタシの能力も通用するか怪しいわ」

確かにね、雪乃の言う通りだよ。

俺の能力も通じなかったし、なにより自分が「これで勝てる」、「この攻撃なら通用する」とか思ってしまったえば勝てなくなるし、攻撃も通用しなくなるわけだし。

相手の不幸な考えを現実にする能力で、自分の起こす行動も最悪の結果を引き起こす能力。

アブノーマル マイナス
異常か過負荷で言えば過負荷だろうね。

……こんなのアリかよ。

「でもその能力だと、何も考えなかったら勝てるんじゃないか？」

「そうは言うけどさエリス、誰でも攻撃する時は「当たれ」とか思うじゃん？」

「なら逆に「外れろ」と思って攻撃すればどうなんだ？」

「相手の考えてる事と反対の状況を引き起こす能力」ではないからね。多分意味ないんじゃないかな？」

「むう、そうだな」

ホント、反則とおりこして別次元だよ。

「あの、あるすまぐなならどうなんですか？」

「黄金練成《アルスⅡマグナ》じゃ絶対に勝てないよ。アレは想像した通りに現実を歪めてしまう能力やからね」

バッドエンド
不幸な結末は黄金練成《アルスⅡマグナ》の天敵だね。

オールフイクション
「きっと大嘘憑きも効果ないのよね……」

オールフイクション
「そうやね、大嘘憑きも「効果がある」と思って発動してる以上効果がないと思う」

オールフイクション
大嘘憑きに関わらず、全ての能力があバッドエンドの能力の前じゃ無力だろうね。雪乃の能力も「効果がある」って思って発動しちゃえば意味ないし。逆に意識して「効果がない」と思って発動してもそれは「効果があればいいな」と少しでも思ってるって事だからなあ……

バッドエンド
まあそこまで不幸な結末の効果があるのかわからんけどさ。

ていうかゼロは今、あの洞窟の中にいるんだったら今の内に倒しとくべきか？

今夜辺りにでも挨拶しにいかうかな。

あー、でもレイラとか雪乃に見つかったらなんか言われそうだな。

ついてこられても困るしなあ……

うん、そう言うときのための能力だ！レプリカ

姿を消す道具だって作りだせるし、そういう能力もある。

ていうか会ってどうすればいいんだ？

戦っても勝てるかわからんし、話し合いなんて無理に決まってる。

「四季、どうしたのよ？」

「ちょっと今後どうするべきか考えてた」

「明日もギルドの依頼とかすればいいじゃないですか」

まあ、そうなるよね。

やっぱゼロに会いに行くのはやめようか。

めんどくさいしね

「次は、そうですね……この街の近くにいる盗賊とかを捕まえる依頼にしましょう」

それもそれでめんどくさそうだなあ

ていうかそれだと紅葉に会う事になるんじゃないか？

「いいけどレイラは待ってろよ」

「なんでですか？」

「前みたいなのがあるかもしれないから」

死んでも生き返らせることができるけど、友達が死ぬところなんて見たくないしね。

「……足手まといって事ですか？」

なんでそんな泣きそうな顔すんの・・・
いやフード被っててよくわからんけどさ。

「私だって魔法使えるんですよ？」

「どんな魔法使えるん？」

「はじまりの魔法、振動です！」

「それは強いん？」

「馬鹿にするなよシキ。おそらく最強の魔法だ」

え、マジで？

「レイラ、その魔法を俺に向けて使ってみてや」

「やめろ！さすがの人間でも死ぬぞ！」

「大丈夫大丈夫、たとえ死んでも生き返るし」

エリス心配しすぎやろ。

イマジンブレイカー オールフイクション
いざとなれば幻想殺しも大嘘憑きもある。

「じゃ、いきますよ？」

「あいよー、できれば頭と心臓あたりはやめてほしい」

生き返ることができるといっても死にたくないし。

「わかりました。それじゃ・・・えい！」

レイラの掛け声とほぼ同時に俺の右腕が破裂した。
そしてその衝撃で俺は5メートルくらい吹っ飛んだ。

・・・「えい！」っていう掛け声は似合わない威力だねこれは。

「お、おいシキ！大丈夫か！？」

「ちよっと！アンタ生きてる！？」

「な、なんとか生きてる・・・」

これは頭とかにされてたら確実に死んでたな。
ていうか出血量が結構危ない状態なんだけどね。

「だ、大丈夫ですかシキさん？一応手加減したつもりなんですけど・
・・・」

「大丈夫大丈夫、ちよっとビビったけど問題ないよ」

とりあえず傷を治そう。

「レイラの魔法をくらった事をなかったことにする」

よし、これで綺麗さっぱり元通りだ。

「ていうかどういう原理なん？」

「振動ですよ。シキさんの右腕の位置にあった全ての物質を振動さ

せたんです」

それは原子レベルでならかなり強いよ。

いや、そうでなくても十分強いね。

実際にくらった俺が言うんだ。間違いない。

36話 はじまりの魔法（後書き）

こんにちは、明後日からテストのアヲネギです！

ついにユニークが10000人を超えました！やったね！

見てくれる人が増えてきて嬉しいです！

最初は「読む人なんて10人いればいい方だ」と思っていたんですが、その1000倍も読んでくれる人がいるとは……

これからもがんばって書きますので、よろしくお願いします！

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください！

37話 敵に対しての礼儀

「なるほどね」

あの後、レイラからはじまりの魔法はどんなものなのかを教えてもらった。

この世界で「はじまりの魔道士」とよばれた人が使っていた魔法らしい。（そのまんまとか言わない）

最初は水面に波紋を発生させる程度だったが、研究に研究を重ねてさっきレイラが使ったような魔法になったそうだ。

ていうか進化しすぎだろ。

ちなみに無属性の魔法はこの『振動』だけらしい。

「あ、もちろんはじまりの魔法っていうのは世界で最初に生まれた魔法だからですよ」

なるほど、「はじまりの魔道士」が使っていたから「はじまりの魔法」ってわけじゃないんだな。

文字通りはじまりの魔法ってわけか。

「私は本当にはじまりの魔法を使える人がいるって事が信じられんのだが……」

「そうなん？」

「そもそも無属性の魔法など使えるはずがないんだ。誰の魔力にも

絶対に属性があるはずだからな」

「じゃあ何でレイラは無属性の魔法がつかえるのよ？」

「私は特異体質で、私の魔力には属性がないんです」

「聞いた事ないぞそんなの・・・」

「誰にも言わないでくださいね。私達だけの秘密です！」

ああ、隠してたのか。

だから初めてレイラと会った時も盗賊と戦わずに逃げてたんやね。聞いた感じ、無属性の魔力はかなりレアらしいし。

そんなのを普段から使いまくってたらいろいろ問題になるだろうしね。

「・・・レイラも大変やね」

「いえ、ずっと魔法が使えないフリをしていたのでそこまで大変でもなかったんですけどね」

マジかよ。

「でもシキさんにはじめて会った時はうっかり魔法がつかえますって言っちゃいましたけど」

「あ、そうやったね」

あの時はこんなにヤバい魔法を使えるとは思ってなかったけどね。

もっとかわいい魔法かと思ったよ、ファイアーボール的な。

「どうですか？ ついていってもいいですか？」

「いいけどそのはじまりの魔法は内緒にしておきたいんじゃないん？」

「自分の身を守る程度にしか使わない予定です！」

「それならまあ、いいか」

「よかったわね、レイラ」

「はい！」

めっちゃ嬉しそうに返事するやん。

ていうかなんでそこまでついてきたんだか・・・
わからんね、俺には。

「ていうか雪乃はどうすんの？」

「アタシはやめとく」

「そうか！ それなら明日も遊ぼう！」

エリスがなんか嬉しそうだ。

多分、俺ら三人が依頼で出かけるとエリスは暇なんだろうな。

「誰もこないと暇なんだ！」

「うん、明日もここにくるわ」

「ていうかロルスさんがいるじゃないですか」

ロルス……

ああ、アイツか。

最近見かけないから忘れそうだったよ。

「アイツは見回りとかが多いからな、あんまり遊んでくれないんだよ」

そういえば俺がロルスと初めて会った時もそんなだったな。

いや違うか？

よくわかんね。ていうか覚えてない。

ロルスの翼を焦がしたのは覚えてるんだけどなあ

「そういえばロルスの翼はもうなおったん？」

「ああ、大丈夫だったみたいだぞ」

回復早いなアイツ。

「どうしたんだシキ？ロルスの回復がはやくて残念か？」

「エリスって俺がどんな人だと思ってるの……」

「サデリストな戦闘狂とかその辺と思ってるぞ。使う技とか相手の

心を折るようなのが多いしな」

なんでだよ！

確かに戦うのは好きだけどさあ！

戦闘狂まではいかねえよ！

それにサディストでもなんでもないわ。

ノーマルだよノーマル。

「かなり誤解されてんな俺。それと心を折るのは敵に対しての礼儀だと俺は思ってる」

「その時点でアンタかなりアレよ」

アレってなんだよアレって。

「まあいいじゃないそんなこと」

「私は絶対にシキだけは敵に回さないように気を付けよう」

なんかエリスが小声で言ってるが俺には聞こえない。

ていうか俺だけじゃなくレイラも敵に回したら十分ヤバイと思うんだけど。

さっきエリスが言ったの聞こえてるやん！とかそういうツツコミも俺には聞こえない。

「そういえばシキ達は宿に泊まってるんだったな」

「そうですよ。ただもうお金がないので宿からでれないんです」

「ちょっと待て、ついこの前^{ソウルイーター}吸魂鬼倒したとこやん」

「思ったより報酬が少なかったんです！ユキノさんの分もシキさんが払ってるんですから！」

あ、そうやったね。

そりゃ足りなくなるわな。

「家でも買ったらどうだ？」

簡単に言うなよなエリス。

「めっちゃ金かかるやん。それなら自分で作るわ」

錬金術とかだと家くらいすぐに作れるし。

「そんな事できるのか？」

「余裕だね、錬金術でも使えば一瞬だ」

問題は土地とかだね。

やっぱ普通に家を買ったほうがいいんかな？

「いや、やっぱ家を買おう。明日から貯金しまくって家を買おう。マイホームだマイホーム」

しばらくギルドの依頼とか頑張ってたらなんとかなるよね。

「ていうかいつ帰るのよ？」

「あんま考えてないけど、いま何時くらいなん？」

ここには窓がないからよく時間とかわからないんだよね。
いやまあ、窓があれば何時かわかるってワケでもないけどさあ。

「そうだな・・・日はもう完全に沈んでは思うぞ」

「そんじゃ、帰ろうかな」

どっこいしょ、と立ち上がる。

「そうですね、帰りましょう」

「エリス、また明日ね」

そんな感じで俺ら三人は宿に帰った。

——翌日——

「それじゃ、行きましょう！」

「ふあゝ・・・ねむ」

今、俺はレイラと一緒に街の門の前にいる。
ちなみに服装は制服、たまには着ないといけないなーと思ったから
で、特に深い意味はない。

あと、朝早くにレイラに起こされたため、少し眠い。

「ほら！シャキツとしてください！」

レイラが俺の背中をバシバシ叩く。

「痛い！痛いよ！？ちゃんと起きてるから！」

「さっきまでふにゃふにゃだったじゃないですか」

「そもそも俺が朝早くにちゃんと起きただけでも奇跡に近いんだからこれ以上を要求するのはどうかとおもうね」

学校のない日は夕方まで寝てるといのに・・・

「ていうか盗賊をどうするんだっけ？殲滅？虐殺？」

「捕まえるんですよ！」

「あ、殺したらダメなのか」

「当たり前です！」

まあいいか。

「それじゃ、行きましょう！」

「あいよ」

37話 敵に対しての礼儀（後書き）

こんにちは、テスト前日のアヲネギです。

明日からテストですが、普通に更新してます。

勉強とか苦手なんで普段からあんまりしないんですよー
もちろん、成績は結構いい感じに低いです＼（＾Ｏ＾）／

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください！

38話 砕けろ

1時間くらい歩いて、俺とレイラは盗賊の住んでいるという場所についた。

なんていうか、廃墟になった砦っぽい場所だ。

壁のところどころが崩れていて、屋根にも数箇所、穴が開いてる。

「レイラ」

「なんですか？」

「俺の見間違いじゃなかったら盗賊みんなもう全滅してるんだけど」

うん、見事に全滅だ。

これじゃどうしようもないわ。

「どうします？」

「どうって……どうしようか」

とりあえず埋める？

いや、大嘘憑きで生き返らせて捕まえるとか？
オールフイクション

「あっ！」

「なに？どしたん？」

「あれ！モミジさんです！」

「紅葉？どこにいんの？」

「ほら！あそこで倒れてます！」

あ、マジだ。

数メートル先に、紅葉が倒れていた。

・・・生きてんのかな？

俺は倒れてる紅葉に近寄り、立ったまま話かける。

「紅葉、生きてるか？」

・・・返事がないね。

とりあえず俺は、紅葉にベホマを使う。

が、反応がない。

「・・・死んでるねこれは」

「本当ですか？」

「嘘ついても仕方ないやろ。でもまあ、仕方ない。嘘を憑こう」

「・・・？」

レイラがなに言っただコイツって目で俺を見る。

まあ、そりゃそうか。

大嘘憑き《オールフィクション》を使い、紅葉の死をなかったこと

にする。

「これで、時間が経ったら起き上がるはず」

「何したんですか？」

「紅葉の死をなかったことにした」

「そんなこともできるんですね」

オールフイクション
大嘘憑きは否定の能力だからね。
もはやチートっていうかバグに近いわな。

「それじゃ、盗賊全員を縛って街に連れて行こうか」

「え、でもみんなもう死んでますよ？」

オールフイクション
『僕には大嘘憑きという欠点がある！』
マイナス

「……なんですかその喋り方」

「まあいいじゃない、とりあえずこれで盗賊全員縛るから待ってて」

オールフイクション
俺は能力でロープを作り出し、盗賊の死体を一人ずつ縛っていき、
大嘘憑きで生き返らせる。

街に着いてから生き返らせてもよかったんだけど、腐臭がね、すごいんだ。

あ、もちろん紅葉は縛ってないよ。

ていうか終わった後に気づいたんだけど、能力使えばもっと楽にできたよね……

「あーつかれた。ちょっと休憩してから街に帰ろう」

「ていうかどうやって運ぶんですか？」

そうなんだよね……

一応考えてあるけど、この方法じゃ多分無理だしね。

「ま、どうにかなるやろ」

「いいんですかそんな適当で……」

「元から俺は適当だ！」

「それ自慢げに言うことじゃないですよね？」

「まあいいじゃない。それより紅葉どうしようか」

「街に連れて行けばいいじゃないですか」

それがいいね。

「それじゃ、紅葉が起きるまでここで待ってようか」

「なんでですか？」

「こいつらを運ぶの手伝ってもらう」

盗賊も結構な人数いるからね、一人じゃさすがに疲れる。

ちなみに俺が考えてた方法っていうのは、トラックでも作り出して運ぼうかと思ってた。

でもまあ、車の運転なんて出来ないからね。

「さて、紅葉はあとどれくらいで起き――」

言い終わる前に、背中から誰かに刺された。
下を見るとがつつり剣が腹を貫通している。

「お前、油断しすぎだ。助けたら攻撃されないとも思ったのかよ？」

てことはアレか。

紅葉が俺を刺したのか。

「シキさん!!」

レイラが近寄ってくる。

「レイラ、ちょっと下がってて」

俺はレイラの肩に手を置いて、数メートル後ろにテレポートさせる。

「何も考えずに攻撃すればお前の能力でも防げないみたいだな」

そう言って紅葉は剣を引き抜く。

「・・・俺を誰かと勘違いしてない？」

俺は喋りながら大嘘憑オールフイクションきで刺された事をなかったことにする。

「その能力……てことはお前は四季か？」

「見りゃわかるやろ」

なんで紅葉が俺の能力知ってんのかはわからんけど。

「どっちにしろ、お前とは一回戦ってみたかったんだ。ちょっと付き合えよ」

紅葉はそう言うのと剣を構える。

「剣か、なら俺は刀で戦うよ」

俺は能力である刀を作り出し、構える。

「お前は螺子でも使ってくると思ってたけどな。まあいい、行くぞ！」

紅葉が突っ込んでくる。

「――砕けろ」

ま、俺は刀とか持った事自体がほぼ初めてなんだよね。多分まともにやりあっても勝てないと思うし。

だからこそこの「この刀」でもあるわけだけどさ。

「鏡花水月」

38話 砕けろ（後書き）

こんにちは、久しぶりのアヲネギです。

友人が泊まりにきててなかなか更新できませんでした。
というか今も泊まってるんですけどねw

鏡花水月の説明は次回します。

誤字脱字、分かりにくい所があれば教えてください。

39話 ナメんなよ

——紅葉サイド——

俺はゼロに殺された。

ゼロだけなら勝つまで行かなくても逃げるくらいはできたかもしれない。

ただ、ゼロは仲間を連れていた。

名前は聞いてないが、能力は聞かずとも教えてくれた。

相手を発した言葉通りに縛ることが出来る能力。

確か、『デメリット・ルール悪性規則』とか言ってたな。

アイツだけなら何とかなったが、ゼロとアイツの二人が相手だときすがに無理だ。

・・・話を戻そう。

俺はゼロに殺されたが、今意識がある。

そして、横には俺に背を向けた状態で立っているゼロがいる。

誰かと話してるようだが、相手まではわからない。

だが、チャンスだ。

俺は近くに落ちている盗賊の誰かが使っていた剣を拾い、ゼロの背中を刺す。

「何も考えずに攻撃すればお前の能力でも防げないみたいだな」

そう言って、剣を引き抜く。

「・・・俺を誰かと勘違いしてない？」

ゼロはそう言うのと、傷を消した。

消したっていうか・・・刺される前の状態に戻したって感じだな。

てことは・・・

オールフイクション
「その能力・・・てことはお前は四季か？」

「見りゃわかるやろ」

ゼロとお前じゃ外見だけはそっくりなんだよ。

まあいいか。

ちようどいい機会だ。

「どっちにしろ、お前とは一回戦ってみたかったんだ。ちよつと付き合えよ」

そう言って、俺は剣を構える。

ゼロには負けたが、四季には多分負けな

俺の能力は、大嘘憑きに勝てるんだからな。
オールフイクション

「剣か、なら俺は刀で戦うよ」

四季の右手に光が集まり、やがて日本刀が作られ、構える。

物を作り出す能力・・・大嘘憑き以外にもまだなにかあるのか？
オールフイクション

「お前は螺子でも使ってくると思ってたけどな。まあいい、行くぞ！」

俺は四季に向かって走る。

「――砕けろ」

四季が何か言っているが、聞こえない。

続けて何かを言ったが、俺が剣を振り下ろす。

キン！

俺の攻撃を四季が刀で防ぐ。

そしてすぐにバックステップで後ろに下がる。

「戦うからには俺も本気でやるぞ？」

四季が刀で衝撃波を飛ばしながら、俺に話しかける。

・・・コイツ、そんな芸当もできんのかよ。

「そうじゃないと意味がねえよ」

俺は四季の飛ばしてきた衝撃波をかわす。

もつとも、攻撃を受ければ俺は『嘘鏡』ミラートリックで反撃できるんだがな。

俺の受けた傷を四季と入れ替えれば、俺は無傷で四季が負う。

嘘鏡はありとあらゆる状況を自分と入れ替える能力だ。
ミラートリック

俺の視力をなかったことにされても、四季と視力を入れ替えればいい。

聴力も同じだ。

入れ替えるのは体の状態、状況ならなんでもできる。

対象が俺と他の誰かっていうのが条件だが。

つまり、人の形をしていないものには効果がない。

「ほらほら、まだまだいくぞ」

四季が地面を軽く踏みつける。

それだけで、地面に亀裂が走る。

・・・なるほど。

「一方通行か」

アクセラレータ オールワイクシヨン

一方通行に大嘘憑き、チートのオンパレードだな。

二種類も使えるのかよ。

アクセラレータ

「あれ？紅葉はこの能力の事知らないのかと思ってたわ」

ベクトル

「方向を操る能力で学園都市第一位の能力だろ。禁書厨ナメんなよ」

「ていうか知ってるなら分かると思うけど、この能力はほぼ無敵だぞ。勝てんの？」

「俺の能力なら反射も関係ないんだよ」

アクセラレータ

だが四季が一方通行も使えるって事になると、もう剣はいらないな。

・・・ホントに反射できるのかどうか、試してみるか。
ミラトリック
傷なら嘘鏡で入れ替えができるし、剣なんて盗賊が使っていた物がいくらでも落ちている。

「ほら、反射してみろよ!」

俺は、持っていた剣を四季の頭めがけて投げる。

「そんなもんなかった」

投げた剣は四季に届く前に消える。

・・・オールフイクション大嘘憑きか。

「テッテー的に遊んでやるよ三下ア!」

ちょっと引くくらい似てる声真似をしながら方向変換ベクトルを使い、近くにあった石ころを俺に向かって蹴り飛ばす。
正直、速すぎて避けれない。

そしてその石は、俺の左足に直撃し、貫通した。

・・・が、俺は嘘鏡ミラトリックを使い、俺の傷を四季と入れ替える。

「うおっ! 傷が俺の足に!?!」

俺の予想した通り、この能力なら一方通行の反射は適用されないみたいだ。
ミラトリック アクセラレータ

「うわあ、傷口がグロい! でもまあ、血液操作で出血しないように

してるんだけどね」

「そんな複雑な演算、よくできるな」

「もっとも、俺の頭じゃ血液操作してる間は反射なんてできないんだけどね」

なら今がチャンスって事か。

でも何でそれを俺に言うんだ？

・・・まだ何かあるのか？

まあいいか。

俺は近くに落ちていた剣を拾い、四季との間合いを詰める。

「接近戦か！いいねえ！」

四季が刀を構えるよりも先に、俺は突きを四季の腹に放つ。

「ホントに反射できないんだな」

「痛い！このままじゃ死ぬ！」

「大嘘憑オールフイクションきがあるだろ？」

刺した剣を引き抜き、もう一度四季を斬る。
斬られた瞬間に血液操作で出血を止めているのか、血は出ないが傷はある。

「二種類の能力を同時に使えるほど俺は器用じゃないんだよね」

「血液操作が出来るくせに器用じゃないとか言うなよ」

俺は倒れた四季の心臓あたりに剣を突き刺す。

が、四季は刀を持っていない方の手で俺の剣を押し、狙いをずらす。

俺の剣は四季には当たらず、地面に突き刺さる。

「心臓は流石に死ぬわ」

そう言って四季は倒れたまま刀で俺を斬ろうとするが、俺は四季の腕を踏んで、押さえる。

押さえると同時に、地面に刺さった俺の剣を抜く。

「残念だったな、俺の勝ちだ」

『やめてよ、まだ死にたくないよ。あやまるから許してよ』

四季が泣きそうな顔をしながら言う。

なぜ球磨川のセリフなのかはわからないが。

が、俺は四季の眉間に剣を突き刺す。

「お前、意外と弱かったな」

もう動かない四季に向かって俺は言う。

ドス

「っ!？」

突然、背中から誰かに刺された。
腹を見ると、刀が貫通していた。

「俺が反射できないから勝てると思った？」

後ろから、声がする。

「俺が泣きそうな顔をしたから勝てると思った？」

なんで、生きてるんだ。

『^{あめ}甘えよ』

そう言って、刀を引き抜く。
俺はうつ伏せに倒れる。

『が、その甘さ。嫌いじゃあないぜ』

なんでここでいいセリフを言うんだ。
いやそんな事は今はいいか。

「なんで、生きている？」

いや、それより……

「なんで、傷一つないんだよ」

俺が入れ替えた左足の傷すら消えてる。

俺の記憶が正しかったら四季はあの傷を受けてからは大嘘憑オールフイクションきを使
っていない。

「ん？ ああ、この刀ね、 「鏡花水月」 っていうんだよ。 一度でも始
解を見せた相手なら完全催眠にかけることができるっていう便利な
斬魄刀だ」

39話 ナメんなよ（後書き）

こんにちは、また視力が落ちたアヲネギです。

眼鏡をずっと装着してるのはやっぱりまずいんでしょうか？

前回言っていた鏡花水月の説明をします。

鏡花水月…ブリーチに出てくる藍染の持つ斬魄刀で、始解を一度でも見せた相手を完全催眠にかけることができる能力を持つ。

斬魄刀に触れている間は、始解を見てしまった人でも完全催眠にかからない。

誤字脱字、分かりにくいところがあればおしえてください。

40話 俺は誰でしょう

——四季サイド——

「まさかホントに俺が闘ってるとでも思ってたん？」

そもそも一方通行を俺は上手く使えないんだし。
アクセラレータ

それを紅葉が知らなくても、血液操作なんて高度な演算が必要な技は、俺の頭じゃ無理だってくらいわかんと思っただけだなあ。

まあ、分かったところでこの鏡花水月の前じゃどうしようもないんだけどね。

「お前……斬魄刀まで……」

「あれ？俺の能力知ってるものと思ってたけど、知らんみたいやね」
なんで大嘘憑き（オールフィクション）の事を知ってたんだろう。

「ていうかはやく傷をどうにかしないと死ぬぞ。俺がなかったことにしようか？」

「油断してんじゃないよ。死にそうなのはお前だ」

紅葉の声が聞こえると、俺は倒れていた。

そして、俺が紅葉を刺したときの傷が俺にあった。

とりあえず、傷をなかったことにして立ち上がる。

「ありとあらゆる状況を入れ替える。それが俺の能力」
ミラトリック

「俺が言える事じゃないけど、なかなかチートやね」

「一方通行の反射にも影響されないこの能力だと、お前に勝てる」
アクセラレータ

「まあ、確かに一方通行には勝てるね」
アクセラレータ

「大嘘憑き（オールフィクション）があるから大丈夫、とか思ってるのか？ 傷をなかったことにしようが俺の視力をなかったことにしようが、入れ替えれば済む話なんだよ」

おお、そうやね。

正直そこまで考えてなかったわ。

「ほら、続きやるぞ！」

紅葉が剣を構えて突っ込んでくる。

どうでもいい事だけど、どこで剣の使い方なんて覚えたんだろうね。

剣の届く距離まで間合いを詰めた紅葉が突きを放つが、俺はそれを左手で掴む。

もちろん素手で。

「おお、痛い痛い。出血量がハンパない」

そう言いながら俺は刀を振り上げる。

「この状況だと入れ替えなんて出来ないよな？」

振り下ろしたけど、紅葉は剣を手放して避ける。

「確かに、斬られた後じゃヤバかったがな」

よし、ちよつと試してみよう。

ゼロが言っていた「能力が進化した」っていうのは多分、二つ以上の能力を同時に使えるようになったって事だと俺は思ってる。

たとえば、視界ジャックしながら粉碎オールクラッシュの一撃とかね。

なら、物を作り出す方も進化してるんじゃないかな。

武器とか道具以外も作れるようになってるとか、俺から離れた場所に作り出せるとか。

「と、言うわけでちよつと試してみようかな」

紅葉の真上に、なにか作り出してみよう。
武器でも道具でもない何かをちよつとね。

「なんか言ったか？」

「いや、それより避けないと危ないぞ？」

紅葉の頭上を指差し、教える。

「な……電柱!？」

「そう、電柱」

電柱を一本、紅葉の頭上に作り出した。

しかしその直後、俺が電柱の真下にいた。
正確には、紅葉の立っていた場所と俺の立っていた場所が入れ替わった。

「お前馬鹿か？俺の能力は入れ替えだって言っただろ」

ああ、そうやったね。

とりあえずこのまま何もしないでいると死ぬから、幻想殺し（イマジンブレイカー）を使って落ちてくる電柱に触れる。

ちなみに幻想殺し（イマジンブレイカー）を使った瞬間、右手に持ってた鏡花水月も消えた。

まあ、能力で作り出した武器なんてそうなるよね。

・・・ていうか、巨大な螺子が作り出せる時点で変化したことには気づくべきやったね。

螺子は武器じゃないしね。

いやまあ、武器にも使えるけど。

「さすがに死ぬかと思ったわ・・・」

どうしようか。

入れ替えの能力だと思ったより戦いづらい。

攻撃しても入れ替えで俺が傷を負うしなあ。

これだと鏡花水月つかっても勝てるかどうか怪しい。

鏡花水月の効果の対象を入れ替えられたらもうどうしようもない。

どうしようか。

デスノートでも作り出して、名前でも書く？

いや、その効果すら入れ替えられるかもしれない。

うーん……

……ああ、あったわ。

紅葉に勝つ方法が。

「よし紅葉！さっきも言ったような気がするけど俺は本気でやるぞ！」

俺はある能力を使い、紅葉に歩いて近寄る。

「瞬間移動か。だがどこから攻撃しても俺の能力の前じゃ意味がないぞ」

「いやあるんだよね、これが」

紅葉に近寄り、紅葉の腹を殴る。

「お前っ……どこから……」

「さて、ちょっとクイズをしよう」

「は？」

「俺は誰でしょう？」

「なに言ってんだ、お前は……ちょっと待て、お前誰だ？」

よし、ホントにこの能力使えるか不安だったけど、ちゃんと使えてるね。

「元英雄」

40話 俺は誰でしょう（後書き）

こんにちは、この時間にお腹が減ることの多いアヲネギです。

四季くんが最後に使った能力は次回に説明します。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

41話 飽きた

「ちょっと待て、お前誰だ？」

「元英雄」

使った能力は知られざる英雄。ミスターアンノウン

めだかボックスに登場する、箱庭学園97代生徒会長の日之影空洞が持つ異常。アブノーマル

他人から見えなくなり、認知されなくなる異常。アブノーマル

・・・生徒会長なのに誰にも知られないなんて、なんだかなあ

この能力なら紅葉を攻撃しても、紅葉は俺を認識できないから入れ替える対象がいらない。

・・・レイラはいるけどね。

あの子、影薄いんだよなあ・・・

今は多分、どっかに隠れてるんじゃないかな。

「元英雄？」

「いやまあ、誰でもいいじゃない。さっきまで紅葉と闘ってた人が俺だよ」

——紅葉サイド——

「さっきまで紅葉と闘ってた人が俺だよ」

俺の前にいる、俺と同じ制服を着たヤツが言う。
確かにさっきまで闘ってたが……

ちょっと待て、誰と戦ってたんだ？

「じゃ、続けるよ。闘いは続いてるんだし」

そう言うと、ヤツは消える。

次の瞬間、左の頬に衝撃が走る。

「いってえ！」

「油断すんなよ？」

どうなってんだ？

いや、そんなことはない。

攻撃を受けても、受けたダメージを入れ替えれば済む話だ。

……ちょっと待て、なんで俺は殴られてるんだ？

どうなってる？誰に殴られた？

まて、俺はなんで闘ってる？

あれ？

なんで俺は頬が痛いんだ？

「わけわかんねえ……」

なにがどうなってる？

何が起こってるのかわからないが、ヤバい。

傷を入れ替えるにしても、相手が人じゃないと意味がない。

しかも今は相手がいるのかどうか、戦ってるのかどうかもわからない。

状況がまったくわからないが、ヤバい事だけはわかる。

ありとあらゆる状況を入れ替える能力っていつでも、相手がいないんじゃない意味が無い。

この能力は攻撃に向かない。

基本的に反撃がメインの能力だ。

俺から攻撃を仕掛ける事はどんなヤツが相手でもほぼ不可能。

「うーん。飽きた」

突然、俺の正面に人が現れた。

ああ、四季か。

「『知られざる英雄』ミスターアンノウン、これはハンパないね」

「……ああ、それで今まで俺はお前に気づかなかったのか」

「ていうか降参するわ。はやく帰りたい」

「……は？」

「降参。俺の負けだよ。そんなわけで、帰るわ」

——四季サイド——

「そんなわけで、帰るわ」

紅葉は「意味わかんねえ」って顔してるけど気にしない。
なんやかんや言いながら同意してくれるあたりが紅葉のいい所。

「レイラ、帰ろうぜ。もう疲れたわ」

正直なにもしてないけどね。
物陰から出てきたレイラが、嬉しそうな顔をしてこっちに歩いて来る。

「途中、シキさんがいなくなってびっくりしました」

見てたんかい。

まあ、あの異常はそういう効果だからね。
ミスターアンソウン

「とりあえず、盗賊運ぼう。それで帰って寝よう」

「この人数を二人で街まで運ぶのか？」

「そういう紅葉は手伝ってくれんの？」

「ちなみに私は運びませんよ。シキさんが運ぶんです！」

ええ………

「紅葉、頼む」

この盗賊たちと一緒に行動してた紅葉に頼むのもなんか変だけど。

「自分でやれよ」

うん、手伝ってくれないってわかってたけどね。

まあいいや。

とりあえず、どうやって運ぼうか。

最初はトラックでも能力で作り出して街まで運ぼうと思ってたけど、よく考えたら車は運転できないしね。

……よく考えなくてもそうだけど。

「ああ、そうだ。四季、お前ゼロって知ってるか？」

「俺とそっくりのゼロなら知ってるよ」

他にどんなゼロがいるんだって話やけども。

「アイツは一体何者なんだ？」

「わからん」

俺が知りたいくらいだね。

「逆に紅葉は何かしらんの？」

「知らないから聞いてるんだよ」

ま、そうだよな。

「でもまあ、俺とあれだけ似てるあたり、俺と無関係ではないんだろうね」

「だろうな」

いろいろ気になる事はあるけど、とりあえず盗賊つれて街にもどるべきやね。

「で、紅葉はこれからどうすんの？」

「俺は俺でやりたいことがある」

「とりあえず、運ぶのだけでも手伝って」

「・・・電柱が作り出せるならトラックでも作り出せばいいじゃないか」

最初は俺もそう考えたけどさあ・・・

「いや、運転の仕方とかしらんし」

「ベクトル変換でどうにでもなるだろ」

「俺はそこまで頭よくないんだよ」

「ていうかお前の能力ってなんなんだ？」

「簡単に言えば漫画とかの能力を何でも使える能力」

「それで一方通行アクセラレータが使えたわけか」

「そゆこと」

「『黄金練成《アルスⅡマグナ》』でどうにかならないのか？」

「……その方法があったか！」

でも怖いんだよなあ、『黄金練成《アルスⅡマグナ》』は。
なるべく余計な事を考えないようにしないと。

いらん事考えてそれが現実になってしまふとか怖いんだよね。

ていうか黄金練成《アルスⅡマグナ》だと絶対にゼロには勝てない
よね。

「俺とレイラ。あと縄で縛られている盗賊全員、王都まで瞬間移動
しろ」

41話 飽きた（後書き）

こんにちは、テスト期間のアヲネギです。

テスト期間って妙に部屋を片付けたくなりますよね。

前回のあとがきで言っていた能力の説明です。

知られざる英雄…めだかボックスに出てくる日之影空洞の持つ異常。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

42話 反存在

——ゼロサイド——

【デメリット・ルール悪性規則、面白い能力だったね】

「はい、しかし思った以上に使い勝手が悪いです」

【攻撃には向かない能力だね】

「はい、ゼロさんがいないとあのような結果にはならなかったでしょう」

【まあさつきは紅葉くんもいたんだし、仕方ないんじゃない？】

【で、話は変わるんだけど】

「为什么呢？」

【少し休んだら俺の知り合いに挨拶しに行く予定なんだけど】

【リンちゃんもついてくるかい？】

【ああ、大丈夫だよ】

【たとえば戦闘になったとしてもアイツじゃ俺に勝てないし】

——四季サイド——

盗賊をギルドの人に任せて宿に帰って寝た俺は、また夢の中にいた。
・・・夢だっけ？精神世界だったっけ？

どっちでもいいか。

えー、ここに俺がいるってことは咲良が呼んだのかな？

「そうだよ」

後ろから声がした。

振り向くと、黒いジャージ姿・・・いつも通りの服装の咲良がいた。

「別にジャージしか持っていないわけじゃないからね？」

「そんな事心の奥底でしか思っていないよ」

「思ってるんだ・・・」

てか咲良は心が読めるんじゃないかなかったっけ？

「正確には考えてることがわかる、かな」

なるほどね。

「で、今回は何の用？」

「もう一人の君の事を調べたの」

お、マジか。
てか結構早かったな。

「徹夜で調べたからね」

「で、どうだったの？俺に言いにくるってことは何か分かったことがあるんでしょう？」

「うん。もう一人の君は、君の反対側の存在。私は『反存在』^{アナザー}って呼んでる」

「全教科が赤点ギリギリの俺にでもわかるように説明してほしい」

「えっと、それならまず人が持つてる能力の説明からになるんだけど、いいの？」

「大丈夫だ、問題ない」

「まず、人が持てる能力は一つだけなの」

「あれ？俺のは？」

「君の能力は偽神^{レプリカ}一つだけだよ」

「ああ、なるほどね」

そう考えるとやっぱチートやね。

「で、人が二つの能力を手にしたら、元々持っていた能力が使えなくなるの。新しく手に入れた能力しか使えないって事だよ。それで、

元々持っていた能力はどこに行くのかって言うと、その人の精神世界で自我を持つ。そして自我を持った能力は、能力の持ち主とは正反対の性格になるんだよ。」

説明なげえ・・・

てかよくこんなに長く話せるなあ。

「とりあえずゼロの事を咲良が『反存在』^{アナザー}って呼んでるのは理解した」

「まとめると、新しい能力を手に入れると『反存在』^{アナザー}が生まれるって事だよ」

なるほどね。

俺が新しい能力を手に入れたから元々持っていた能力がゼロになったわけか。^{レプリカ}

「つまり、君の反存在が生まれたのは、私のせい」^{アナザー}

「あー・・・そうやね」

「ごめんね」

咲良が少し下を向いて謝る。

「別に気にしてないよ。そうなっちゃったものはしかたない」

それに『不幸な結末』^{バッドエンド}よりも『偽神』^{レプリカ}の方が使ってて楽しいだろうしね。

知ってる漫画の技を実際に使えるとか楽しいやん。

俺は、こつちの方がいいね。
周りを不幸にしたところで、自分が幸せになれるってわけでもないし。

いやまあ、結果的には一番幸せになるかもしれないけど、それでも自分にとってのプラスにはならない。

「・・・君は人間なのに、いつかの魔法使いみたいな事を言うんだね」

「なんか言った？」

「いや、なんでもないよ。用も済んだし、そろそろ戻すね」

「あいよ」

そういつて俺は目を閉じる。

『はい、もういいよ』

・・・よし、戻ってきた。

さて、何をしようかな。

もう日は昇ってるしなあ、寝るのもなんだかなあ・・・

何しようかな・・・

「・・・散歩でもするかな」

散歩もたまには悪くないよね。

・・・元の世界じゃまったくしなかったけどさ。

それじゃ、さっそく行こうかな。

「どっこいしょっと」

立ち上がり、着替えて宿から出る。

「おお・・・いい天気やねえ」

【そうかい？俺は雨の方が好きなんだけどなあ】

「っ！！」

声のした方を見ると、嫌悪感を放つゼロがいた。
あと、横には知らないやつもいる。

「何で・・・ここにいるんだよ・・・」

【おまえ四季はいつも俺と会うと敵意むき出しにするよね。そんなに俺が嫌いかい？】

「ゼロさんがさっき言ってた人はこの人ですか？」

ゼロの横にいるやつがゼロに聞く。

・・・なるほど、こいつが紅葉の言ってたやつか。
確かに、英文を直訳したような喋り方ではあるな。

【そうだよ、俺とそっくりでしょ？】

「はい、双子に見えます」

【違うよリンちゃん、俺は四季コイツの反対側の存在なんだ】

リンっていうのかコイツは。

見たところ、リンってやつも人間だ。

何か能力持ってるって考えたほうがいいな。

「で・・・誰だよ、お前。俺には人間に見えるんだけど？」

ゼロと向かい合ってたリンってやつが、首だけをこっちに向ける。

正直、気持ち悪い。

「申し遅れました、私の名前は麻基鈴ト・ルールです。所有する能力は『悪性デメリッ規則』といえます。ご察しの通り、人間です。ゼロさんが呼んでくれました」

ゼロが？

そんな事できんのかよ。

【そうだ！どうせだから四季こいつにリンちゃん的能力を見せてあげなよ！
！】

「そうですね、やってみましょう」

【上手くいけばこの場で殺せるかもしれないよ】

何物騒な事言ってるんだ。

とりあえず、リンがどんな能力か分からない。

でも能力を使われてからじゃ対抗する術が無くなるかもしれない。
雪乃のような能力だと、対抗のしようがないしなあ・・・

とりあえず、どんな状況でも使える能力、もしくは武器。

武器だな、それか道具。

・・・よし、街が結構崩壊するかもしれないけど、なかったことに
すればいいよね。

俺は、ゼロたちの頭上に無数の車を能力で作り出す。

ゼロたちの頭上に光が集まり、無数の車が形成される。
もちろん、車は重力に従ってゼロたちに落ちる。

・・・が。

【まったく・・・駄目だなあ。俺がいる事を忘れちゃ駄目だよ。俺
の能力を忘れたのかい？】

「なるほど、貴方は物を作り出す能力なんですね」

まあ、なんとなくはわかってたよ。

はじめからこれだけで倒せるとは思ってないし。
でも無傷かあ・・・

かすり傷すらついてないとか。

【さ、こんどはリンちゃんの番だ】

「ええ、わかってます」

そう答えた後、リンが、俺を見る。

「『貴方は今から10分間、能力で物を作り出すことができない』」

42話 反存在（後書き）

こんにちは、ようやくテストが終わったアヲネギです。
これからはもう少し更新がはやくなると思います。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

43話 超える能力を

「『貴方は今から10分間、能力で物を作り出すことができない』
なと言ってんだコイツ。

アレか、相手を縛る能力か。

確か『デメリット：ルール悪性規則』って言ってたし、そんなところだろうね。

「・・・それだけ？」

「ええ、これだけです。自分の作ったルール規則に相手だけを強制的に従
わせる能力、それが私の『デメリット：ルール悪性規則』です」

ああ、なるほどね。

じゃあさっきの俺の行動は結構ヤバかったのか。

能力そのものの使用を禁止されてたら完全に死んでたな。

【さ、リンちゃんはもう下がっていいよ。あとは俺がやるよ】

「いえ、私も戦います」

【リンちゃんは下がって大丈夫。俺だけで勝てるから】

「しかし・・・」

2対1かよ。

勝ち目なさすぎワロタ。

なんかゼロとリンが話してるうちに解決策を考えないと。

さて、どうしたものか。

リンは、俺の能力を物を作り出す能力だと勘違いしてる。

つまり、リンは今の俺が完全に無力だと思ってる。

でも俺がなにか別の能力を使うと、それすら封じられるかもしれない。

リンの悪性規則は効果を重ねさせることが可能かもしれないし。

……どうするべきかな。

リンに気づかれなような能力……

視界ジャック、イマジンプレイカー 幻想殺し、ミスターアンノウン 知られざる英雄……

これくらいか。

まず視界ジャックは意味が無い。

イマジンプレイカー 次に幻想殺しも微妙だ、打ち消したところでもう一度されたら意味が無い。

打ち消し続ける事はできても、反撃できない。

ミスターアンノウン なら知られざる英雄。

……これも意味が無さそうだね。

ゼロには気づかれる可能性もあるし、最悪の場合、リンにも気づかれる。

……というか、俺がこう考えてる時点で、ミスターアンノウン 知られざる英雄を使っても意味がないんだろうね。

完全に詰みゲーです、本当にありがとうございました。

じゃなくて、真面目に考えようか。

まず、リンの『デメリット・ルール悪性規則』の効果が重複するのかが分からないと俺はどうするべきかわからない。

でも重複できないなら俺の能力そのものを禁止にしたよなあ・・・それとも能力の使用自体の禁止はできないから『能力を使って物を作ることができない』って言ったんか？

それだと楽なんだけどな。

少なくともあと10分間は、物を作る以外の能力が禁止されることはない。

つまり、10分間は物を作る以外の能力・・・漫画とかの能力をフルに使って戦うことはできる。

あー、迷うわ・・・

「わかりました、それではゼロさんに任せます」

【ありがとう！わかってくれて俺は嬉しいよ！】

迷ってる間に話まとまっちゃったっぽいし・・・

道具は作り出せなくて、能力を使えばそれも禁止されるかもしれない。

でもまあ・・・能力使わないでいるよりも、使って試したほうがい

いよね。

よし、使おう。そうしよう。

【さあ、それじゃあ始めようか！】

ゼロが俺に殴りかかってくる。

・・・ま、対策も考えてなかったわけじゃない。

とりあえず、俺は能力を使わずに後ろに下がり、なんの能力も使わずに、何も考えずに殴る。

【痛っ！・・・え？】

・・・やっぱりね。

俺はゼロをもう一度、今度は一方通行アクセラレータを使い、殴り飛ばす。

が、反射だけ効果がなかった。

つまり、ゼロを普通に殴り飛ばした。

【なんで？どうなってるんだい？何をしたんだい？まったくわからないよ】

よし、上手くいってる。

「タネさえわかればお前の能力なんて、どうって事無いんだよ」

最悪の状況を引き起こすって言うても、やっぱり人の考えてる事が反映されるわけだ。

つまり、何も考えなかったらゼロの能力は効果が無い。

【ああー、なるほどね。気づいちゃったか】

やっぱりゼロもこの事してたのか。

【で、それがどうかしたの？】

「え？」

【動揺したように見えた？勝てるとも思った？】

———ゼロサイド———

【動揺したように見えた？】

【勝てるとも思った？】

【駄目だねえ・・・そんなんじゃ俺には勝てないよ】

【それに、そういう時の対策だってちゃんとあるんだ】

【四季おまえだけの能力が進化したとも思ってるの？】

「・・・何が言いたい？」

【俺は四季おまえの反対側の存在】

【俺の能力も進化してるんだ】

【四季おまえの能力の進化とは違って、俺の能力の進化は】

【四季おまえの上をいってる】

【進化というか、正確には応用だけどね】

「なら見せてみろよ、お前の進化した能力を」

【いいとも！】

【見せてあげようじゃないか！】

【ただ、俺の能力は】

【四季おまえのソレとは進化の方向性が違うんだ】

「いいからやってみろよ、お前の『不幸な結末』バッドエンドよりも相手にしにくい能力があるとも思えないしね」

【はははっ！言ってくれるねえ】

【いいよ】

【見せてあげようじゃないか】

【俺の『不幸な結末』^{バッドエンド}を超える能力を】

【見せてあげようじゃないか】

【『即死の結末』^{デッドエンド}】

43話 超える能力を（後書き）

こんにちは、本日二度目のアヲネギです。

久しぶりに一日に二話も更新した気がします。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

44話 できることなんて

——四季サイド——

【『即死の結末』デッドエンド】

ゼロがそういうと、ゼロをドス黒い霧のようなものを纏う。ついでにゼロから発せられる不快感も増す。

【最初に、この『即死の結末』デッドエンドについて軽く説明するよ】

「そりゃありがたいね。サービス精神旺盛で助かるわ」

【簡単に言えば『不幸な結末』バッドエンドの応用だ、別の能力ではないよ。『即死の結末』デッドエンドは、生き物にとって最大の不幸を引き起こす能力なんだよ。つまり、この霧に触れた対象の生き物の寿命の残りを強制的に切り捨てるんだ】

なんてチートな……
オールマイクシオン
それだと大嘘憑きでも助からんぞ。

【ただ、『不幸な結末』バッドエンドのようにほかの最悪の状況を引き起こすことはできないんだけどね】

なるほどね。

つまり、『不幸な結末』バッドエンドの効果はないから俺は能力を普通に使えるわけか。

……まあ、まだ悪性規則デメリット・ルールの効果は残ってるけどさ。

それに、デメリット・ルール悪性規則の効果が重複されるかどうかはまだわからない。
アクセラレータさっき使った一方通行はリンにはバレてなかったみたいだからから
セーフだったけどさ。

【さあ！第二ラウンドといこうじゃないか！】

ゼロが殴りかかってくる。

俺はそれを後ろに飛んで避ける。

怖い怖い、触れたら死ぬとか冗談じゃないよまったく・・・

【ほら！避けてるだけじゃそのうち死ぬよ！】

「避け続けてりゃ死ぬ事はないだろ！」

そのままゼロが追い討ちをかけるように突っ込んでくるが、俺はまた後ろに飛んで避ける。

どうすっかな・・・

とりあえず、注意すべきはゼロよりもリンだな。

・・・ゼロも怖いけどさ。

デメリット・ルール悪性規則の効果が重複するのかわからない以上、迂闊に能力
をつかえない。

かといって攻撃しなきゃ倒せない。

・・・考えるのがめんどくさくなってきた。

【リンちゃん、あいつ四季を動けないようにしちゃってよ！】

「いいのですか？ 私の悪性規則デメリット・ルールは効果を重複させることは不可能な
んですよ？」

おお・・・

気になってたことを普通にゼロに言っちゃってるよ。

【別にいいんじゃない？】

「わかりました。『貴方は30秒間、地面から足を浮かせることが
できない』」

・・・どうしようか。

足がまったく動かない。

いや、動くけど、足を上げることができない。

逆に言うと、足以外はちゃんと動くんだけどね。

ていうか30秒で短いな。

ま、今のゼロなら30秒もあれば動けない奴を殺すことなんて余裕
って事だろうけどね。

「それにしても30秒はちょっと馬鹿にしすぎじゃないかな？」

そういつて俺はゼロを囲むように大型トラックを3台ほど能力で作
り出す。

もちろん、ただの時間稼ぎだ。

・・・さて、どうしようか。

辺りを見渡す。

・・・結構荒れてるね。

ま、俺が車とかを空中に大量に作り出したりしたのが原因なんだけどね。

いや、今はそんな事はいいか。

どうしようか、触れたらアウトとか・・・

・・・ん？

確か、「残りの寿命を強制的に切り捨てる」って言ったよな？
それはつまり・・・あたりまえのことだけど、「寿命がある」ってのが条件なはず。

言い換えれば、「いつかは死ぬ生き物」にしか効果がないってこと・・・だよな？

なら・・・

いやでも、確証がないから失敗したら怖いなあ・・・最悪死ぬかもしれないし。

でもこのままでもそのうちゼロに殺されるだろうし。

それ以上に、この一戦にそこまでする意味があるのかって感じだけど、この方法以外にないんだから仕方ないよね。

【どっこいしょっと！案外簡単にのぼれちゃったよ・・・っと！】

ゼロがトラックの上にのぼり、飛び降りて俺に近づく。

やるしかない・・・かな。

ただ、どうなるかわからないからあんまりしたくなかったんだけどね。

【どうしたんだい？この『即死の結末』デッドエンドに対抗する術なんてあるわけじゃないじゃないか】

「いや、あるんだよな」

ただ、上手くいくかはわからない。

でもまあ・・・漫画とかでもこういうときって大体上手くいってるし、大丈夫でしょ。

・・・

・・・

・・・よし。

「よし、かかってこいよ」

【余裕だねえ、そんなに死にたいのかい？】

「自信があるんだよ。お前の『即死の結末』デッドエンドが俺には効果がないっ

ていう自信が」

半分は嘘だけだね。

【でもまだ四季おまえはなにもしないよね？】

「そう見えるか？」

【え？】

「お前を足止めしてる間に俺がなにもしないと思ったか？」

「俺の能力自体は一つだが——」

「それによってできることなんて、山ほどあるんだよ」

44話 できることなんて（後書き）

こんにちは、最近散髪をしたアヲネギです。

夏なのでかなり短く切りました。

正直落ち着きませんw

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

45話 嫌になるね

「それによってできることなんて、山ほどあるんだよ」

【へえ・・・それじゃ、ちょっとためさせてもらおうかな!】

ゼロが俺の頭を掴もうと突っ込んでくるが、俺はあえて動かずにそれを受け止める。

そして、ゼロの腕が俺の頭を掴む。

・・・が、なにも起こらない。

【えっ!? あ、あれ!?!】

これはゼロも予想できなかったんだろうね。
ゼロが慌てて手をはなす。

【な、何をしたんだ!?!】

「取り乱すなよ、らしくないな」

正直、ゼロが『デッドエンド即死の結末』の効果を説明してくれなかったらこんな方法は思いつかなかっただろうね。

「デッドエンドお前のソレは残りの寿命を切り捨ててるんだろ? それさえ分かっ
れば、俺の能力なら対抗なんて簡単にできる」

【何をしたかを聞いているんだ!】

「つまり、俺の寿命をなかったことにした」

【そんな馬鹿な・・・ありえない！】

ゼロの纏っていた黒い霧が消えていく。

ていうかコイツってこんなに取り乱すんだな。

「ありえる。実際に俺には効果がなかっただろ？」

当然だけど、寿命のなくなった俺に、寿命を切り捨てるなんて能力は効果がない。

もともと存在しないものを切り捨てるなんて不可能だ。

その代わりに老いて死ぬことはできなくなったけどね。

寿命がない以上、老いることもない。

もったも、戦闘では死ぬけどね。

さすがに頭を潰されたりしたら死ぬ。

まあ、偽神レプリカがあればそんな状況にはならないだろうけど。

不完全な不老不死ってやつかな。

【・・・リンちゃん、引き上げよう。『即死デッドエンドの結末』が効かないなら勝ち目がない】

「はい、わかりました」

ん？

引き上げる感じで話が進んでる？

ま、そのほうが俺も楽でいいかな〜とか思ってたりするんだけどね。

【あーあ、柄にもなく取り乱しちゃったよ。自分が嫌になるね】

ゼロが引き返していく。

「待てよ」

【何？俺は早く帰りたいんだ】

既に取り乱してる様子はないゼロが振り返らずに言う。

「お前の目的は何？」

【俺はね、世界を平等にしたいんだよ】

それだけ言うと、ゼロ達は歩いて街から出て行った。

世界を平等・・・ちよつと意味分からん。

なんか答えになってない気がするけどまあいいか。

ていうかトラックとか落としまくったせいで街がめちゃくちゃだ・
・

建物とか避けて落としたけど、それでも地面は大変な事になってる。

人とか死んだりしてないよね？

「あー・・・疲れた、しんど！」

そう言っただけでその場に仰向けになる。

すると、俺を見下ろすように誰かが立っていた。

「・・・誰？」

「動かないでもらえますか」

その人はそういうと、右腕を俺の頭に向ける。
なんか持つてるっぽいけど、逆光で見えん。

ていうかまず名乗れ！

声からして男っぽいけど。

とりあえず、視界ジャックでコイツの視界をジャックする。

・・・マジかい。

「・・・珍しい物もってるね。ていうかソレを俺に向けてどうすんの？今から俺殺されちゃう感じ？白昼堂々と街の中で殺人とかしちゃう感じ？」

コイツが右手に持っていたのは拳銃だった。

・・・どこで手に入れたんだか。

ていうか寿命がなくなった俺でも拳銃じゃさすがに死ぬよ。

「いえいえ、こうしたほうが素直に我々に協力してくれるでしょうから」

「銃を頭に向けなくても、見せてくれるだけで十分俺の興味を引けたと思うけどね」

「おや、そうでしたか。てっきり人間は皆、これを持っていると思っ
てましたから」

「いやいや、そんな世界は危なすぎて外歩けんわ」

普通に話してるけど、さっきと姿勢がまったく変わってないんだよね。

俺は仰向けに寝転がってて、コイツは俺の頭に銃口を向けてる。

「で、どうなんです？」

「銃を突きつけてる時点で俺に拒否権とかあんの？」

「ありませんよ」

「ですよー。協力するからとりあえず銃をしまつて」

アクセラレータ

一方通行とか使えば普通に起き上がれたけど、ちょっとコイツに興味あるし大人しくしとこうかな。

「よいしょ・・・っと」

立ち上がり、服についた砂を払う。

「それでは、場所を移しましょう」

「こういう場所じゃ言えないようなちよつとヤバイ系の話？」

「ええ、まあそんなところです」

——☆——

「ふむ・・・ここなら大丈夫でしょう」

しばらく歩き、街のはずれの廃墟に着いた。

・・・白い粉の密輸とかじゃないよね？

「で、協力って何すりゃいいの？」

「簡単に言ってしまうえば人探しです」

人探し？

それならあの場所で話しても問題なかったんじゃない？

「我々の元から逃げた四名を捕らえてほしいんですよ」

「どんなヤツ？」

「全員に共通してるのは、貴方と同じ黒い髪に黒い目・・・まあ、早い話が人間とよく似た姿をしています」

なるほどね。

それは確かにさっきの場所じゃ言えんわな。

「だいたいの居場所は分かってる感じ？」

「分かっているれば苦労はしませんよ。いえ、分かっているても苦労はしますけど」

「何故に？」

「逃げた四人は姿だけが人間に似ているわけではありません」

姿だけじゃないとなると・・・

「能力とか？」

「ええ、その通りです」

45話 嫌になるね（後書き）

こんにちは、勢いあまって本日二回目のアヲネギです。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

46話 人間とよく似た

——ゼロサイド——

「ゼロさんの目的は世界を平等にすることなんですか？」

【そうだよ】

「詳しく話してもらってもいいですか？」

【言葉通りの意味だよ】

【俺は世界を本当の意味で平等にするつもりだよ】

【何もかもを平等にするんだ】

「・・・」

【幸せな奴をそれなりに不幸にして不幸な奴をそれなりに幸せにすれば、差はなくなるでしょ？】

【幸せや不幸だけじゃない】

【男も女も、地位も、何もかもだよ】

「不幸な人を幸せにするだけじゃダメなのですか？」

【ダメだよ】

【幸せな奴は不幸な奴の気持ちを身をもって理解するべきだ】

【不幸な奴も同じく、ね】

「では、これからどうするのですか？」

【そうだなあ・・・俺の目的に協力してくれそうな人を探そうか】

【前に殺した盗賊の生き残りとかいたらいいんだけどなあ】

【彼らなら間違いなく協力してくれるだろうしね】

【よし、鈴ちゃん】

「なんですか？」

【ちょっと、あの盗賊のいた場所に向かおうか】

「わかりました」

——紅葉サイド——

四季達が帰った次の日の朝。

「・・・おい」

「すー・・・すー・・・」

俺が起きて、砦の外に出てみると知らない奴が寝ていた。
黒い服を着た、黒く長い髪の女だ。
服の左肩には白い文字で『21』と書かれている。

「おい」

さっきよりも少し大きな声で起こしてみる。

「っ！！」

起きた瞬間、俺と距離をとって、持っていた刀を構える。

「・・・お前、私を追ってきたのか？」

刀を構えたまま黒髪の女が言う。

「いや、お前がここで寝てたのを偶然見かけただけだ」

「本当か？」

「俺が追っている側ならわざわざ起したりしねえよ」

「そうか・・・それも、そうだな」

黒髪の女は刀を下ろし、安心したように言った。

「お前、なんでこんなところで寝てたんだ？」

「私を追っている者から逃げている、ここなら大丈夫だろうと思っ
て寝た。すまなかったな」

「気にするな」

「・・・お前、名前は？」

「先に名乗るのが礼儀だろ？」

「私には・・・ないんだ」

「は？」

「名前がないんだ」

なんだコイツ。

記憶喪失か何かか？

——☆——

「能力とか？」

「ええ、その通りです」

もはや完全に人間だと思っただけ・・・

「・・・その四人の名前と能力は？」

「No. 3 『バッドイーター悪食』、No. 9 『クリアガンナー無弾発砲』、No. 17 『ノーラ永命処
イラ理』、No. 21 『オリジナルハント生命狩獵』の四名です」

「ちょ、ちょっと待て！NO. って何？」

「細かい事はいいじゃないですか」

「……これ、ガチで危ない話じゃない？
今更ながら、引き受けて後悔してるよ。」

「ていうか全然よくねえ……細かくないし……」

「……まあいいや。」

「で、それは能力？名前？」

「両方です」

「どっちがどっちだかわからなかったんだけど……」

「どっちも何も、両方同じです。しいていうなら数字が名前で、『
バッドイーター』
悪食』などが能力名です。逃げた四名は、着ている服の左肩に数字
が書いてあるはずですよ」

「完全に人の名前じゃないよな……」

「てか服とか着替えてしまえばもうわからんでしょう。」

「で、どうやって探せばいいの？」

「それは任せます。ただし、一人だけでもいいので確実に捕まえて
ください。場合によっては殺してもかまいません」

・・・やっぱり、ヤバイ系の話だったか。

「やっぱ、やめたらダメ？」

俺がそういうと、男が銃を取り出し、構える。

「やめても構いませんが・・・わかってますよね？」

・・・なるほどね。

「冗談だって、ちゃんとやるから銃をおろして」

そういうながら俺は男に近寄り、銃の上に手を乗せて下げさせる。

「あと気になることがあるんだけど」

「なんででしょう？」

「俺がこれから探す予定の奴らって何者？」

「人間とよく似た別の生き物です」

「別の生き物って・・・」

「事実ですよ。もっと言えば——いえ、やめておきましょう」

何故に!？

「そこは教えてくれよ」

「言ってしまったえば、協力しなくなりそうですから」

あ、やっぱりヤバイ系の話なんやね。

あー嫌だ嫌だ。

もっと平和な事だったらよかったのになぁ・・・

状況によっては殺してもいいとかねえ

「あ、そうだ」

「まだ何か？」

「全員の能力とか、わかる範囲で教えてほしい」

相手の能力を知ってたほうが戦闘になったとき有利だしね。

「まずNo. 3の『悪食』バッドイーターですが、コレは「実体の無いモノ」を触れただけで自動的に吸収して自身の身体能力を高める能力です。具体的には魔法や魔力、あと活力ですね」

ああ、なるほどね。

触れたら元気が無くなるような奴かな？

「次にNo. 9『無弾発砲』クリアガンナーですが、コレは不可視の銃弾をノーモーションで全方位に放つことができる能力です。No. 9は、立っているだけで無敵に近い戦闘力を有していますので気をつけてください」

マジかい・・・

勝てるかちよつと不安になるぞ。

ま、負けることもないと思うけど。

「No. 17 『永命処理』^{ノーライフ}ですが、死なない能力です。正確には「命がない」ので、「生きている」や「死ぬ」などの概念がこの個体には存在しません」

「どうすればいい？」

「任せます」

「マジか」

「最後に、No. 21 『生命狩猟』^{オリジナルハント}ですが、コレは周囲の生物の体の自由を奪う能力です」

チートすぎるわ！

どうしろと！？

ま、聞いたところで「任せます」って言うんだろうね。

「うん、大体把握した」

あと全員強すぎ。

「では、頼みますよ」

「ただ、どこにいるのかわからんから時間かかると思う」

せめて居場所さえわかれば楽なんだけどなあ・・・

「左肩にNO. が書いてありますので、見かけたらすぐにわかると
思います」

いやもっと広い範囲でどこにいるかわからないんだけどね。
そもそもこの街にいるのかもわからんし・・・

ま、なんとかなるかな。

46話 人間とよく似た（後書き）

こんにちは、朝起きるのがどうしようもなく苦手なアヲネギです。

早起きしないとダメだって分かっていてもなかなか起きれないんですよね。

何かいい方法はないですかね？

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

47話 五十二種

「他には何もありますか？」

聞いておきたい事は他に何かあったかな・・・

うーん・・・

あ、そうだ。

「その拳銃はどこで手に入れたの？」

「コレですか？コレは人間の持っていた物を借りて、我々が研究し、量産したものですよ」

まじかい。

てか人間ってこの世界じゃ伝説になってるんじゃないかなかったっけ？
・・・ま、いいか。

「さっきから言ってる『我々』っていうのは？組織か何か？」

「ええ、その通りです」

組織名は・・・聞いてもどうせすぐ忘れるだろうからいいや。

「その組織の目的は？」

「言ってしまうえば、人間の研究です」

「人間の研究ねえ・・・具体的には？」

「言うのは構いませんが、絶対に我々に協力してくれますか？」

あー・・・

聞くと協力したくなるような研究してんのかな？

・・・まあ、最悪裏切ってもいいかな。

「おっけ、協力するよ。約束だ」

「わかりました」

一度深呼吸をして、話し始める。

「我々にとって、人間は魅力的すぎるのです。能力といい、技術といい、我々とはまったく違う方向性で発展を遂げている」

人間の俺からすれば魔法とかのほうがよほど魅力的だけだね。

「人間の使う道具は大昔からずっと研究してきました。それでもやはり、能力は謎が多い」

まあ、使っても謎な部分は多いからね。

「魔法は魔力を使い果たせば、魔力が回復するまでは使えません。しかし能力には限界がない。我々は、能力をどうにかして手に入れようと考えたんですよ」

え、能力って限界ないの？

・・・能力によると思うけどなあ

「そこで我々は人間を作ってみようと思い、合計52体の人間モドキを作りました。我々はこの52体の事を『五十二種』と呼びます」

そのまんまやんけ！

てか52体って多すぎない？

どうやって作ったのかも気になるけど。

「しかし彼らは完全な人間ではありません。当然、能力も完全なものではない。魔力を決まった方法でしか使うことができない、言ってしまうえば擬似的な能力です。」

てことは魔力を使い果たせばその擬似的な能力は使えなくなんのかな？

「そして彼らの能力の源は魔力ですが、彼らに魔法は使えません」

「決まった方法でしか魔力を使うことができないから？」

「その通りです。普通の人のようにいろんな種類の魔法を使ったりはできません。魔法に属さない方法で、魔力を使うことしかできません」

うーん・・・

つまり、なんだ、限りなく人間と似ている別の生き物って事かな？

「そして、彼らの内4人が我々の元から逃げ出したんです」

「それがさっき言ってた4人？」

「ええ、そうです」

「なるほどね」

「彼らの存在が世間に知られるのは避けたいんですよ」

ああ、だから殺してもいいって言ったのか。

「おっけ、大体理解できた」

「他に、何か気になる事がありますか？」

「あゝ・・・それじゃ、報酬は？」

「なんでも望むものを用意しましょう」

と言われてもなあ・・・

特にないんだよね。

大体のものなら能力で作れ出せるし。

「では、自分はしばらくこの街に滞在しますので、何か用があると
きは念話で呼んでください」
テレパシー

「おっけ。そんじゃ俺は戻るよ」

さて、めんどくさいことを引き受けてしまったけど、どうしようか。

とりあえず帰ろうかな。

朝からいろいろあって疲れたし、もう一回寝よう。

やっぱ散歩とかするもんじゃないね。

「ああ、一つ言い忘れていました」

「ん？」

「もしも裏切ったりするようなことがあれば・・・」

「あれば？」

「我々が全力で貴方を始末します」

「そりゃ怖い。裏切らないように気をつけるよ」

コイツの組織がどれだけすごいのか知らないけど、俺は誰が相手でも、どれだけ多くても負ける気はしないよ。

まあ、都合が悪くなったら適当に裏切ったりしても面白そうだしね。あえて裏切るのも悪くないかもね。

——紅葉サイド——

「名前がないんだ」

・・・記憶喪失か何か？

「無いって事はないだろ。今までなんて呼ばれてたんだよ」

「今まで・・・そうだな、No. 21 『オリジナルハント生命狩獵』と呼ばれていたよ」

「・・・変わったあだ名だな。」

ていうかNo. て何だ。

「私としてはあまりそう呼ばれたくないんだがな」

少しうつむき気味にコイツはそういった。
まあ、名前らしい名前ではないな。

「私は教えたぞ、君の名前を覚えてくれないだろうか？」

「紅葉だ」

「なんだか綺麗な名前だな」

「そういわれたのは初めてだ」

「そうなのか？」

「嘘ついてどうすんだよ」

ていうか「お前」って呼ばれてたのにいつの間にか「君」に変わっ

てるな。

・・・どうでもいいか。

「で、俺はお前の事をなんて呼べばいいんだ？」

「え？」

「あの名前で呼ばれたくないんだろ？なんかあだ名でも考えろよ」

「あだ名か・・・迷うな、どんなのがいいだろうか」

腕組みをしてやたら真剣そうに考える。

あだ名なんて適当でいいと思うんだが・・・

「そういえば、君も私と同じ髪の色をしてるな」

「急にだな」

「なんとなく気になったんだ。同じ黒色だって・・・あ」

「何だ？」

「あだ名を思いついたぞ。私はこれからクロと名乗るよ」

そんな単純なあだ名でいいのか。

もうちょっと思えたらいくらでも出てくると思うんだが・・・

なんか、ネコみみたいな名前だぞ。

「これからよろしくな、モミジ」

「ああ、よろしく……ってちょっと待て、これからって何だ？」

「いや、私はこれからしばらくはモミジと一緒に行動しようと思っ
たんだが……ダメか？」

「それは別にいいけど一つ質問に答えろ」

「ん？何だ？」

「お前は一体何者だ？」

黒い髪に黒い目、人間にしか見えないが、この世界に人間はいない。
俺と同じような方法でこの世界にきたのかと思ったが、コイツ……
クロが「同じ髪の色」と言っていた辺り、それもないだろう。

「……初めから話すとなれば、少し長くなるんだが……いいか
？」

「構わない」

47話 五十二種（後書き）

こんにちは、明日から夏休みのアヲネギです。

終業式が長すぎて倒れそうでした。

校長先生とかの話ってなんであんなに長いんですかね？

もはや校長先生自身も「これちょっと長すぎるな」って気付くレベルで長いときがありますよね。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

48話 俺は嬉しいよ

——四季サイド——

あれからゼロと戦った広場に戻った。

戻ったんだけど・・・

「シキ！これはなんなんだ！？どうやって動かすんだ？」

大勢の兵士がいた。

まあそこは分かるよ、あれだけ派手にやったんだし。

車とか電柱とか作り出して落としてたんだから結構デカイ音は響いてたはずだしね。

で。

なぜか姫であるはずのエリスまできて、トラックの運転席に乗ってる。

・・・

なんなんだろうね。

結構な高さからトラックを落としたから乗ることもできないくらいに大破してるとおもったんだけど、案外丈夫なんだね、トラックって。

あ、よくみたらほとんど壊れてるわ。

エリスの乗ってるトラックだけ、まだマシな壊れ方してる。

「あー・・・車は燃料がないと動かんよ」

「これがくるまなのか！？すごいな！シキの世界ではこんな大きな物が交通手段として用いられているんだな！」

なんか、テンション高い。

「おい！コレを城に持ち帰る！誰か手伝ってくれ！」

「いやそんなことしなくても作るから！トラックはとてつもなく重いから！」

それにトラックを運ぶのにはまた別の車とか必要になってくるし。

「む。それじゃあこのくるまはどうするんだ？」

そう言ってエリスがトラックから降りる。

「こうするんだよ」

オールワイクション
大嘘憑きを使い、俺が作り出した物とこの場所の被害をなかったことにする。

やっぱり便利だね大嘘憑きは！
オールワイクション

「きれいさっぱり何もかもなくなった・・・」

なんかエリスがっかりしてる。

まあ、オールマイクシオン大嘘憑きはそういう過負荷だからねえ・・・
すべてなかつたこと現実を虚構にして、なにもかもを台無しにする。

・・・いいね、圧倒的で。

「さっきの車は作るから元氣だせ」

「・・・約束だぞ。破るなよ」

「心配すんな、城でちゃんと作るから」

あと、ちよつと城にも用があるからね。

「城に戻るぞ。シキ！ついて来い！」

「あいよ。それとエリス、ちよつと頼みたい事があるんだけど」

「ん？なんだ？」

「あとで王様にあわせてほしい」

——紅葉サイド——

「とまあ、こんな感じだ」

「五十二種、か・・・」

クロの事をいろいろ聞いた。

クロはとある組織で作られた「人間とよく似た別の生き物」で、それはクロを含めて合計52人もいること。

それらは『五十二種』と呼ばれていて全員が擬似的な能力を所持していること。

そしてクロはその組織から逃げていること。

・・・漫画みたいな展開だな。

「君は私の事をなんとも思わないのか？」

「どういう意味だ？」

「私は人の形をした化け物だぞ？ 気味が悪いと思わないのか？」

「それこそどういう意味だ？」

「え？」

「こうやって普通に言葉が交わせる。何も気味が悪い所なんて無いだろ」

それに外見も普通の人間となにも変わらない。
人間の知り合いが増えたような感覚だ。

「・・・優しいんだな」

クロが少し俯いてそういう。

「少なくとも、初対面のヤツを気味が悪いと思った事は一度しかないな」

【うーん。それはもしかして俺の事かな？】

後ろから、四季と同じ声がした。

反射的に振り返る。

【生きてたんだね紅葉くん！俺は嬉しいよ！】

ゼロとその隣にはもう一人、俺を殺したヤツがいた。

「そんなはずはありません。確実に息の根を止めたはずです」

「・・・何の用だ？仕留め損ねた俺を殺しにきたか？」

【何を言ってるんだい？温厚な俺が殺すとか物騒な事をするわけないじゃないか。戦闘狂じゃあるまいし】

いろいろ疑問に思うところはあるが、今その辺はどうでもいいな。

「なら何の用だよ」

【誰も紅葉くんに用があるなんて言っていないよ、少しだけさっきの話が聞こえてね。俺はそっち子に用があるんだ】

ゼロがクロに笑顔で近寄る。

【さっきの話を聞く限りだと、君はとある組織から逃げているんだってね？】

「そうだが・・・」

【なら何で、君だけがここにいるのかな？】

「確かにそれは気になるな。どういう事なんだ？」

四人で逃げてきて、クロだけがここにいるのは少し妙だ。

四人でまとまって逃げていたのなら、四人ともこの場所にいるはず。

「・・・四人で逃げていたら組織の者に見つかってしまったんだ。このままだと全員が捕まると思って、私だけ応戦したら、他の三人とはぐれた」

【他の人達は戦わなかったの？ひどいなあ】

ゼロがわざとらしく驚く。

「四人の中だと私が一番戦えたからな・・・仕方ないさ」

またすこし俯きながらクロが言う。

「彼らはまだ捕まっていないだろうか・・・」

【ははっ！君は不幸だね】

「不幸・・・なのか？」

【一緒に逃げてきた仲間とはぐれた挙句、偶然にも四人の中で「一番戦えるってだけ」で追っ手の相手をしてしまうなんて不幸の以外のなものでもないよ】

ゼロが一度深呼吸をする。

【だから君は、俺の目的のためにも不幸になった分だけ幸せにならないといけないよ】

・・・は？

【ま、簡単に言えば君の仲間を探してあげるよって事さ】

48話 俺は嬉しいよ（後書き）

こんにちは、8月が誕生日のアヲネギです。

ちなみに妹は7月が誕生日でした。

妹は16歳になったみたいです。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

49話 虚無皇帝

——四季サイド——

今、俺とエリスは城の中庭にいる。

あと一人いるんだけど・・・

「久しぶりだな、人間」

・・・なんか、もう一人いる。

俺の事知ってるっぽいけど、まったく覚えてないわ。

「お前、誰だっけ？」

「・・・ロルスだ」

「・・・・・・ああ！はいはい！ロルスね！名前だけでてこなかったよ」

完全に顔すら忘れてたけどね。

「名前だけなら顔をみて「誰だっけ」とは聞かんだろ。せめて「名前なんだっけ」だろ」

なんか言ってるけどよく聞こえなかったからスルーしよう。

「それじゃあシキ、この辺にさっきのヤツを作ってくれ」

「あいよ」

まあ、トラックを作るっていう約束だったしね。
ちなみに雪乃とレイラの二人だけど、今日は街の観光をしてるらしい。

「そんなじゃ、作るよ」

中庭に中心あたりに光が集まって、トラックになる。
やっぱり物を作るって便利だね。

「おお！さすがだぞシキ！微妙に形が違うがそこはまあいいだろう」
「すごいな、人間はこんな事もできるのか」

毎回適当に想像したのを作ってるからね。
だから毎回形が違うのは仕方ないよ。

「ところで、コレを何に使うの？」

ちょっと気になったんで聞いてみた。
トラックの使い道なんて知れてるけど、それは向こうの世界での使い方を知ってての事だからなあ

「秘密基地だ！」

「・・・え？」

ちょっと何言ってるかわからん。

秘密基地ってもしかしてアレか？

小学生の頃によく作ったアレの事を言ってるのか？

・・・予想外すぎるわ。

「この、後ろの四角の部分の中は空洞になってるだろ？ここに私の秘密基地を作る！」

「うん、まあ、よくわからんけど頑張って」

「ちなみに今回、ここにロルスを呼んだのは荷物運びを手伝ってもらうためだ！」

あ、エリスが呼んだのか。

「とりあえず、そろそろ王様に会わせて」

「そういえばそういう約束だったな。いいぞ、ついて来い」

———☆———

あれから五分ほど歩いて、謁見の間についた。

ちなみにエリス達（あと一人は名前忘れた）にはちよつと席をはずしてもらってる。

というか王様以外の人には席をはずしてもらった。

「久しぶりだな、シキ」

「久しぶりっすね、王様」

今日はなんかよく「久しぶり」って言われる気がする。

まあ、そこは別にいいんだよ。

ていうか王様が俺の名前覚えてたのがちょっとびっくりだわ。

「で、何の用だ？」

「簡単に言いますと、どっか適当な家を俺にくれませんか？」

お金を稼ぐよりもこうしたほうが間違いなく早いよね。

「もちろんタダでもらおうとは思ってないっすよ？」

「どういう意味だ？」

「金の代わりに、俺のいた世界の日用品から不老不死まで、何か一つと交換でどうっすか？」

まあ、王様だしお金なんていくらでももってるだろうしね。

「あ、それか俺にできることならなんでもするっていうのでもいいですし、それか両方でもぜんぜんいいっすよ」

「……人を不老不死にする方法を、シキは知っておるのか？」

あ、やっぱ不老不死か。

「寿命がなくなって、結果的に老いて死ぬことがなくなるだけなん
で刺されたりしたら死にますけどね」

「・・・・・・・・」

おお、悩んでる悩んでる。

「いや、不老不死はやめておこう。それより、シキに頼みたいこと
がある」

「なんすか？」

「人間の兵器を何か一つくれないか？」

「あー・・・・・・・・いいですよ。今からでもいいっすか？」

「大丈夫だ、問題ない」

人間の兵器・・・拳銃でいいかな。

というか、拳銃しか作れないから選択肢とかないんだけどね。

拳銃の実物はついさっき見たし触ったし、もう作れるよ。

ていうか王様なんでそのセリフ知ってるんだ。

まさか異世界まで知れ渡ってるとは・・・

とりあえず、拳銃を能力で作って王様に渡す。

「これが、人間の兵器か？」

「そうっすよ」

それから簡単に拳銃の使い方を王様に説明した。

説明って言っても、リロードの仕方とか引き金を引いたら弾が撃てるとかその程度の事だけだ。

というかエアガンで得た知識を王様に教えたただけなんだけどね。

「ここを引けば撃てるのか・・・ふむ、感謝するぞ」

なんか王様嬉しそうだ。

拳銃なんかで何するつもりなんだろうね。

「じゃ、家の方はよろしくおねがいます」

そう言って、俺は謁見の間から出て適当に廊下を歩く。

うーん、これからどうしようかな。

宿にもどるのも何かなあ、まだ昼前だし。

・・・エリスの様子でも見にいこうかな。

まだ中庭にいらるといいんだけど、いるかな？

まあ中庭にいればその辺はわかるよね。

『今ちよつといい？』

おお、咲良か。

どした、何か用？

『あの後、もう一人の君と接触した？』

あの後？

『私と会った後の事。もう一人の君と接触した？』

なんか浮気した彼氏を問い詰める彼女みたいな言い方やな。

『なっ！？か、彼女？私が君の？』

いやそこまでは言っていないけどさ。

『うん、ま、まあわかってたけどね』

で、何だっけ？

『・・・私と会った後にもう一人の君と何か会った？』

あー、生死をかけたじゃれあいならあったかな。

『要するに戦ったって事だよね？』

そうとも言おうよ。

『・・・多分その時からだと思うんだけど、君はもう一人の君に
寿命とか消されたりした？』

寿命は自分でなかったことにしたよ。

そうでもないゼロに負けそうだったからね。

『あ、君が自分でやったの？』

うん、俺が自分でやったよ。

あ、ちよつと聞きたい事があるんだけど。

『何？』

俺の元々持ってた能力ってなんだったかわかる？

前に咲良が「『不幸な結末^{バッドエンド}』なんて能力は聞いたことない」って言うってたからもしかしたら違ったりすんのかなって思った。

『うん、確かに君の元々の能力は『不幸な結末^{バッドエンド}』じゃないよ』

あ、違うのか。

なら元々の能力はなんだったの？

『君の元々の能力は『虚無皇帝^{エンプティ・エンペラー}』っていう能力だよ』

49話 虚無皇帝（後書き）

こんにちは、一番好きな季節は夏のアヲネギです。

夏は好きでも暑いのは苦手なんですけどねw

誤字脱字、分かりにくいところがあったら教えてください

50話 俺が人間だ

『君の元々の能力は『エンブティ・エンペラー虚無皇帝』っていう能力だよ』

エンブティ・エンペラー
虚無皇帝？

『うん。ありとあらゆるものを無にすることができて、無に近づけることもできる能力』

うーん……

もうちょい詳しく教えて。

あ、わかりやすくてね。

『無にすることができるのは生き物以外の物質だけで、無に近づける事ができるのは生き物も含めた全てのもの。もちろん物質以外のものもだよ』

……よくわからん。

具体的には？

『人間の視力を無に近づけたらどうなると思う？』

……見えなくなるんじゃないの？

『そう。無に近づけるっていうのはそういうこと』

なら無にするっていうのは完全に消すって事？

『うん、敵の武器とかを消すことができるの』

強いなあ・・・

ゼロの能力が虚無皇帝じゃなくてよかったよ。
エンブテイ・エンペラー

・・・不幸な結末でも十分強いけどさ。
バッドエンド

あれ？

ゼロの能力が不幸な結末なら、虚無皇帝は？
バッドエンド
エンブテイ・エンペラー

俺の能力は偽神になってるわけだから、虚無皇帝ははじき出されて
どうなったの？
エンブテイ・エンペラー

『それはわからない』

ま、いいか。

そのうちわかるでしょ。

わからなかったら知らんけど。

別に知ってないとヤバって事でもなさそうだし。

『前から思ってたんだけどさ』

何？

告白とかされても俺どうしたらいいか分からんよ？

『こ、告白じゃないよ！』

冗談だよ。

で、何？

『・・・君って随分と樂觀的だね』

あ、やっぱそう見える？

結構いろんな人に言われるんだよねー、これでもいろいろ考え事とかしてるんだけどなあ・・・

『別に何も考えてないように見えるとは言っていないよ？』

いやわかってるよ、大丈夫大丈夫。

ただ、似たような事をよく言われるからなあ
何も考えてなさそうとか、頭悪そうとか。

『え、あ、いや！そういうつもりで言ったんじゃないだよ？私は君のそういう所好きだし・・・』

え、マジ？

『う、うん』

それは初めて言われたなあ・・・

てか変わってるな咲良は。

『な、何で？』

何でって言われても・・・

樂觀的な所が好きって結構変わってると思うよ、俺は。

あ、もしかしてフラグ立った？

『立ってない！』

あら残念。

『もう・・・それじゃ、私これから出かけるから』

出かけるってどこに？

『コンビニだよ』

あ、了解。

・・・いやあ、しかし咲良も結構かわいいところあるんだな。
結構面白い反応するしね。

『聞こえてるよ！』

うわ恥ずかしっ！

「いいからはやくコンビニ行けし！」

あ、声に出しちゃったよ。

近くの使用人とか兵士とかやたらこっち見てるし。

『今から家を出るの！』

あー・・・了解。

「おい、アイツなんか一人で言ってるぞ」

「アイツ・・・このまえ闘技場でボコボコにされてたヤツじゃないのか？」

その兵士二人！
聞こえてるんだよ！

って、こっちももうすぐ中庭につくわ。

『はぁ・・・それじゃ、またね』

あいよ。

さて、エリスはまだいんのかな？

・・・いた。

ロルスと一緒にタンスを運んでる。

俺も暇だし手伝おうかな。

「おい！エリスー！俺もなんか手伝うぞー！」

「これで最後だぞー！」

あら、マジですか。

しかしトラックの中にタンスを運ぶとは・・・
エリス、トラックに住む気じゃないよな？

「おい、トラックに住む気じゃないよn——」

言い終わる前に、俺の横の壁が爆発した。

いまさらだけど、中庭の四方は結構高い壁に囲まれてる。

・・・囲まれてた、だね。

てかなんで爆発した？

砂埃がすごい舞ってるんだけど。

もう周りが見えないレベルで舞ってるんだけど。

いやそんなことより・・・

「エリス！大丈夫か！？」

・・・返事なし。

代わりに、足元に何かがぶつかった。

・・・エリスだった。

気絶してるっぽいな。

何があったし。

とりあえず安全なところにエリスを運ばないと。

「ん？まだ誰かいんの？」

奥の方から声がした。

「いるけどちよつとまって、気絶してる友人を安全な所に運ぶから」

「友人ってさっきそっちに私が投げた子だね？」

「え、何？お前がやったの？」

「うん！私がやったよ！魔力を根こそぎ食べたんだ！」

よし、先にコイツをフルボッコにしよう。

女っぽいけど別にその辺は気にしない。

女でも全然平気で殴っちゃう下衆野郎ですよ俺は。

「砂埃をなかったことにする」

まずは大嘘憑きで砂埃をなかったことにする。
オールマイクシオン

これで敵の姿は視認できる。

まあ、敵は女でした。

あと何でか知らんけどコイツから白い光の粒子が絶えず溢れ出てる。

「あれ？砂埃なくなっちゃった？」

次は瞬間移動でコイツの背後に移動して、一方通行を使^{アクセラレータ}って殴……
れない、避けられたよチクショウ。

「あははっ！ダメダメ、今の私はすごい身体能力高いんだよ？」

あー、コイツはアレか？

例の組織から逃げた四人の内一人か？

「お前アレか？『バッドイーター悪食』か？」

「あれ？私の事知ってんの？」

「ナンバーまでは覚えてないけどね」

「ま、何でもいいけどねー。私は自分のすべきことをするだけだよ！」

そう言うのと、バッドイーター悪食の姿が消える。

「君も危険そうだし、やっちゃおっかな！」

そう聞こえた瞬間、バッドイーター顔を悪食に思い切り殴られ、俺は飛ばされた。

「さすがに痛いぞ。あと何か眩暈がする」

ま、殴られた瞬間にオールフィクション大嘘憑きでダメージをなかったことにしてるんだけどね。

・・・アクセラレータ一方通行を解除するんじゃないかな。

確かコイツは触れたものの魔力とか活力を吸収するんだっけ？

なら今の一撃で活力をとられたのかな？

まあ、多分触れてる間だけ吸収するんだろうね。

「傷が治るのがすごくはやいんだね！君は何者なのかな？」

しかし身体能力を上げる能力か。
なかなか単純でわかりやすくていいね。

・・・ところで、俺の能力は機械の機能を使用する事は可能なのかな？

あまりに無茶なものじゃない限り、できないこともないよな。

・・・よし。

「・・・人間だ」

「え？よく聞こえなかったからもう一回言って！」

「俺が人間だ」

「そうか！君は人間だったのか！」

さあ、一度は大声で言ってみたい単語を大声で言おうかな。

それに俺なら、言うだけじゃなく使用することが可能かもしれないしね。

「トランザム！」

50話 俺が人間だ（後書き）

こんにちは、PCを買い換えたアヲネギです。
いままでノートだったんですけど、デスクトップにしました。
軽いPCはいいですね。

TRANZAMについては次回説明します。

というか人間がTRANZAMしちゃっているのかどうか微妙な所ですが四季くんですから別にいいですよね。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

51話 同じ弱さ

「トランザム！」

そう言うのと、俺の体が赤く発光して、背中から水色とも緑色とも言える色の光の粒子・・・GN粒子だね。

背中からGN粒子が溢れ出す。

やっぱり機械の機能でもできんのね俺は。

『トランザムシステム』はガンダム00に登場する技・・・技と言うか機能で、使用した機体は一定時間、機体のスペックが約三倍になる。

つまり、俺自身の性能が約三倍になってるって事かな。

「わあ！背中から出てる光がすごく綺麗だね！私の真似かな？」

「そんなところだよ」

さて、時間も限られてるし早めに決着をつけねば。

釘バットを作り出し、瞬間移動を使って、バッドイーター悪食の背後をとる。

「おおっ！速いねえ！」

「制限時間があるからな、急いでるんだよ！」

バッドイーター
悪食の頭を釘バットで殴る。
釘バットが折れる。

・・・え？

いやいやちよつと待て、おかしいぞ。

なんでやねん。

コイツどんだけ頑丈やねん。

「痛いなあ！」

バッドイーター
そう言いながら悪食は回し蹴りを俺の顔めがけて放つ。

・・・が。

当たる寸前で俺は地面を蹴り、上に向かって飛び、空中に止まる。
そういえばGN粒子があれば空飛べるんだよね。

「おお！はっやいねえ！ていうか空飛べたの？」

「見ての通りとしか言えないなあ」

さて、こっからどうしようか。

トランザムは限界時間になると機体のスペックが大幅にダウンする。
つまり、トランザムが終わると俺はめっちゃくちや弱くなる。

それまでにどうにかしたいね。

コイツに引き返してもらうか、止めを刺しちゃうか。

・・・さすがに殺っちゃうのはマズいよね。

ちなみに、こっちの世界にきてから俺はいろんな人と戦ってきたけど、いつかの吸魂鬼^{ソウルイーター}以外は殺した事ないよ。

俺の記憶が正しければの話だけどね！

うん、やっぱりどうにかして引き返してもらうようにがんばろうかな。

「とりあえず、ひれ伏せ^{ヒレフセ}」

「うわっ！あれ？体が動かないよ？」

よし、いい感じ。

まずは『言葉の重み』で動きを封じて、死なない程度の大技を放てば大体の人は逃げるよね。

「天光満つる所に我は在り」

これくらいしかとっさに思いつかないなあ。

俺は呪文を詠唱しながら、ゆっくりと地面に降りる。

「何言ってるの？」

何か言ってるけど気にしない。

「黄泉の門開く所に汝在り」

呪文覚えといてよかったー。

まさかマジで使う日がこようとは。

「ねえねえ！何するの？無視はダメだよー！」

「出でよ、神の雷！」

ていうかコレで死なんよね？

ま、いまさら遅いか。

「インディグネーション！」

よし、言い切った！

悪食を中心バッドイーターに魔法陣のようなものが展開され、悪食の頭上バッドイーターに光が集まる。

「あ、コレってもしかして私はピンチなのかな！？」

「いや、どうだろうね。まあ、この状態トランザムで放ったから多分死ぬけど、運がよかったら生きてるかもね」

そういう終わるとほぼ同時に、悪食の頭上バッドイーターの光から雷が無数に落ちる。

これ生きてんのかな。

普通なら即死レベルの量の雷が落ちたけど。

・・・あ、トランザムが終わった。

おお・・・力が入らん。

やばいやばい、立ってるのがやつとだぞ。

「あれ？なんで攻撃した君が弱ってるのかな？」

「そういうお前はなんで元気なんだよ・・・」

「雷に当たる直前に体が動くようになって移動したんだよー！」

マジかよ。

移動速すぎじゃね？

「うーん。でもアレは当たったら危なかっただろうなー！それじゃ、反撃開始だよ！」

ヤバイ。

かなりヤバイぞこの状況は。

「えいっ！」

「かはっ！」

悪食が俺の腹を蹴る。
バッドディーター

しかし力強いなあコイツ。

・・・肋骨が結構折れたよ。

ヤバイヤバイどうしよう。

今の俺と悪食^{バッドイーター}じゃ力の差がありすぎて勝てん。

てか俺、現在進行形でかなりボコられてるんだけど大丈夫だろうか。

もう右腕とかぐにゃぐちゃで血だらけなんだが。

腹はもう内臓までヤバイ事になってそうだ。

「あれ？死んじやった？」

「まだ・・・ギリギリ生きてるよ」

そういつてから俺はトラック・・・エリスの秘密基地の陰に瞬間移動して、トラックを背もたれにして座る。

どうしようか。

この状況だと助けが来てもおかしくないけど、来るならもっと早くに来てと思うし。

中庭の壁が爆破されたんだし、それを目撃してた兵士がいてもおかしくない。

そういえばロルスはどこ行っただろう。

・・・ダメだな。

助けとか期待して、来なかったら悲しいだけだ。

というかそれ以前に、これだけボコられてる姿を誰かに見られるのは恥ずかしい。

やっぱ自分でなんとかするべきだよなあ。

怪我してる部分は腹と右腕だけか。

バッドイーター
悪食が腹しか蹴って来なかったのは不幸中の幸いかな。

ちなみに右腕はバッドイーター悪食が腹を蹴ってくるのを防ぎ続けたらこうなった。

がんばれば歩けるな、それに左腕も動く。

・・・よし、どうにかなりそうだ。

まず、結構長めのマイナス一螺子を作り出す。

次に視界ジャックでバッドイーター悪食の視界をジャックする。

・・・がつりトラックの方みてるやん。

しかもこっちに向かって歩いてきてるっていう。

ま、その方が都合いいかな。

「見つけた！さあもう終わりだよ！」

「・・・ひれ伏せヒレフセ」

「うわっ！ま、また動けない！」

よし、うまくいったな。

「どっこいしょ・・・っと」

螺子を持って立ち上がり、バッドイーター悪食に近づく。

「うーん！どんなに頑張っても動けないよ！今度は何？」

「俺と・・・同じ弱さになってもらうぞ」

「え？」

バッドイーター悪食の背中に螺子を思い切り突き刺す。

・・・よし、ちゃんと貫通したね。

さて、トランザムの限界時間を迎えてかなり弱体化している俺がこの過負荷マイナスを使えばどうなるんだろうね。

「『却本作り』ブックメーカー」

51話 同じ弱さ（後書き）

こんにちは、今日から新学期のアヲネギです。
外は暑いですね、夏休み中寒いくらいの温度でクーラー使ってたから学校は辛かったです。

それでは今回出てきた能力の説明を・・・

トランザム…ガンダム00に出てくる機能。

インディグネーション…テイルズシリーズの呪文

却本作りは次回説明します。

なんか最近こんなのばっかですね、すいません。

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

52話 負けない

「『却本^{ブックメーカー}作り』」

螺^{バッドイーター}子が悪食^{バッドイーター}に刺さり、悪食^{バッドイーター}から溢れ出ていた白い粒子が消え去る。
代わりに悪食の髪の毛が白くなる。

「っ!?!」

却^{ブックメーカー}本^{プラス}作り、相手の強さを弱^{マイナス}さにする過^{マイナス}負荷で、螺^{バッドイーター}子で貫かれた相手の肉体も精神も技術も頭脳も才能も全て、俺と同じ弱さまで引き下げる。

ちなみに螺^{バッドイーター}子で貫かれてるけど肉体的なダメージは無いよ。
却^{ブックメーカー}本^{マイナス}作りはあくまで心を折る過^{マイナス}負荷だからね。

「痛^痛ってて・・・なかなかやってくれたな」

とりあえず、大嘘憑きで自分のダメージをなかったことにする。

「ふう・・・久しぶりのピンチだったよ」

そのまま、その場に座る。

「どうよ、俺^{いっばんじん}と同じレベルまで弱くなった気分は？」

「んー、あー・・・まあ、こんなもんじゃないの?」

マジで肉体面にダメージはないんだね。

ていうか螺子が貫通してるのに痛くないってスゴくない？
自分でもびっくりだわ。

「どうすんの、まだやんの？」

地面に螺子で打ち付けられてるバッドイーター悪食に聞く。

「んー、疲れたしもうやめよっか」

あ、やっぱ考え方とかも俺と似るんだね。

でもまあ・・・

ブックメーカー「却本作りの効果を肉体以外全てなかったことにする」

これで身体能力だけが俺と同じのはず。

考え方とかまで似ても別に意味ないね。
なにより面白くない。

で、結局ロルスはどこにいったんだろうか。

「珍しく弱ってるじゃないか、人間」

「ロルスお前今までどこに行ってたんだよ」

「さっきまでコイツの攻撃で気絶していた所だ」

バッドイーターそう言って、悪食を見る。

ああ・・・魔力か何かを吸収されたのかな？
エリスも同じか？

「ところで、コイツは何者だ？」

うーん。

正直に全部話すべき・・・じゃないよね。

「知らん、急に襲ってきた」

「人間！後ろだ！」

「え？」

ロルスにそう言われ、振り返った瞬間に腹に何かが当たって俺が倒れる。

「おお・・・少し見ない間にお前はずいぶん老けたな」

「いやあ、油断したというかなんというか。あと老けてない！」

あれか、悪食の仲間か？
バッドイーター

永命処理ノーライフが無弾発砲クリアガンナーか生命狩猟オリジナルハントの誰かな？
まあ、攻撃されたあたりからして無弾発砲クリアガンナーだろうね。

「何者だ！？」

ロルスが剣を構える。

ちょっと様子をみようかな、倒れたまま気絶したフリでもして。

「何者だって？そんなの・・・」

「っ!？」

ロルスの剣に何かがぶつかり、剣が折れる。

よし、助けるか。

「君らの敵だよ。それに剣一本で自分に勝とうなんて馬鹿とは思えんぞ」

「ならこんな武器はどうよ？」

チェーンソーを作り出し、無弾発砲クリアガンナの後ろに瞬間移動をする。

「出落ち乙!」

そういつてチェーンソーのエンジンを動かし、振り下ろす。

「背後からの攻撃か、悪くない・・・だが」

チェーンソーに何かが大量にぶつかり、チェーンソーがバラバラになる。

何かっていうか、見えない銃弾かな？

まあ本物の銃ほどの威力はないみたいだね。

代わりに銃弾そのものが人の拳ほどの大きさっぽい。

「悪いけど、自分は死角がないだけを取り柄だね。どこからの攻撃にも対応できるんだよ」

なんというか、めっちゃ落ち着いてるなこの人。

「これならどうだ！」

ロルスがいつか見た無数の小さな火の玉が相手を包囲し、一気に相手に向かって飛んでいく魔法を使うう。

・・・が

「全方位からの同時攻撃・・・それも意味がない」

相手、クリアガンナー無弾発砲は無傷。

「馬鹿な・・・」

「向かってくる火の玉全てに攻撃して打ち消せばこうなるさ」

コイツめっちゃくちゃ強いな。

まったく動かずにそんなことができるのかよ。

これは・・・戦闘しないで帰ってもらうほうがいいかな。

「さて、反撃したいところだが・・・残念ながら時間切れだ」

そういうとクリアガンナー無弾発砲は懷から小石を取り出し、上に向かって投げる。
するとその小石が強く光り出し、あたりが見えなくなる。

「くっ・・・目眩ましかっ！」

なんも見えねえ・・・

「人間！大丈夫か？」

「無傷ですがなにか？ていうかロルス、目は大丈夫なん？」

「問題ない。もう慣れた」

はやいなあ・・・

俺はまだ見えないのに。

「で、アイツらは？」

「いないな、もうどこかに行ったみたいだ」

あれか、さっきの光る小石は転送装置みたいなものか。

ま、とりあえず・・・

「中庭の被害を全て、なかったことにする」

これで壁も元にもどって、エリスもロルスもパクられた魔力は帰ってきたはず。

「な、なんだ？魔力が！？それに壁も！？」

「じゃ、エリスはもうすぐ起きるとおもうから後はまかせた」

「お前は どうするんだ？」

「もどって寝るよ、なんかいろいろ疲れた」

今日一日でいろんな事が起こりすぎてもうヤバイ。
さすがに疲れるよ。

まあ疲れても大嘘憑オールフイクションきでなかったことにすればいいんだけど、それはなんか違う気がする。
ていうか寝たい、とりあえず寝たい。

——紅葉サイド——

「・・・戻ってこねえな、アイツら」

「誰かに襲われたりしたんだろうか？」

あれから、ゼロとリンは「少し用事があるから一旦戻る」と言っ
て帰っていった。

それが二時間ほど前の事だ。

・・・どのくらいで戻ってくるとか聞いとくべきだったか？

まあ、アイツらの事を信用してたわけでもないけどな。

【やあ、遅くなってごめんね】

「すみません、遅くなりました」

「お前ら何してたんだ・・・」

二人の声が後ろからして振り返ると、そこには髪の毛が白くなったゼロがいた。

リンは特に変わってないが。

【リンちゃんに協力してもらって、オレの持つ本来の能力に戻したんだよ。バッドエンド 不幸な結末でもなく即死デッドエンドの結末でもない、オレの本来の能力に】

「髪の色が変わっているが、君は大丈夫なのか？」

【大丈夫だよ、髪の色は副作用的なものだからね】

何をしたらそうなるんだよ。

「ゼロさん、肝心の能力のほうはどうなんですか？」

【問題ないよ、この能力・・・エンブレティ・エンペラー 虚無皇帝なら誰にも負けない】

52話 負けない（後書き）

こんにちは、今日18歳になったアヲネギです。
これで夜も堂々とカラオケに行けますね。

それと今更ながら50話を超えてしまいました。

一体いつまで続くんでしょうね、自分でもわかりません。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

53話 かなわない夢は

——約1時間、ゼロサイド——

「この洞窟までもどってきたわけですが、なにをするつもりですか？」

【ちよつとね、俺の能力を元に戻すのを手伝ってほしいんだ】

「具体的にはなにをすればいいんですか？」

【リンちゃん的能力で俺の最悪の結末バッドエンドと即死の結末デッドエンドを一生使えないようにしてくれるだけでいいよ】

【四季あいつに最悪の結末の弱点もバレちゃったし、即死の結末デッドエンドもう通用しないからね】

「・・・本当にいいんですか？」

【遠慮せずにやって頂戴】

「・・・『貴方は一生、最悪の結末バッドエンドと即死の結末デッドエンドを使うことはできない』」

【っ・・・！】

「髪の色が・・・大丈夫ですか？」

【大丈夫だよ・・・ありがとう】

【この能力なら弱点も防ぎようもない】

【すべてを無^{ゼロ}にすることができこの能力なら・・・！】

——四季サイド——

「あー・・・」

やっぱ夕方に寝たりするもんじゃないね。
まさか夜中に起きるとは。

えー、現在深夜二時です。

俺が寝たのはだいたい夕方の4時ごろだったから、大体10時間くらい寝た事になるね。

もう雪乃とレイラは帰ってきてんのかな？
というかもこの時間じゃ寝てるか。

何しようかな。

・・・

・・・おーい咲良、起きてる？

『何？』

いや、暇だったからちよつと話そうかなと。

『君は本当に自由だね・・・』

まあね。

暇だしちょっと喋ろうよ。

『いいけど、何話すの？』

うーん・・・

特に無・・・あ、俺の能力^{レプリカ}について聞きたいことがあるんだよ。

『いま特に無いって言おうとしたよね？』

二種類の能力を同時に使うことはできるじゃん？

『スルーなんだ・・・』

二種類の能力を混ぜ合わせて一つの能力にして使うことはできるの？

『うーん、君の偽神^{レプリカ}は空想を操る能力だから、君ができると思ったことは大体できるんじゃない？』

マジか。

それは素晴らしいね。

そのうち使ってみようかな。

『ほかに『自分の考えた道具』とかもできるんじゃない？』

なんでもアリだなこの能力は・・・

『その方が君は好きなんじゃないの？』

まあねー

漫画とかゲームの能力がなんでも自由につかえて、おまけに道具だってなんでも作れるとかヤバイね。
それに自分の考えた物まで作れるとは・・・

「いいセンスだ」

『声に出てるよ』

あ、マジ？

『ん？ 誰か部屋の前にいるみたいだよ』

マジか。

ちょっと見てくるよ。

「初めましてだなあ！ガンダムウ！」

そういうながら部屋のドアをそっと開ける。

勢いよく開けたところだけど、夜中だからね。

「ちよっ・・・驚かさないでよ」

「君の存在に心奪われ・・・なんだ雪乃か、ガンダムかと思った」

「なんだとは何よ？ていうかガンダムなワケないでしょ」

まあ、そりゃそうか。

いや流石に本気でガンダムと思っていたワケではないよ？

「で、何か用？」

「なんでアタシがいることに気づいたのかも気になるけどそれよりもちよつと相談があるのよ」

「その辺は聞いてくれたら全然教えるけどね。ていうか相談って何？」

「・・・今日ね、レイラちゃんと街を観光してたのよ」

「ほほう、それで？」

「・・・ウザいわね、アンタ」

「今にはじまった事じゃないよ」

「まあ、それでね、街を観光してたら・・・」

「してたら？」

「・・・貴族の人に、パーティーに誘われたのよ」

「そうなんだ！すごいね！」

「いい加減にしないと殴るわよ」

「ごめんなさいもう二度としません許してください」

殴るとか怖いこと言わないでほしいね。

・・・俺が悪いんだけど。

「で、俺はそれを聞いてなんて言えがいいの？「よかったねー」って言ってほしかったわけじゃないんでしょ？」

「・・・一緒にきなさいよ。アタシとレイラちゃんだけじゃ不安なのよ」

不安って・・・

「別にパーティーなら物騒なことにはならんでしょ」

「いや・・・なにかあったら怖いじゃない」

「ま、面白そうだし全然行くよ」

「それじゃ、私はもう寝るわ。あ、パーティーは明日の夜らしいわよ」

「あいよ」

「あ、それともう一つ」

「ん?」

「今日の朝、街中に壊れた車とかいっぱいあって騒ぎになってたけど、アレをやったのってアンタよね？」

あ、見られてたのか。

まあ、結構長いこと放置してたからなあ・・・

ていうかあれだけ兵士が集まったら騒ぎにもなるか。

「もちろん俺だよ」

「・・・何してたの？」

「生死をかけたじゃれあいをちよつとね。それじゃ、俺はもう寝るよ」

そういつて俺はドアを閉める。

「・・・待って」

雪乃がドアノブを掴む。

「まだ何か？」

「誰と、戦ってたの？」

「いやいや雪乃ちゃん、俺は戦ってたとは一言も言っていないよ」

「・・・まあ、いいわ。それじゃ、おやすみ」

「あいよ」

そういつて俺は今度こそドアを閉める。

・・・ていうか雪乃は俺が誰と戦ってたのかを聞いてどうするつもりだったんだろう。

別に考えても仕方ないことだけどね。

それよりもパーティーは明日の夜か。

ていうかなにかあったら怖いって・・・

なんか雪乃がそんな事言うのは意外だなあ。

ていうか雪乃が怖いと思う事って何だろうか。

・・・まったく思い当たらん。

とりあえず寝るか。

別に眠くないけど寝るか。

この時間帯じゃ、特にすることもないしね。

・・・この時間に寝たら明日の昼には起きるかな。

あ、それともレイラあたりに起こされるかな？

まあ、どっちでもいいか。

——紅葉サイド——

「で、これからどうするんだ？」

クロの仲間を探すといっても、何のあてもない。
具体的にはなにをどうして探すのかもまったく決まってい
ない

「聞き込みをするというのはどうでしょうか？」

「無理だろうな、俺たちはこの世界じゃ伝説上の存在らしいから目
立ちすぎる」

【というか、君はなんで同類を探しているのかな？】

「それは私も気になっていました、なぜですか？」

「………」

クロが少し俯く。

「言いたくないなら、言わなくてもいいんだぞ」

「……ちゃんと話すぞ、大丈夫だ」

クロが深呼吸をして、咳払いをする。

「私が同類を探しているのは、ほかの三人を殺すためだ」

「……物騒だな」

「私には・・・ほかの方法が思いつかない」

「なぜ、殺す必要があるのですか？」

「彼らは、世界を支配しようとしている」

ゲームみたいな話だな。

その三人はラスボスカよ。

【夢が大きいのはいいことだけど、それはちよつと大きすぎるね。
かなわない夢は所詮、妄想でしかないって事を思い知らせてあげよ
うじゃないか】

53話 かなわない夢は（後書き）

こんにちは、特に毎日変わらないアヲネギです。

やっぱ平和が一番ですね。

好きなことやって暇になったら寝るような・・・
って完全にこれじゃダメになりますねw

誤字脱字、わかりにくいところがあれば教えてください。

54話 約一京

——四季サイド——

「シキさん！朝ですよ！」

レイラがドアを開けながらそう言う。

「起きてるよ」

実はあれからなかなか寝れなかったから結局起きてたんだよね。

「ていうか何で毎朝起こしにくるの？」

「だってシキさんは起こさないとずっと寝てるじゃないですか」

失礼な。

夕方には起きるよ。

もし起きなくても次の日の朝には確実に起きてるよ。

「それに朝になったら起きるのが普通ですよ！」

「わかってないなあレイラは。何も予定がないなら寝れるだけねるもんだよ」

「それよりシキさん！ユキノさんから聞きましたか！？」

「まさか流されるとは思わなかったよ。ていうか何を？」

多分パーティーの件だろうね。
まあ違ってたら困るから一応聞くけど。

「実はですね、昨日街を観光してたら貴族の方からパーティーに誘われたんですよ！」

ほらね、思ったとおりだ。

「ああそれなら聞いたよ。俺も行くことになってるよ」

「シキさんも来るんですか！？一緒に楽しみましょうね！」

朝からテンション高いなあレイラは。

「ていうかさ」

「ん？どうしたんですか？」

「パーティーは夜なんだから別に今起こしにこなくてもよかったんじゃない？」

「シキさん」

「ん？」

「朝起きるのが普通ですよ？」

「あ、はい。そうですね」

真顔で言われるとけっこう傷つくな・・・

「それじゃ、ユキノさんと呼んでから朝食食べてエリスさんの所にいきましよう！」

「あー、いや。俺は今日はいかないよ」

「ダメです！一緒に行きましよう！」

そういうながらレイラが俺の腕をつかんで引っ張る。

「いやマジで昨日の今日で昼間は外に出たくないっていう・・・」

「ダメです！」

えー・・・

そんなこんなで雪乃とレイラと俺で朝食を食べてからエリスの所に向かった。

———☆———

「おい、アイツらが噂の人間じゃね？」

「本当に髪が黒いんだな・・・」

「それに昨日あった街中に鉄の塊が大量にあった事件はあの人間がやっただけぞ」

・・・外を歩くとこういうこと言われるから嫌だったんだよね。

「・・・やっぱ昨日の事件はアンタだったのね」

「ついカッとなってやった、誰でもよかった、今はマジで後悔している」

「シキさんすごいですね！有名人ですよ！」

「嬉しくないよ！犯罪者みたいな有名人になっても微塵も嬉しくないよ！」

城につくまでこんなことが続くのかと思うと死にたくなるね。

・・・死んでも大嘘憑オールフイクションきで帰ってくるから死ねないけど。

あーあ、なんで昨日はあんなに派手に戦ったんだろう・・・

冷静になって考えれば車とか電柱とか作り出したところでゼロの不バ幸な結末ツドエンドには効果がないってわかりそうなものなのね。

・・・今は即死デッドエンドの結末だったつけ？

残りの寿命を切り捨てるってなかなかえげつない能力だと思うよホント。

もったも、寿命自体をなかったことにした俺には効果なかったけどね。

デッドエンド
ていうか他に即死の結末を回避する方法はあるんだろうか。

確かアイツは『生き物にとって最大の不幸を強制的に引き起こす能力』って言ってたよな。

・・・もしかして、自殺願望のあるヤツには効果なかったり？

ま、今更どうでもいいや。

俺は取り返しのつかない方法で即死^{デッドエンド}の結末を回避したんだしね。

「あー視線が痛い、消えたい。消しゴムになりたい、角がいつぱいあるヤツになりたい。それが無理なら紙飛行機になって誰かに飛ばされたい。そして飛ばされた挙句どっかの池とかに落ちてぐしゃぐしゃになって消えたい」

「何言ってるのよ、もうすぐ着くじゃない」

「ま、そうだね」

「けしごみゅ・・・けしごむってなんですか？」

噛んだよレイラ・・・スルーするけど。

「まあ、文字を消せる道具だよ」

「そうなんですか」

あ、紙飛行機はしってるんだね。

ていうかさすがにあるか紙飛行機くらいは。

「ところで、シキは一体何種類くらいの能力が使えるんだ？」

城について、中庭にあるトラック・・・エリスの秘密基地——（全然秘密でもないし隠れてもないのは内緒）で適当に喋っていると、エリスにこんな事を聞かれた。

うーん。

どのくらいなんだろうね一体。

数えたことわからんけどまあ・・・

「7932兆1354億4152万3222個の異常性アブノーマルと4925兆9165億2611万643個の過負荷マイナス、合わせて1京2858兆519億6763万3865個はあるかな。約一京だね」

安心院さんマジばねえっす。

ていうか俺は1京2858兆519億6763万3865個＋その他いろいろな能力で1000個くらい追加されるから1京2858兆519億6763万4865個の能力が使える感じかな。

「一京って・・・途方もない数だな」

「1京2858兆519億6763万3865種類も使えるんですか！？やっぱりシキさんはすごいんです！」

「一回言っただけで完全に覚えてるレイラの方がすごいと思うけど

ね」

きつと俺の元いた世界にいたら学年トップとか余裕だろうねこの子。

「でもアタシの能力を使えば何も使えなくなるんでしょ？」

「ま、そうだね。イマジンブレイカー 幻想殺しを使えばなんとかなるかもだけど」

その前に敵対するような事にはならないと思うけどね。

雪乃は敵に回したくない人の一人だし。

能力抜きにしても友達と戦うとか嫌だよね普通は。

ま、紅葉は例外だけだね。

アイツとは戦ってて楽しいからね。

54話 約一京（後書き）

こんにちは、最近oblivionというゲームにハマっているアヲネギです。

MODの導入の仕方がよくわからなくてちょっと挫折しそうですが
＼（＾o＾）／

誰も詳しい人がまわりにいないんで結構困ってるんですよね。
どうにかありませんかね？

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

55話 歪み

「あ！そろそろ時間です！」

みんなと喋っていると、レイラがそう言った。

あー・・・そういやパーティーとか言ってたね。

「じゃ、俺らはそろそろ行くよ」

「なんだ、シキも行くのか？」

「面白そうだしねー」

「ていうかユキノ達は服装はそのままか？」

「そうだけど、着替えたほうがいいかしら？」

「パーティーなんだろう？ドレスくらい貸してやる」

ま、俺はともかく雪乃が制服でレイラはよくわからんフードかぶってるし、着替えたほうがいいかもね。

てか着替えるとなると俺は先に行っとくべきかな。

「俺は先に行ったほうがいい？待っとくべき？」

「先に行ってください、場所は城の次に大きい建物だそうですよ！」

「おk、行ってくる。エリス、また明日な」

「うむ、また明日な！」

そう言って、俺は目的地に向かう。

・・・どうでもいいけど、昔はブレザー着た女子高生がやけに可愛くみえたのに、高校生になってみるとそうでもなかったなっと思ってるのは俺だけ？

・・・いや別に雪乃が可愛くないってワケじゃないよ？

『なに考えてんの君は・・・』

おおう、咲良か。

どう？今の俺に引いたりした？

『別に引かないけど』

マジか、意外だわ。

『・・・引いてほしかったの？』

いやいやそんなわけないよ。

引かれそうな事言ったのに引かれてないことにびっくりしたんだよ。

『いや、うん。まあ・・・だって君も男の子だし・・・うん』

なんでそっちが気まずそうやねん。

『こんなこと言ったら気まずくなるのは普通だよ!』

え、マジ?

ていうか咲良も結構人間っぽい所あるんだね。

『・・・元は人間だから』

そうなん?

てっきり生まれたときから神様やってんのかと思ってたよ。

『いろいろ事情があるの』

なるほどねー。

『あ、その建物じゃない? お城の次に大きい建物って』

え、マジ?

咲良に言われて俺は辺りを見渡す。

あー・・・アレか、あの建物か。

俺招待されてないけど入れんのかな。

『大丈夫なんじゃないの? よくわかんないけど』

いけるよね？

無理なら俺はあの屋敷の前で雪乃とレイラを待つよ。

あ、もしかして「俺招待されたんですけど？ねえ聞いて俺招待されてたんですけど？」みたいなオーラだして普通に入っていけば案外いけたりすんのかな？

『あのさ、君がよかったらなんだけど・・・』

どした？

『屋敷に入れなかったら、みんなが来るまでの間・・・久しぶりに会わない？』

おお、いいね。

あの屋敷に入れなかったらそっちに遊びに行くよ。

『うん、わかった』

——紅葉サイド——

「で、支配なんてして何の意味があるんだ？」

「・・・脱走を企画した『永命処理』ノーライフは「僕たちが世界を正さなければ、世界の歪みは大きくなりやがて来てはならないモノが来る」と言っていた」

世界の歪みって・・・ソレスタルビーイングのガンダムマイスター
かよ。

それに来ては行けないモノって何だ？

人間もかなりそれっぽい存在だとは思うんだが。

「歪みとは具体的にはどういう事ですか？」

「わからない。72回ほど詳しく聞こうとしたが、聞くたびに「まだ教える気はないよ」と言われてな。28回目くらいから「君はしつつこいな」と言われたぞ」

「結構細かく覚えてるんだな・・・」

「記憶力は自信があるぞ！」

【すごいね、いろいろと】

「話をまとめると、目的はわかりませんが世界を支配しようとして
いる人たちがいて、彼らを殺すのがクロさんの目的ということですね？」

「そうだな、そんな感じで間違っていないぞ」

【で、どうやって探すの？聞き込みはだめなんですよ？】

「いや、今お前だけが髪は黒くはないからお前が活動する分には問題ないな」

まあ、不快感だけは隠しようがないが。

それが原因でトラブルを起こしてもゼロくらいの強さなら力で捻じ伏せたりしてどうにかなるだろ。

「そうですね、私も今言おうとしました」

ゼロの髪の毛はなぜか今綺麗な白色だ。

能力を本来の能力に戻した副作用的なものか？

まあ、どうでもいいか。

【じゃ、決まりだね。オレは早速街に行くよ】

そう言ってゼロは立ち上がり、街の方向に歩いていく。

「モミジ、私たちはゼロの帰りを待っている間何をすればいいんだ？」

「そうだな・・・この周辺の搜索とかでいいんじゃないか？」

「はい、しかし三人固まって探すのはあまり効率的ではないと思います」

「ああ、私もそう思うがもし三人散らばって探していて発見した場合、勝てる可能性は決して高くはないぞ」

まあ、そうだろうな。

相手がどんなヤツか知らないが、相手がもし三人で行動してた場合、こっちが一人だと間違いなく負けるだろう。

「それなら私に考えがあります」

リンはさらに続ける。

「『私たち三人は今から24時間、戦闘で死ぬことができない』これで今から24時間は誰と戦っていても死ぬことはありません」

「それが、君の能力なのか？」

クロが少し驚いた様子でリンに聞く。

「はい、対象を強制的に私の定めた規則^{ルール}に従わせる能力。それが私の悪性規則^{デメリット・ルール}です」

55話 歪み（後書き）

こんにちは、キャベツが好きなアヲネギです。

ovlibionのMODの導入の仕方がようやくわかりました！
自由度の高いゲームはいいですね。

飽き性の自分でも長いことプレイできる気がします！

誤字脱字、わかりにくい所があれば教えてください。

56話 殺すぞ

——ゼロサイド——

さて、まさかのオレ一人で聞き込みって事になっちゃったけど・・・

【誰に何て聞けばいいのかなぁ】

そんな事を言いながらとりあえず街の方に歩いていく。

人付き合いがどうも苦手なオレには難しいかもね。

何でかなあ。今まで会ってきた人全員から「気持ち悪い、不快だ」
って言われてるんだよね。

【ホント、酷いよね】

初対面で気持ち悪いなんて酷い事を言っちゃダメだよ。
オレの機嫌が悪かったら殺しちゃうかもね。

【ま、そんな事どうでもいいや】

そんな事よりまず街に行かないとね。

【おや？】

正面から二人組みが歩いてくる。

一人は身長の高い黒い髪落ち着いた雰囲気の人で、もう一人は
白い髪の活発そうな女の子だ。

女の子の鳩尾辺りには大きい螺子が刺さってるね。

「んーっ！抜けない！」

「血は出てないな、痛くはないのか？」

「痛くないけど目立つじゃん！それに・・・」

「それに、何だ？」

「力が出ないの！これが刺さっていると！」

「戻るまでの辛抱だ。戻ればノアがどうにかして・・・ん？」

お？

オレに気づいたっぽいよ。

【やあ、随分面白い格好をしてるね】

「あ！さっきの子！」

【何言ってるんだい？君とは初対面のはずだよ】

「髪の色が違うな。自分達はい先ほど君とよく似た少年と会ったんだ」

落ち着いた雰囲気の方がオレに言う。

ああ、^{アイツ}四季の事かな？

「しかし君とあの少年はよく似ているな。だが、似ているのは外見だけと見た」

【どういう意味だい？】

「何をそんなに憎んでいる？」

【!？】

「こんなことを言うのは失礼だが、君からすごい嫌悪感が感じられる」

【はははっ！】

オレは思わず上を向いて額に左手を当てて笑ってしまう。
嫌悪感を感じるとは言われても誰かを憎んでるなんて言われたことはなかったからなあ

それに、誰にも気づかれなかったからね。

「なにも面白いことを言っただつもりはないんだが・・・」

落ち着いた雰囲気の方がそう言う。

【・・・いつ気づいた？】

オレはゆっくり左手を下ろし、落ち着いた雰囲気の方を向く。

「コイツ・・・気味悪い・・・」

白い髪の子が落ち着いた雰囲気の男の後ろに隠れる

【おいおいビビんなよ、それくらいの事なら言われ慣れてる】

そう言って一歩前に進む。

【それに、そんな台詞をオレは嫌というほど言われてきたからね】

そう言ってまた一歩前に進む。

【何回も何回も何回も何回も何回も何回も言われてる。慣れないほうが不自然だ】

「ひっ！」

「どうすればそこまで人を憎める？君に何があった？」

【言うつもりはないよ。でも気づかれるのは意外だったなあ。】

うーん

考えてることを見抜かれるってどうしてこんなに頭にくるんだろう。

【正直、誰にも言うつもりはなかったし誰にも気づかれないと思ってたよ】

「・・・それに気づいた自分を殺すつもりか？」

【ははっ！そんな物騒な事はしないけど、瀕死状態にはなるかもねえ！】

そう言ってオレは男に向かって一気に踏み込む。

「そういうまっすぐ突っ込んでくるところもあの少年と君は似てないな。もつとも、自分を相手にする時はどこから来ても同じではあるが・・・！」

【うわっ！】

何かが頭に当たって後ろに倒れる。

「全方位に死角がないのだけがオレの取り柄だね」

【はははっ！いいねえ！そういう反則じみた攻撃！】

そういつてまたオレは突っ込む。

「学習するんだな、同じ方法だと意味がないことくらいわからないのか？」

・・・今だね。

オレは横に飛んで、飛んでくる『何か』を避ける。

すると、さっきまでオレいた場所の足元に何かが当たって少し地面がへこむ。

「っ！？」

【残念だったね、唯一の取り柄がこんなあっさり見破られて！】

そういつてオレは男の腹を殴る。

男は殴られたことによりすこし前かがみになる。

・・・が、その直後にオレの腹に『何か』があたりオレが吹っ飛ばされる。

「・・・見破られるとは予想外だ」

そう言つて男はすぐに体勢を立て直す。

「だが」

【二度はない、だろ？その通りだよ。さっきオレが避けられたのは奇跡みたいなのだからね。二回もあんなことができるとはオレもおもっていないよ】

よかった、オレの能力はコイツにとっての天敵だ。

「大丈夫！？あんな気持ち悪いヤツやつつけきゃえ！」

後ろにいた白い髪の子が男に言う。

「・・・たとえ敵でも『気持ち悪いヤツ』なんて言うな」

「アイツにも、それなりの事情があるんだろう」

【ははっ！敵も大事にするやさしいヤツのつもりかい？残念ながら、オレはオマエみたいなヤツが大嫌いなんだよ】

なんか・・・どこかで聞いたような台詞を言っちゃったかな。

それでも、知ったような口を聞かれるのは我慢ならないなあ・・・！

「さあ、続きをやるぞ」

【・・・余裕ぶってんじゃねえよ。マジで殺すぞ】

上から目線のヤツも嫌いだ。

何も知らないくせに見下してんじゃねえよって思う。

「こないのか？ならばこちらから仕掛けるぞ！」

そう言ってもものすごいスピードでオレに迫ってくる。

もはや低空飛行だね。

オレとこの男の距離は約5メートルもあったのに一度も着地せずに飛んでくるなんてさ。

「自分は遠距離で戦うよりも近接戦闘のほうが得意でねっ！」

男はそういうとオレに回し蹴りを決める。

そしてオレは少し後ろに飛ばされてそのまま倒れる。

・・・アレ？

そういえば一度しか蹴られて無いのに二回衝撃があったよ？

「攻撃が当たった瞬間に能力を使っただけの追い討ちだ。まだ意識はあるか？」

エンブティ・エンペラー
【残念だったね。オレの虚無皇帝の前じゃそんな攻撃はほとんど意味がないよ】

オレは立ち上がり、服についた砂埃を払う。

「無傷・・・ではないな。何をした？」

【大したことじゃないよ、オレの痛覚を無に近づけた・・・まあ、オレの痛覚を無効化、一時的に痛覚をなくしたただだよ】

【全ての物質を消し去ることができて、物質以外の概念も含めた全てを無に近づけることができる。それがオレの『虚無皇帝』だよ】
エンブティ・エンペラー

56話 殺すぞ（後書き）

こんにちは、最近視力が落ちた気がするアヲネギです。
コンタクトって辛いですね。

メガネは似合わないのであまりつけたくないんです。

ゼロくん視点の書き方を普通に見ました。

能力も変わったので書き方も変えようかと思ったんです。
（台詞だ
けどと限界を感じたのは内緒w）

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

57話 あの世界

【はははっ！ここからはオレも能力を使わせてもらおうよ！】

「そうではなくては不平等だ、来い！」

オレは男との距離を走って詰める。

「一直線に来ても同じだよ」

男が何かをオレに向けて放ったんだろうね。

まあ・・・

【意味ねえよ】

そして男の頬を殴る。

男は少し後ろに下がる

「っ!？」

【何を飛ばしてるのかわからないけど、人や地面に当たるってことは物質なわけだ】

「・・・消したのか」

【その通り！オレは君にとっての天敵なわけだ】

さらに追い討ちをかけるように今度は横腹を蹴る。

「ぐっ・・・！」

男はその場に倒れる。

弱いなあ、この程度でオレの気持ちを理解した気になられてたなんてね。

ちょっと我慢ならないよ。

【ほら立ちなよ。意外とまだオレは怒ってるんだからさ】

能力をつかってこの男の体重を無効化して、この男の胸倉をつかんでもちあげる。

・・・面白くないなあ。

まったく抵抗しないよコイツ。

【で、さっきから怯えてる君はなにもしないのかい？ 仲間が殺されるのを見てるだけかい？】

螺子の刺さった白い髪の子に問いかけてみたけど、頭を抱えてしゃがみ込んで震えてるだけでまったくオレの言った事には反応しない。

【はぁ・・・オマエの仲間もなかなか薄情だね】

そう言って俺は男をさらに持ち上げて、一気に地面に頭からたたきつける。

もちろん地面に触れる前に能力は解除してあるよ。

すると地面には小さなクレーターができて砂埃が舞う。
男の姿は見えないけど、まあ死んでるでしょ。

【・・・あれ？】

なぜか男は無傷で倒れていただけだった。

おかしいな、結構おもいきりやったのに。

頭が潰れてもおおかしくないとおもうんだけどなあ。

「君は頭が悪いのか？」

【え？】

男の声が聞こえた瞬間、男に頭をつかまれる。

「地面に触れる直前に能力を地面に向けて放ってダメージをほぼ無くした」

なるほど。

つまり、地面にぶつかる瞬間に地面に向けて『何か』を放って衝撃を打ち消したってことかな？

ふむ。

もうほぼ確定かな。

コイツはあの子が言ってた『五十二種』の一人だね。
そんで多分後ろの子も『五十二種』だろうね。

「君はもう終わりだよ、殺しはしないが」

そう聞こえた直後、頭にもものすごい衝撃が連続できた。
まあ、痛みはないんだけどね。

【うおっ・・・ちよまつ・・・！】

それでも驚くときはあるよ。

「ゼロ距離連続射撃だ、気絶するまで続けさせてもらうぞ。君は危険すぎるからな。」

ヤバイよ。

ゼロ距離だとエンブティ・エンペラー虚無皇帝は間に合わない。

今はエンブティ・エンペラー虚無皇帝の効果で痛みを感じないだけでダメージはちゃんとあるからね。

【う・・・ぐあっ！】

うわ、頭から血が出てるよ。

「はやく気絶してくれないか？自分はまだ戦うのは好きじゃないんでねッ！」

【うあああああああっ！】

【なんて言うと思った？】

そうやってオレの頭を掴んでいる男の腕を掴む。

まあ、まだ頭に『何か』を撃たれ続けてるんだけどね。

【聞いた話だけど、オマエの使っている能力は魔力の使い方の一つではないんでしょ？】

「なるほど、君は彼女と接触したのか。だがそれを知ったところでこの状況がどうにかなるわけでもあるまい」

【どうにかなっちゃうんだよねそれが。オレの能力は全ての物質を消し去ることができて、物質以外の全てを無効化、無力化することができるって言ったじゃないか】

ようやく気づいたのか、男がオレの頭から腕を勢いよく離す。

それにあわせてオレも男の腕を放す。

「まさか・・・」

【気づくのが遅すぎるよ。一時的にとはいえ、オマエの魔力を無力化させてもらったよ】

ゲームとかでいうMP封印みたいなものかな。

魔力が使えない以上、能力の使用も不可能のはずだ。

【限界があるっていうのは悲しいねえ。無限に能力が使える人間がうらやましいかい？】

「・・・なんのことだ？」

【魔法は使えない、それにまともな能力も使えない。不便だねえ五十二種ってのは。誰よりも下の存在だ】

男は黙って聞いている。

【悲しくならんのかい？それに『世界を正す』なんて言ってるけど、そういうことができるのは昔から強いヒトだって決まっているもんだよ。オマエ達は強くないしヒトですらない】

「そうだな、確かに君の言う通りだ自分達は戦えるだけで決して強くはないし人ですらない」

【理解しているのなら余計にわからないなあ。何でそんなふざけた真似をしようとするんだい？】

「自分達にしか・・・いや、彼にしかできないからだ。だから自分達は彼に協力する」

―喋りすぎだよ―

頭に声が響く。

なにこれ？

気持ち悪いなあ。

―反存在の相手をしている暇なんて君達にはないんだよ。早く戻ってくるんだ―

反存在？
アナザ―

ああ、オレの事か。

【どこにいるんだい？それにどうやって話しかけてるのかも気になるなあ】

―答えるつもりはないよ―

【そうかい】

「ノアか。遅れてすまない」

―構わないよ、君もいつまで怯えているんだい？―

「あ、え？ノア？」

うん？

この、頭に響く声の主はノアっていうのかな？

―そうだよ、そんな事より『あの場所』をようやく見つけたよ―

「そうか、なら自分は次に何をすればいい？」

―今は言えないな。とりあえず戻ってくるんだ―

【なにやら気になる単語が結構あったけど、無事に帰れると思わないことだね】

―『君は今から10分、能力を含めた全ての行動ができない』―

【っ！？】

なっ・・・え？

—ほら、今のうちだよ—

「ああ、すまない。ほら、行くぞ」

「あ、うん！」

57話 あの世界（後書き）

こんにちは、3連休で調子に乗ってるアヲネギです。

気がつけばもうすぐ60話です。

はやいですねえ

確か3月頃に書きはじめて、もう9月です。

時間が経つのも早いですねw

この6ヶ月の間に友人も小説を書きはじめていろいろありました。

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5991r/>

チートな高校生が異世界でがんばるようです

2011年9月19日22時58分発行